

博士論文 (要約)

韓国における都市自然地の保全管理の特質と伝統的楽しみ方
に関する研究

パク・ウンビョル

目次

第1章. 序論.....	1
1. 研究の背景と目的.....	2
2. 研究の対象地.....	6
3. 既往研究と本研究の位置づけ.....	7
4. 言葉の概念と定義.....	12
5. 研究の構造.....	16
6. 補注及び引用・参考文献.....	18
第2章. 近代以降の都市自然地の保全活用.....	23
1. 本章の目的と調査方法.....	24
1. 1. 本章の目的.....	24
1. 2. 本章の構造.....	24
1. 2. 本章の調査方法.....	25
2. 近代以前の都市自然地.....	26
3. 近代以降の都市自然地の保全活用の取り組みの変遷.....	29
3. 1. 韓国における近代以降の都市自然地の保全活用の取り組みの変遷.....	29
3. 2. 日本における近代以降の都市自然地の保全活用の取り組みの変遷.....	37
4. 問題と課題.....	44
5. 補注及び引用・参考文献.....	46
第3章. 都市自然地における保全活用に関する制度の現象と運用.....	49
1. 本章の目的と構造.....	50
1. 1. 本章の目的.....	50
1. 2. 研究の構成.....	51
2. 本章の調査方法と対象地.....	52
2. 1. 調査方法.....	52
2. 2. 対象地と都市自然地の概況.....	53
3. 土地利用システム.....	55
4. 都市自然地における保全活用に関する制度.....	57

4. 1. 韓国の制度.....	57
4. 1. 1. 法律による制度.....	57
4. 1. 2. 広域自治体の法規による制度.....	62
4. 1. 3. 基礎自治体の法規による制度.....	63
4. 2. 日本の制度.....	65
4. 2. 1. 法律による制度.....	65
4. 2. 2. 広域自治体の法規による制度.....	69
4. 2. 3. 基礎自治体の法規による制度.....	72
4. 3. 両国の特質.....	78
5. 考察.....	81
6. 補注及び引用・参考文献.....	83
第4章. 文学作品からみた都市自然地での伝統的楽しみ方.....	85
1. 本章の目的と構造.....	86
1. 1. 本章の目的.....	86
1. 2. 本章の構造.....	87
2. 本章の調査方法.....	88
2. 1. 分析対象の選定.....	88
2. 2. 本章の調査方法に関する既往研究の考察と分析枠の設定.....	90
2. 2. 1. 朝鮮時代における名所の特質の分析方法について.....	90
2. 2. 2. 本研究における分析方法.....	92
3. 自然系名所における楽しみ方と立地.....	96
3. 1. 古文獻の記述内容.....	96
3. 2. 自然系名所における活動と楽しみ方.....	103
3. 2. 1. 観賞活動（対象と方法）.....	103
3. 2. 2. 補助活動.....	106
3. 2. 3. 自然系名所での楽しみ方.....	108
3. 3. 自然系名所の分布と立地.....	111
3. 3. 1. 分布.....	111
3. 3. 2. 立地.....	112
3. 4. 自然系名所での楽しみ方と立地の関係性.....	113
4. 結論.....	116
4. 1. 既往研究から見る日本の江戸名所での楽しみ方の特質.....	116
4. 2. 韓国における都市自然地での伝統的楽しみ方の特質.....	118
5. 補注及び引用・参考文献.....	120

第5章. 結論.....	124
5. 1. 論文のまとめと考察.....	125
5. 2. 今後の課題.....	129

表目録

<表Ⅱ - 1> 朝鮮時代後半における漢陽の主要山の自然環境	26
<表Ⅱ - 2> 韓国の都市自然地の保全活用に関する法制度の沿革	28
<表Ⅱ - 3> 韓国の都市自然地の保全活用に関する法制度の沿革	36
<表Ⅱ - 4> 日本の都市自然地の保全活用に関する法制度の沿革	43
<表Ⅲ - 1> 対象地の概況.....	53
<表Ⅲ - 2> 韓国における法律による制度の特質.....	60
<表Ⅲ - 3> 韓国における広域自治体レベルの制度.....	62
<表Ⅲ - 4> 韓国における基礎自治体レベルの制度.....	64
<表Ⅲ - 5> 日本における法律による制度の特質.....	67
<表Ⅲ - 6> 日本における広域自治体レベルの制度.....	70
<表Ⅲ - 7> 日本における基礎自治体レベルの制度.....	74
<表Ⅲ - 8> 日本における基礎自治体レベルの制度(保存樹林など含む).....	77
<表Ⅳ - 1> 分析対象資料一覧.....	88
<表Ⅳ - 2> 分析対象とする自然系名所の一覧.....	89
<表Ⅳ - 3> 古文献の分析を通じた景観分析に関する研究.....	91
<表Ⅳ - 4> 本研究で景物の観賞方法に関する区分と対応する文章表現等.....	94
<表Ⅳ - 5> 名所ごとの古文献の記述内容.....	97
<表Ⅳ - 6> 景物ごとの観賞の対象と方法.....	103
<表Ⅳ - 7> 景物ごとの絵図の例.....	104
<表Ⅳ - 8> 名所ごとの補助活動.....	106
<表Ⅳ - 9> 観賞活動ごとの補助活動.....	107
<表Ⅳ - 10> 自然系名所の楽しみ方と立地の総合表.....	110
<表Ⅳ - 11> 名所ごとの立地.....	112
<表Ⅳ - 12> 地形と楽しみ方.....	114
<表Ⅴ - 1> 都市自然地における近代期の立地や考え方の変化.....	126

図目録

<図 I - 1> 現代の都市自然地を取り囲んでいる問題.....	3
<図 I - 2> ソウルの行政区域の変化と本研究での研究範囲.....	6
<図 I - 3> 自然系名所の例.....	13
<図 I - 4> 本研究で「楽しみ」の概念.....	14
<図 I - 5> 階層及び日常性による自然での楽しみ方.....	15
<図 I - 6> 自然地での楽しみ方のイメージ.....	15
<図 I - 7> 本研究の構造.....	17
<図 II - 1> 第 2 章の構造.....	24
<図 II - 2> 都城図.....	26
<図 II - 3> 四山禁標圖.....	28
<図 II - 4> 京城府公園計画地図.....	30
<図 II - 5> 都市公園配置模式図.....	31
<図 II - 6> 用途地域の計画.....	32
<図 II - 7> ソウル特別市開発制限区域.....	33
<図 II - 8> 東京緑地計画図.....	38
<図 II - 9> 東京防空空地及び空地帯図.....	38
<図 II - 10> 復興計画緑地及び公園図.....	40
<図 III - 1> 第 3 章の構造.....	51
<図 III - 2> ソウル市と京畿道の土地利用.....	54
<図 III - 3> 東京都の土地利用.....	54
<図 III - 4> 韓国の土地利用体系.....	56
<図 III - 5> 日本の土地利用体系.....	56
<図 III - 6> 行政間の法制度類型と運用主体.....	79
<図 IV - 1> 第 4 章の構造.....	87
<図 IV - 2> 分析対象になる名所の選定の流れ.....	89
<図 IV - 3> 名所の景観特性の分析例.....	93
<図 IV - 4> 本研究で地形区分の流れ.....	95
<図 IV - 5> 自然系名所の分布.....	111
<図 V - 1> 今後の都市自然地に対する制度と行政の役割分担のイメージ.....	129

付録目録

付録 1. 緑化・緑地保全に関する条例等の制定一覧と保全地区等の指定状況.....	128
付録 2. 自然系名所での活用に関する記録内容.....	132
付録 3. 各名所に関する絵画の目録.....	150
付録 4. 四季の景物と名所数.....	151

第 1 章. 序論

1. 研究の背景と目的
2. 研究対象地
3. 既往研究と本研究の位置づけ
4. 言葉の概念定義
5. 研究構造
6. 引用・参考文献

第1章. 序論

1. 研究の背景と目的

近年、高齢化の進展や国民の健康志向、レクリエーション活動に対する関心の高まりを背景に気分転換や健康づくりの場として、公園だけでなく森林、農地、草地、遊休地など都市内の様々な自然地（以下、都市自然地）が注目を集めている。このような新しい動向に対応して、従来に都市自然地が持つ保健休養、教育、景観的装置、地域文化の形成など多面的機能高度に利用しながら、継続的に資源を管理するための視点が要求されている¹⁾。

韓国は、全国土の対比、森林面積が約63%を占める森林大国の中一つで、豊かな森林資源を持っている。首都であるソウルの場合、人口が密集している都市域であることにもかわらず、市街地の周りに森林域が位置しており、林野、農地、草地、河川などの自然地が都市の全体面積の約27.16%²⁾を占める自然環境が豊かな都市である。なお、かつて風水地理に基づいて都市が立地したため、都市周辺に多くの山と江が隣接して昔から人間と密接な関係を形成してきた。朝鮮時代(1392~1910年)には、近郊の谷、山麓、河川、都市の広場などの都市自然地が自然系名所³⁾として利用され、四季を通じて異なる階級、階層の人々が様々な活動を楽しんだ記録が残されている。これらの場所は、“行楽”、“道楽”など、人と自然との触れ合い場⁴⁾として現代の都市公園のような余暇の場の機能を遂行し、韓国人には情緒的、信仰的空間として認識されてきたものである。なお、このような当時の韓国における主要な都市の住民は、都市周辺の自然系名所において花、溪流、月、冬景色などを単に優れた景観を觀賞するだけでなく作詩や飲食を楽しんだほか、花木の植栽や樹木の保護にも努め、韓国都市部の自然系名所は利用され管理されてきた歴史を持つ。

しかし、西洋が徐々に近代化を成したのとは異なり、東アジア世界は門戸開放を契機に急速に近代化を目指すようになった。これは、いわゆる“ウエスタンインパクト(western impact)”という現象を起こし、近代と伝統という区分を形成した⁵⁾。韓国で近代⁶⁾以後、日本による植民地支配(1910~1945)と韓国戦争(1950~1953)、経済開発(1960~1970年代)など国内外情勢の影響によって社会の様々なところで変化が起き、特に近代期の植民地文化と西洋文化の流入により、韓国の社会・文化的側面が大きく変動した。都市の周囲に存在した多くの亭、山に自生した松林は日本式の施設や別の樹種に置き換えられた。さらにその後、韓国戦争中、多くの山寺や伝統庭園が戦火により失われた。1960年以降には近代化の過程で無秩序な都市開発により建築物が乱立し、1990年代後半までその状態が続いた。その中、都市計画の策定による都市公園の登場は、人々の自然に対する要求や景観認識を変える契機になった。当時、都市公園において、

欧米都市での配置や一人当たりの面積などを目標基準と設定することによって、公園の量的確保と公平な提供を目指して都市公園が配置された。しかし、これは、誘致距離による標準配置を目指したもので、結果的に、地形の潜在的価値は無視され、それによって提供される自然と緑が均質化される限界も残すことになった⁷⁾。また、計画及び造成、管理の効率性や効果を高めるため、都市域において自然地を“存在価値”と“利用価値”の両側面から検討し、各々の取り扱いや整備のあり方など空間的な側面についても検討された。そして、利用価値よりも存在価値が重視される自然地に対しては、開発から広域の自然地を守るためにより規制的な制度が適用された。つまり“開発”又は“規制”、“利用”又は“保護”という対立される二つの概念による二分法的な考え方を基本として取り扱いや整備が検討されてきたと言える。

しかし、現代において多くの都市自然地は、実際には、放置及び毀損による自然の減少や体系的管理の不備など維持管理上の問題、また、利用の単純化や都市自然地の均質科化など解決すべき課題が顕在化してきており、適切な維持管理と活用の必要性に対する認識が十分でなかったということも考えられるのではないか。



図 I - 1 現代の都市自然地を取り囲んでいる問題⁸⁾

一方、都市域における多くの自然地は、原生自然とは違い、多くが二次的な自然によって構成されているため、本来、適切な人為的管理が不可欠なものである。かつては、このような都市自然地は適切に保全管理しつつ、その中での自然発生的な利用が豊かに行われていたと言われている。

都市自然地において、人為的に役割及び機能の区分がされてなかった時代に、人々がどのようなところで、どのように自然と触れ合ってきたのかを調べ、その場所的、活動的特質を明確にすることは、放置されている都市自然地の保全管理及び活用にも示唆を提供できると考えられる。なお、近年、都市自然地に関する制度の変更などの動きがあり、その見直しに際しては都市自然地が持つ複合的価値をより深く理解する視点が重要である⁹⁾。都市自然地は、その立地や状態に応じて、鑑賞性、歴史性、学術性などの価値を有するほか、社会やコミュニティの再生等にも価値を有するものも存在する¹⁰⁾。こうした多様な自然の価値や人々との触れ合いを引き出すためには、都市自然地の利用方法を画一的に提供するのではなく、利用の多様性を許容するとともに、通時的に都市自然地の利用を把握し、歴史的経緯を理解する必要がある。

都市自然地に求められる役割は社会環境、時代背景によって変化しており、どのような都市自然をどのように利用し楽しんできたのか、その歴史的経緯を把握したうえで、現状の課題を明確にし、政策にも結び付けていく必要がある。そして何より、持続的に管理されるためには、市民が身近な自然を楽しみつつ、その多様な価値を理解したうえで、協働して保全を図っていくことが重要である。このように都市住民が、都市自然地の有する多様な価値に対する認識や理解を深め、その立地や状況に応じて多様にふれあっていくという好循環が、人々の生活質をたかめるとともに、自然環境の風景的価値をも高めていくことに結びつくと考えられる。さらに、より実効性のある保全活用の方案の導出するためには、現代において都市自然地の根本的問題と今後の課題を明確に認識した上に、都市自然地が持つ歴史的・文化的価値が考慮されるのが必要であると考えられる。その上、こうした都市部における自然地の保全活用のあり方を考察しようとするものである。具体的には、以下のように主要な研究目的を設定する。具体的には以下の4点を目的にした。

- ① 韓国のソウルの都市自然地において、近代以前からの保全活用に関する取り組みの変遷を調べることによって、論文の冒頭として、現代の都市自然地における構造的な問題点を明らかにし、課題を導出することで、3章と4章の論旨の基盤としたい。
- ② 現在の都市自然地に関する諸制度において、中央政府と地方政府の行政のレベルごとに制度の制定及び運用状況を検討し、維持管理と利用・活動の実態を整理することで韓国における制度的特質を明らかにする。
- ③ かつて、都市自然地で多くの人々が自然との触れ合いを行っていた場所を自然系名所として命名し、そこでの楽しみ方を明らかにし、楽しみ方と立地との関係を確認する。

- ④ 第2章から第4章までの内容をまとめ、韓国の都市自然地において、伝統的楽しみを考慮した活用の可能性と、保全活用側面に関する今後の方向性を考察する。

本研究では、韓国の都市自然地において、制度的特質と伝統的な楽しみ方を明らかにすることを最終の目的にしている。そして、そこに至るため、第2章から第4章まで、韓国における状況の把握・検討を中心にしながらも、比較対象として日本の状況を参照しながら、韓国の特性を検討するという構造をとっている。

韓国は、都市自然地に関する法制度が他国に比べ、日本のものと類似する点が多いため、韓国における現在に至るまでの法制度の特質を把握する課程で日本のことを一緒に考察することで、より韓国の特質を明確に把握できると考えた。

2. 研究の対象地

前述したように、韓国の伝統都市は、基本的に山と江を始めに、豊かな自然環境に隣接して現代都市として成長してきた。その中、本研究では、かつてから、制度的変化が多く、もっとも多くの人々が集中してきた首都であるソウルを研究の対象地として取り上げた。

ただ、図 I - 2 のように時代に応じて、ソウルの範囲は、拡大してきている。朝鮮時代の首都である漢陽（ハニャン）は、都城内は 16.5km² と城底十里と呼ばれる外側の約 234.1km² で約 250km² であった。1914 年には、行政区画の改編によって一旦 36.2km² に減ったものの、その後数回の変更・拡大され、現在は、605.24km² になった。本研究は、都市域における自然地での制度的、利用的特質を把握しようとするため、時代による都市域の拡大に応じて、対象範囲も変化することになる。

研究の時間的範囲は、朝鮮時代から現代とする。韓国で近代以前である朝鮮時代は、外部からの影響を少なく受け取り、韓国人らしさを考えられると判断されており、身近な自然地でのレクリエーションの活動が日常的に活発に行われていたと言われる。

そこで、各章ごとにみると、まず、都市自然地に関する法制度の分析や考察をする第 2 章と第 3 章では、各時代のソウル及びその周辺域が研究対象地になり、都市自然地での伝統的な楽しみ方を分析した（第 4 章）においては現在ソウルの一部であった漢陽（ハニャン）を範囲にした。

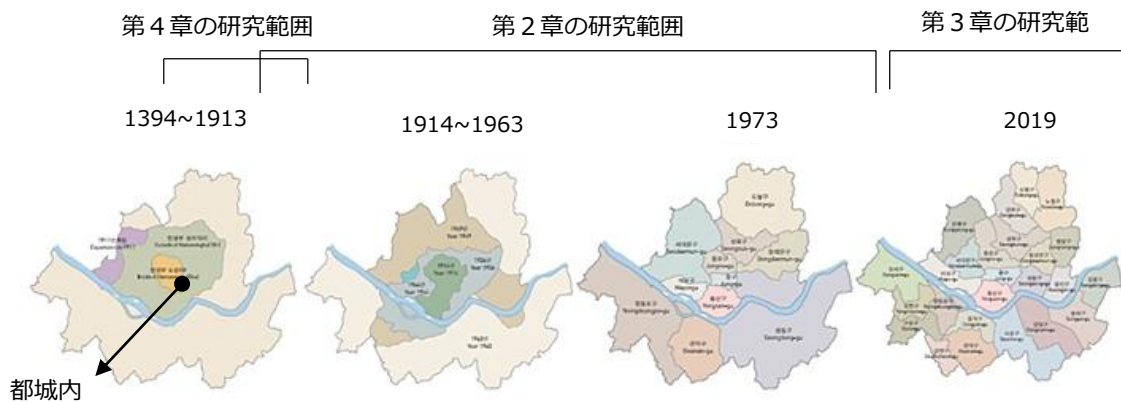


図 I - 2 ソウルの行政区画の変化と本研究での研究範囲¹¹⁾

3. 既往研究と本研究の位置づけ

3. 1. 都市自然地の保全管理に関する研究

韓国で都市自然地に関しては、生態的側面の研究、関連政策の研究などが行われてきており、1990年代に入っては、環境問題への関心の増大と共に都市内緑地の質的な側面の重要性が強調され、保全管理に関する研究が増加している。

生態的側面では、都市自然地での植生像など自然環境を調査・分析して生態的価値を把握し、保全管理の方案を提示する研究が主に行われた。また、保全管理の方法として政策研究では、米国、ヨーロッパ、日本など海外の公園緑地に関する制度及び政策の特質を考察し、国内の実情に合う方法を提示しようとした研究が多く行われており、特に、緑地関連制度のシステムが類似する日本を対象とした制度の研究が多数行われてきた。2000年代前半までは主に日本の全体的な緑地システムに関する研究^{12) 13)}が行われており、近年には、都市内緑地の管理に関しても官民協働の重要性が強調され、借地公園や民設公園、市民緑地など制度の導入の背景や問題点、課題等に関する示唆を導出する研究^{14) 15) 16) 17)}も行われた。これらの研究は主に中央政府レベルの法制度に関するもので、中央政府レベルの制度を定着させていく上では多くの示唆を提供しているものの、中央政府と地方政府の役割関係がどのように設定されているかどうかについて論じている研究は見られない。

また、これまで都市内緑地に関する既往研究を見ると、都市公園を対象とした研究が主をなしており、都市公園の造成及び管理方策や利用形態についてさまざまな側面から研究が行われてきた。しかし、最近の都市公園だけでなく、森林、農地、草地、遊休地などの緑地が持つ多面的機能の重要性が強調され、都市内のさまざまな種類の緑地を研究対象とする研究^{18) 19) 20)}も見られるようになっており、都市計画施設として設置されている公園と緑地を除く緑地を含んですべてが研究対象となっている。都市計画施設以外の緑地に関しては、主に法制度の研究が行われており、自然緑地地域や開発制限区域、都市自然公園区域などのような都市の大規模な緑地を保護するための制度の運用及び限界などを考察して示唆を提供する研究^{21) 22) 23)}と民有緑地の保全及び活用のための緑地活用契約制度に関する研究²⁴⁾などが行われた。このように、個々の制度の運用に関する研究が行われたが、都市計画施設以外の緑地に適用されるいくつかの制度について包括的に検討した研究は見られない。

一方、日本では都市公園だけではなく、地域制緑地について、土地利用・景観・生態系評価や保全管理システム、管理手法などの側面で多様に研究が行われてきた。その中、複数の地域制緑地制度を総合的に対象としている研究では、地域制緑地制度による緑地

の担保力を評価する研究が行われており、竹内智子（2011）²⁵⁾ は、法律による制度と自治体の条例による制度が担保力には差を見せているが、条例による制度も保護・保全のための緑地確保の手段としては、効果的なものと評価した。特に、2000年代以降、自治体レベルでの動きについての研究が多く行われたが、自治体の条例や制度の特性、運用実態などの事例研究や、自治体の条例による民有緑地保全効果を検証した研究など、自治体レベルの緑地保全施策の研究が行われている。三瓶由紀・武内和彦（2005）²⁶⁾ は、東京都を対象に都市近郊緑地の保全に関する条例の規定内容を分析し、保全制度の特性と有効性を検討し、関連条例を住民主導型の行政指導型に区分した。新山佳菜子・土屋俊幸（2014）²⁷⁾ は、二次的自然環境を対象とした保護地域について注目して、東京都の独自の保全制度の運用において自治体と民間、土地所有者の役割を見て、各主体の役割に差があることを導出した。青島一樹ら（2010）²⁸⁾ は、自治体条例による実効性の評価が適切に行われなかったという問題を認識し、東京都の八王子市を対象に実効性を分析した。補助金の支援と行政の積極的な対応、土地所有者の条例の理解と保全意識の向上などを保全緑地確保の主な要因として導出し、様々な保全主体の協働方案の模索を課題として提示した。

また、地域制緑地について行為規制以外に、実際に緑地をどのように管理して利用するかについても議論が行われており、これに関連して主体間の役割や地域住民の参加の必要性などを論じる研究が主をなしている。地域住民の参加による緑地の保全管理の事例研究では、自治体が市民団体及び地域住民と連携した保全管理活動が都市内の樹林地など緑地の保全に有効であり、制度の運用にも効果的なことを検証し²⁹⁾ ³⁰⁾、近年には、実際の保全管理活動で市民参加による自然資源の調査、管理などに関する研究³¹⁾ ³²⁾ ³³⁾ も行われている。荒金恵太ら（2018）は、近年、都市部で生物多様性が重要視されているにもかかわらず、地域の生態系や生物多様性の実態を把握している自治体が非常に少ないことを問題として指摘した。そして、有効な手段として示されている市民参加型の生物調査が地域の予算確保などの問題の解決や基本計画との連携に有効であることを確認した。平原俊・土屋俊幸（2017）は、自然資源管理の制度化が市民活動に与える影響を調べ、各団体や各個人のニーズを実現することができる柔軟な管理方案が必要であることを導出した。

既往研究の動向を踏まえると、現代社会で、緑地の保全や活用を促進するための官民協働の重要性は日々強調されており、緑地を管理する上で、自治体の役割の重要性が高まっているだけに、都市計画施設以外の緑地管理に関する制度の運用にも望ましい役割分担についての考察が必要である。

3. 2. 都市自然地における楽しみ方（レクリエーション、行楽等）に関する研究

都市自然地において、レクリエーション活動側面で行われた研究を見ると、主に現代市民の利用形態と動機、満足度、選好度などを調査した研究が多く、特定の都市自然地の訪問者を対象に実施したアンケート調査や利用形態の観察などを主な手法とする研究が行われてきた。また、利用形態を物理的環境、社会的環境などの条件と一緒に考慮して、休養地として都市自然地の価値を究明する研究も多数行われた。その他、都市自然地のタイプに応じて利用形態の違いを調べたり、空間を区分して利用形態を調査した研究も進められており、Kwon et al. (2004)³⁴⁾ は、山岳型と公園型の便益の差を究明しようとし、都市公園の利用客を対象に、健康、環境、社会心理、経済的便益を評価して、山岳型都市公園の便益が都市近隣型都市公園より高い結論を導き出した。Kang et al. (2014)³⁵⁾ は、ソウル市の生活圏の都市自然地の種類と規模に応じた利用形態を比較するために都心の小規模な山と郊外の大規模な山の利用者を対象に利用形態を調査し、その違いを調べた。また、Kim (2015)³⁶⁾ は、ソウル市の近郊型都市自然地の空間活用及び余暇利用の実態を調べており、周辺の立地状況や制度的特性などの条件を考慮して圏域を7つに分類し、立地施設と利用者の利用形態を調査した。山岳型と都市型又は都心の小規模と郊外の大規模などの都市自然地のタイプを分類したり、ある都市自然地の中で物理的な条件に応じて空間を区分して調査するなど、対象の設定において、様々なアプローチが試みられているが、現在の利用者を対象にアンケート調査を通じて満足度や動機などを調査しているものの、場所の特性などとは関係なく、類似している結果が出ている。

一方、近年には、都市自然地を良く保全管理し、豊かな利用を引き出すための方法で、都市自然地が持つ価値を時系列又は、過去の視点で把握することによって伝統的文化を理解し、文化的・歴史的価値を探究する研究も行われている。

過去の視点で、伝統的な都市自然地での楽しみ方（余暇、行楽等）を把握するためには、かつて朝鮮時代の自然地での活動に対する考察が必要である。これに関しては、美術学、観光学、建築学、造園学、国文学などの様々な分野で関連研究が行われてきている。特に、2000年代以降、古文書の分析を通して、自然の風景地のタイプを区別したり、価値や円形を把握し、保全と管理の重要性を示唆したり、今後の都市開発における示唆を提供する研究³⁷⁾ ³⁸⁾ などが着実に進められてきており、特定のテーマに関する名所や特定の自然環境を有するスポットを対象に古文書を分析して、地形や景観の要素は、利用形態などを把握することにより、現代の行楽や都市計画に示唆を提供しようとした研究³⁹⁾ ⁴⁰⁾ も行われている。

また、時系烈的に接近した研究としてChae (2016) は近郊山としての冠岳山の多元的価値の変化を時系列的観点から調べて近郊山の価値の確立と持続可能な管理及び利用のための方案に対する示唆を導出した。Kim (2013) は韓国で自然の近代化と象徴的場所をテーマに都市計画と整備において風土学的接近方法を考察した。このような方法は一元化された観点で解釈することに対する限界を克服し、共存する多様性の原因と結果を把握する長所がある⁴¹⁾。Hwang (2009)⁴²⁾ と Park (2015)⁴³⁾ は、韓国の行楽文化、名所の特徴などを把握するために、朝鮮時代から現代に至るまでのスポットの分布を整理し、近代化や都市開発によって、過去の自然地で、主に行われた行楽活動の場が変化してきたことを明らかにした。

総合すると、朝鮮時代に漢陽の自然地における人びとの伝統的な自然との触れ合い活動に関する既往の知見をみると、古文書から漢陽の名所を把握、整理した研究、自然の楽しみ方とその対象空間等を明らかにした研究があり、韓国の生活文化、自然系名所の時代的変遷、現在のソウルの歴史文化資源の整理に繋がっており、本研究にとり示唆も多い。また、名所の景観構造に関わる研究成果は蓄積があり、景観構成要素を自然と人工、大地形と微地形に区分して特性を論じたもの、景観把握モデルによって山水画を分析し、景観構造を明らかにしたものがある。しかし、名所の楽しみ方の国民性、多様な地形を持つソウルの地理的特徴を考慮すると、漢陽の自然系名所の楽しみ方を歴史的に理解することにも意義を見出せる。

都市周辺で、季節の景物を中心とした楽しみは、東アジアの人々と自然との関係における特質的で重要な側面である可能性があり、日本では、近代以来の都市緑地を取り巻く課題を考える上で、1990年代以来、自然と触れ合いが豊かであった江戸期の自然系名所の空間的特質や人々の活動について研究が蓄積されてきた。日本の近代における都市緑地をめぐる諸問題を考慮して、江戸時代(17~19世紀)の注目される自然の場所における空間的特質と人々の活動について研究が行われてきた。代表的なものとして小野(1993)の研究⁴⁴⁾がある。小野は近代の合理主義の枠組みの中で定義しにくい“自然と人間、文化の関係をどのように空間的に解くことか”を論じるにおいて、日本の近世である江戸時代の人々がどのような空間でどのように自然と関係を結んできたのか検討した。その結果、行楽の場所を決定するのは花、昆虫、草などの景物であり、季節ごとに様々な行楽の名所が存在することを明らかにした。その他にも、江戸時代の名所が近代化によって都市や文化が変貌する前の日本独自の文化的特性を示すという点に注目して、古文書の分析を通して名所の魅力と立地、地形の特性を把握した研究、都市周辺の森林などの自然地でのレクリエーション場を計画するにおいて、自然地の原風景を考察して示唆を提供した研究などが行われてきた^{45) 46) 47)}。

3. 4. 既往研究の総括と本研究の位置付け

これまで述べた既往研究の考察を総括すると、①研究対象として都市公園のような都市計画施設以外の都市自然地に関する包括的な視点での研究が不十分であること、②生態的価値又は保全管理に関する研究に偏っており、利用的側面の研究が限定的であること、③伝統的行楽に関する研究で地形と関連して楽しみ考察した研究が不十分であることが分かった。

これを踏まえ、本研究は次のような研究の位置づけを示す。

今後、保全と活用の順応的構造を取りながら、今日の都市自然地での画一化された利用から抜け出し、より多様な余暇活動を引き出すために新しい観点からのアプローチが必要である。そこで本研究では、現代の都市自然地に取り囲んでいる問題の根本的な原因を把握し、今後の望ましい保全活用方案を提示するため、通時的観点から研究を行う。また、現代社会で、緑地の保全や活用を促進するための官民協働の重要性は強調されるようになっており、緑地を管理する上で、自治体の役割の重要性が高まっている。したがって、都市計画施設以外の緑地管理に関する制度の運用にも望ましい役割分担についての考察が必要である。

4. 言葉の概念と定義

4. 1. 都市自然地

一般的に「自然地」と言えば、狭義では植生が被覆する土地から、広義では敷地規模にかかわらず建物及び構造物が存在しない土地として、水面・公園緑地・森林・農作地・河川などの自然要素に覆われたオープンスペースを意味する。このような自然地は、防災効果、癒し効果、農作物の提供、審美的価値、自然との身近なふれあいの場など、様々な役割があり、多面的に機能してきた。

本研究では、自然地の中でも制度的に問題が生じている都市域の自然地に対象を絞っている。一方、都市域における自然地は、国家間での位置づけが異なり、国家内においても法制度を所管する役所における定義が異なっており、その線引きが曖昧である。そこで、本研究では、都市域において、制度的な緑地のみにとどまらず、制度上で位置付けられていなくても自然を楽しむために使われている場すべてを含む場を「都市自然地」と定義する。即ち、「都市自然地」には、都市域における自然を楽しむスペース、伝統的に人々が自然と触れ合っ楽しむ場として使われてきた場のすべてが含まれる。

つまり、本研究で自然地という用語の使い方として、制度上、所管する役所（国都交通省、環境省など）によって使われる言葉が異なることを考慮し、人と自然環境との関係（楽しみ方、管理の在り方）を包括的に扱おうとしたものと言える。

ただし、第2章と第3章で、法制度に関する内容を記述する際には、“緑地”という用語が都市自然地と類似する概念として使われている。ここでは、緑地などの用語を都市自然地と変えて表記する場合、混乱が生じる恐れがあるため、制度的な用語をそのまま使用した。

4. 2. 自然系名所

「名所」とは、‘名高い場所’という意味で用いられているが、特に景色がよい場所や歴史的な事件があった場所、また和歌に詠われた場所があげられる⁴⁸⁾。一般的に名所と呼ばれているところを見ると「名所」の範疇には、田畑や森林などの自然が主体になる名所、史跡や遺物などが位置して歴史的に重要な場所としての名所、村落や市場などの社会的な場所としての名所など、様々な類型の名所が存在している。このように、名所と言えば、いくつかの種類があるものの、本研究では、自然が主体になる名所のみを対象にしており、一般の名所と区別するため、自然景物を楽しむ場を「自然系名所」と定義する。

古文献で登場する自然系名所は「洞、門、巖、峯、岨、臺、溪、樓閣、亭子、堂、寺」などの場所であり、水路を中心とする自然地である洞（洞天）、楼や亭、堂のような単独施設がある場所、あるいは施設が集団に存在する第宅及び別荘の後園、施設がない自然地などがここに該当する。

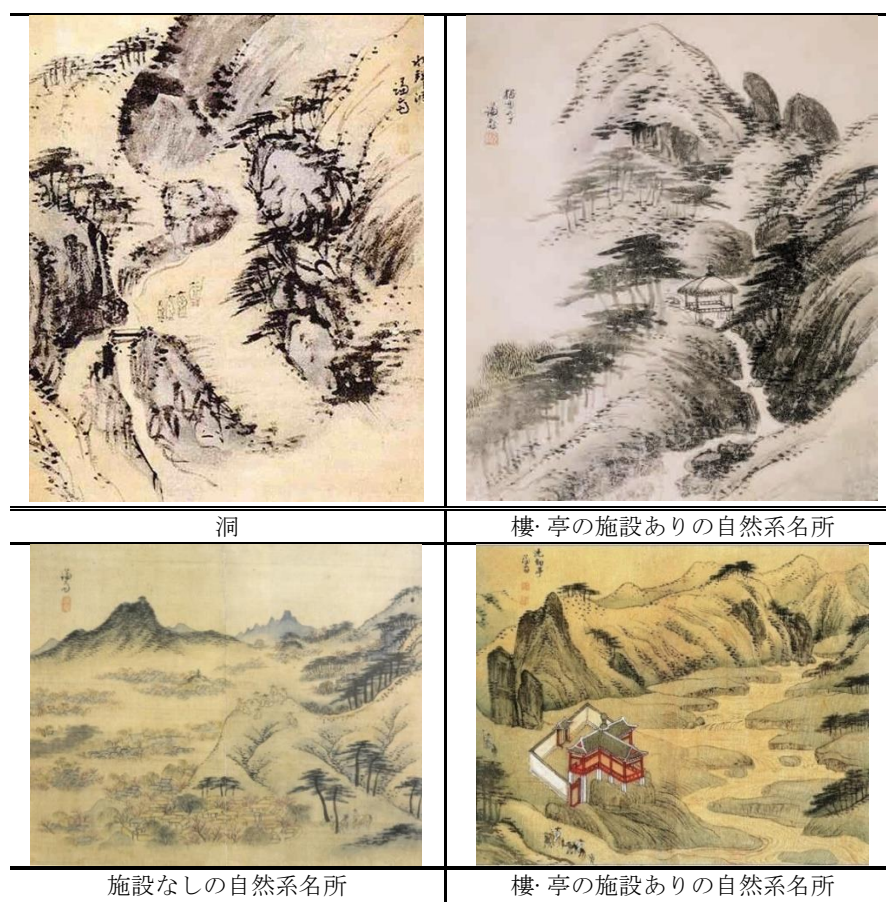


図 I - 3 自然系名所の例⁴⁹⁾

4. 3. 楽しみ

かつて韓国での自然との触れ合いの活動には、単に疲れを癒し生活の活力を吹き込むための娯楽的活動だけでなく、そのような活動とつながる空間の概念も非常に重要な要素となっている⁵⁰⁾。このような概念を用いる用語には、レジャー、レクリエーション、自由、遊び、楽しみなどがあり⁵¹⁾、これらの用語は、空間的、時間的、活動的などの用語に包含している概念によって少し差がある。

本研究では、「楽しみ」という用語を、様々な種類の自然地で様々な行動による人々の行楽、余暇という概念をより包括的な概念を示す用語として使う。

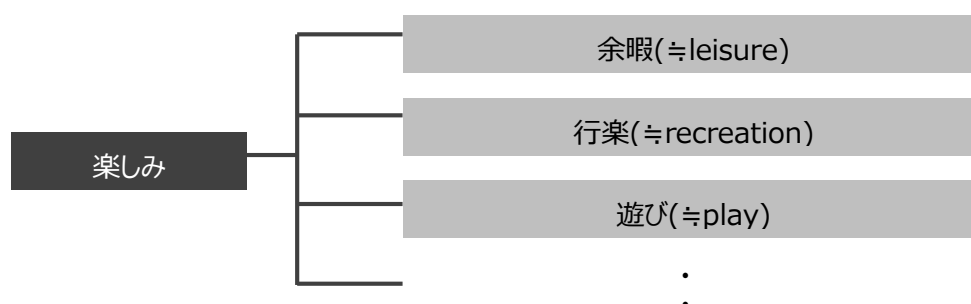


図 I - 4 本研究で「楽しみ」の概念

朝鮮時代には階級による身分が存在しており、階層によって楽しみも差が存在する（図 I - 5 参照）。両班の場合には、すべての活動が学問の時空間と接続されなければならないし、両班たちの余暇活動は作詩や書畫のように概ね学問と関連付けられている静的な活動が中心であった。自然を通じた自己省察と学びの過程に受け入れる活動の一環として自然の中に居所を設けておいたり、景色が優れた所を探しに、出掛けたり旅行しており、ここで見て感じるものは朝鮮時代の両班の多くの遊覧記録を介して確認することができる⁵²⁾。その反面、庶民の場合は、一般的に彼らの日常の中で家前のマダンを始め、村のオープンスペースだったらどこでも遊び場になっていたものの、歳時に関する季節ごとに特定な場所での活動も行われ、この時周りの自然地は、良い遊び場であった。厳密には、階層の間に遊びの差は存在するものの、ヤンバンの行楽に比べて庶民の行楽はその場所を特定できる事例が少ないこと、そして朝鮮時代の後期になるとその階層の区分は曖昧になり、両班や庶民の両方のすべての活動と余暇活動の区分が明確ではない点から、本研究では、階級の区分なく、当時の都市民たちの都市自然地での楽しみということに注目しようとする。

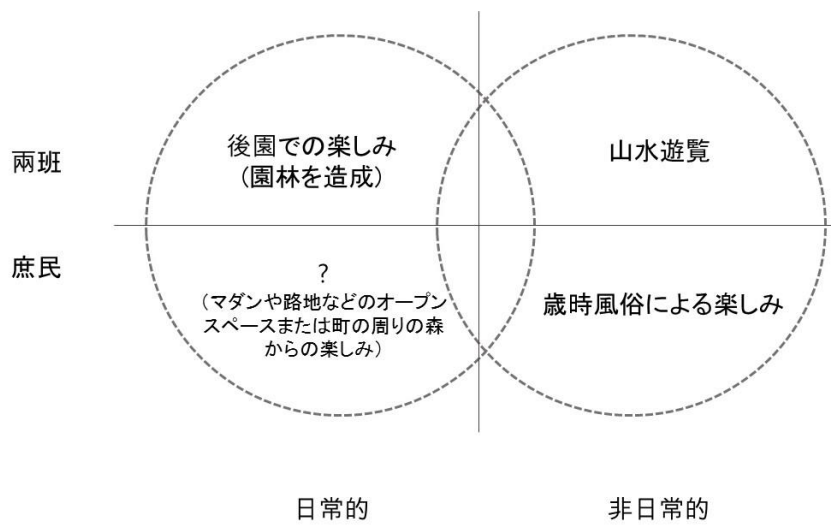


図 I - 5 階層及び日常性による自然での楽しみ方



図 I - 6 自然地での楽しみ方のイメージ⁵³⁾

5. 研究の構造

第1章では、研究の背景として現代の都市自然地での問題意識を踏まえ、研究の目的を設定した。また、各章の対象範囲を記述し、既往研究の知見から本研究への示唆点を考えて本研究の位置づけを示した。そして、既往研究を参考にし、本研究で新たに使っている用語の概念を定義し、最後に、研究の構造と流れを述べた。

第2章では、文献考察を通じて研究の分析のツールを設けた。本研究の対象である韓国のソウルにおいて都市自然地に関する様々な法制度の導入背景及び経緯などを中心に、制度の沿革を整理することで時代の流れのなかでその特質を把握した。これと共に、法制度システムが類似している日本との比較・分析し、問題と課題を明らかにした。

第3章では、現在、韓国の都心部において緑地に関する保全活用制度を考察することで、行政レベル間の役割分担と官民の間の役割分担を視野に入れ、関連制度の特質を総括した。第2章と同様に、日本の制度との比較を通じて、都市自然地の保全管理及び活用に関する制度的特質を明らかにした。

第4章では、近代以前の都市自然地での伝統的楽しみの特徴を把握し、地形との関係を明らかにした。その上、日本で近代以前である江戸の名所の特徴と比較して韓国の伝統的特質を考察した。

第5章では、2, 3, 4章での検討結果を総合的に考察して研究成果をまとめ、今後の課題を提示した。

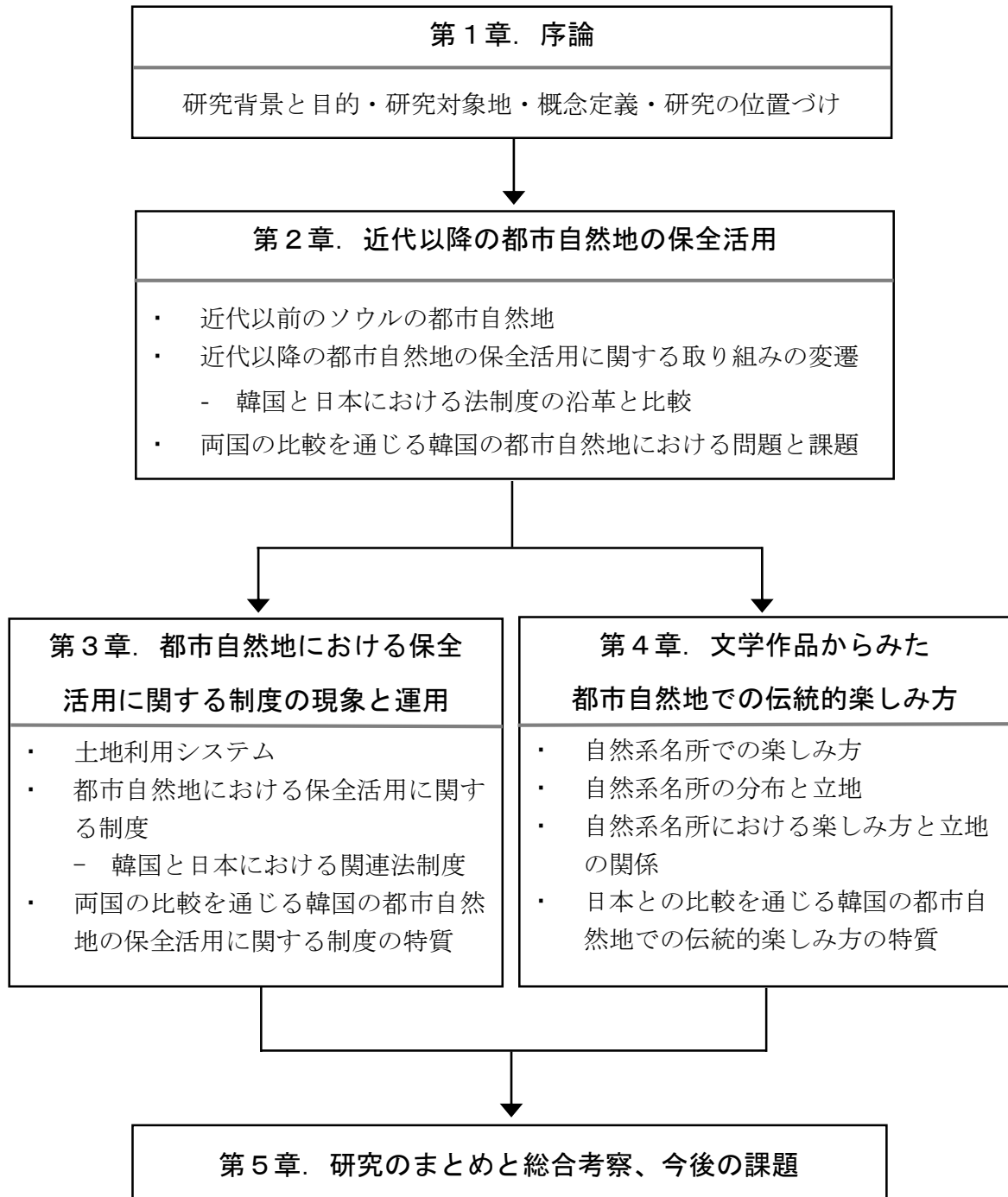


図 I - 7 本研究の構造

6. 補注及び引用・参考文献

- 1 高山範理・山本勝利・小木曾裕・大瀧友里奈・杉村(2016): なぜ今、都市近郊林なのか : 環境情報科学 45(2), pp.63-69.
- 2 Seoul Open Data Plaza <<http://data.seoul.go.kr/>>
- 3 本研究では、漢陽とその周辺で多くの人々が集まって自然を楽しむ場、行楽、余暇、遊びなどの場所として名高い場所、景観が優れる場所、詩の題材として取り上げられた場所などを「自然系名所」と定義する。
- 4 Seoul City (1997): Seoul's Mountains: The Seoul Special Municipal Historical Compilation Committee.
- 5 Hashimoto Seri (2009): The understanding about Public Park and its changing Perspective. EastAsianStudies, Sungkyunkwan University, Korea.
- 6 韓国の近代期は、門戸開放が始まった 1876 年から 1945 年までにする。
- 7 桑野聡(2018): ヨーロッパの公園と地域共同体－「市民的公共性」成長のための一. 提言－郡山女子大学 (54), pp. 249-259.
- 8 <http://blog.naver.com/shchoi8085/220418751447>
<http://cafe.naver.com/epfarmnet/25>
<http://www.koreatriptips.com/>
- 9 Chae, JinHae (2016): Change of Pluralistic Value in Mt. Gwanak as Suburban Mountain: Interdisciplinary Doctoral Program in Landscape Architecture Major Graduate School Seoul National University, Korea.
- 10 Dastgerdi, A. S., De Luca, G.(2018): Specifying the significance of historic sites in heritage planning. Conservation Science in Cultural Heritage. 18(1), pp. 29-39.
- 11 http://urban.seoul.go.kr/4DUPIS/sub2/sub2_1.jsp
- 12 Park, KooWon (2004): 일본 녹지체계의 좌절과 새로운 전략에 대한 이론적 고찰 (日本の緑地体系の挫折と新しい戦略に対する理論的考察) . Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture. pp.60-67.
- 13 Park, KooWon (2006) : A Comparative Study on the Development Characteristic of Parks and Green Systems between Korea and Japan. Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture, 34(3), pp.59-78.
- 14 Lee, YongTae (1999): Study on the Historical Evolution of the Contract Typed Open Spaces Conservation Systems in Japan. The journal of Korean planners association,

-
- 105(6), pp. 161-171.
- ¹⁵ Lee, YongTea (2000): The Application of the Contract typed Open Spaces Conservation Systems in NERIMA Ward, TOKYO. *Seoul Studies*, 1(1), pp.99-112.
- ¹⁶ Yeom, SungJin (2011): 민설민영 오픈스페이스의 현황과 특징에 관한 연구 - 일본전국의 민설민영 오픈스페이스를 사례로- (民設民營オープンスペースの現況と特徴に関する研究 :日本全国の民設民營オープンスペースを事例に). *GRI REVIEW*, 13(2), pp.227-249.
- ¹⁷ Kim, Hyun (2016): Characteristics and Policy Implications of Private Development Parks in Japan. *Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture*, 44(1), pp.119-128.
- ¹⁸ Shin, Y. N. (2015): A study of the open space typology and multi-functionality for the effective management of the green space resources - Siheung City, Gyeonggi-do-. Master Degree Thesis, Seoul National University, Seoul, Korea.
- ¹⁹ Kim, Hyun · Choi, HeeSun · Park, EunByul (2014): Study on Urban Park Area Calculation of USA and Japan. *Urban Design Institute of Korea*, 15(6), pp.47-60.
- ²⁰ Jang, YoungJi · Lee, SeungEun · Oh, ChoongHyun (2017): Legal Improvements for Creation and Management of Urban Forest. *Proc. Korean Soc. Environ. Ecol. Con*, 27(2), pp.100-100.
- ²¹ Park, H. S. (2016): A study on the effective management of the natural green zone -focus on the natural green zone of Jeonju City-. Master Degree Thesis, Graduate School of JeonJu University, Korea.
- ²² The Journal of Comparative Law (2017): A Study on the Improvement Plan of the Restricted Zone Management. *The Journal of Comparative Law*, 17(1), pp. 7-46.
- ²³ Lee, JeoungSuk · Jeo, SeHwan (2001): A Study on the Problem Analysis of Designation and Management of the Zone of Urban Nature Park. *Journal of Korean institute of landscape architecture*, 39(3), pp.98-106.
- ²⁴ Kim, MinSu · Byun, WooHyuk · Park, WonKyoung · Kim, HyoJin · Woo, JaeWook · Lim, MinWoo (2010): A Study on the Improvement of the Greenspace Use Contract System. *The Journal of the Korean Institute of Forest Recreation*, pp. 71-76.
- ²⁵ 竹内智子 (2011): 東京の丘陵地における緑地保全制度の変遷と実態に関する研究. *ランドスケープ研究*, 74(5), pp.651-656.
- ²⁶ 三瓶由紀 · 武内和彦 (2005): 東京圏における里地保全に関連する条例の規定内容の把

-
- 握. ランドスケープ研究, 67(4), pp.863-866.
- 27 新山佳菜子・土屋俊幸 (2014): 都道府県自然保全地域の管理の現状と課題 -東京都を事例として-. 関東森林学会, 65(2), pp.253-256.
- 28 青島一樹・土屋一彬・大久保悟・武内和彦 (2010): 八王子市における条例による市街地内樹林地の保全及び管理に関する研究, ランドスケープ研究 73(5): 615-618.
- 29 田中聖美・柳井重人・丸田頼一 (2003): 都市における行政と市民団体との連携による樹林地保全 に関わる行政担当者の現状認識. ランドスケープ研究, 66(5): 809-8147.
- 30 齋藤瑞枝・岩崎寛・三島孔明・藤井英二郎 (2007) 武蔵野市における市民参加による緑地の保全と創生の仕組みに関する効果検証. 日本緑化工学会誌 33(1): 270-273.
- 31 高瀬唯・古谷勝則 (2016) : 地方自治体による緑地保全活動への市民参加促進に関する研究-地方自治体の取り組みと市民ニーズの比較-. 都市計画論文集, 51 (3): 1016-1023.
- 32 平原俊・土屋俊幸 (2017) : 自然資源管理において制度化がもたらす市民活動への影響—鎌倉広町緑地の指定管理者選定過程を事例として—. 林業経済研究 63(3), pp.53-64.
- 33 荒金恵太・益子美由希・西村亮彦・舟久保敏 (2018): 市民参加型生物調査の現状と課題および緑の基本計画への活用可能性に関する考察. ランドスケープ研究, 81(5), pp.643-648.
- 34 Kwon, HonKyo・Choi, GapByung・Shin, WonSop (2004) : Application of Importance-Performance Analysis technique in a Recreational Forest Management Evaluation. Green Tourism Research 8(2):146-155.
- 35 Kang, EunJee・Hong, JeongSik・Lee, SeulBee・Kim, YongGeun (2014): The Comparative Studies on the Visitor Behavior based on Type and Scale of Urban Forest in Seoul : With a Special Reference to Bongje-san and Acha-san. Korean Journal of Environment and Ecology 28(1): 90-98.
- 36 Kim, JiYoung (2015): A Study on the Space Condition and Leisure Activities of Suburban Forests in Seoul - focused on Daemo-Guryongsan-. Seoul National University.
- 37 Park, ChanWoo・Lee, YeonHee・Kim, JaeJun (2014): The Types and Characteristics of Natural Scenery in Landscape Painting during Joseon Dynasty. Journal of Korean Forest Society, 103(4), pp. 687-695.
- 38 Kim, YongHee (2017): Study on the landscape characteristics of waterfront in real landscape painting. Master`s thesis, Dong-a University.

-
- ³⁹ Lee, Jaei · Sung, JongSang (2016): A Study on Landscape Characteristics of Flower-viewing Sites through Historical Literatures in the Late Joseon Dynasty. *Journal of the Korean Institute of Traditional Landscape Architecture*, 34(2), pp. 35–44.
- ⁴⁰ Gill, JiHye · Son, YongHoon · Hwang, KeeWon (2016): A Study on the Cultural Landscape around Lotus Ponds of Fortress Wall of Seoul through Old Writings in the Joseon Dynasty. *Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture*, 34(1), pp. 1–17.
- ⁴¹ Chae, JinHae (2016): Change of Pluralistic Value in Mt. Gwanak as Suburban Mountain: Interdisciplinary Doctoral Program in Landscape Architecture Major Graduate School Seoul National University.
- ⁴² Hwang, KeeWon (2009): *The Leisure and Outdoor Recreation Culture of Korea*. Seoul National University Press.
- ⁴³ Park, SuJi (2015): The transitional characteristics of landscape & attractions in Seoul, through analysis of the landscape associated texts. University of Seoul.
- ⁴⁴ 小野佐和子 (1993) : 江戸時代の都市と行楽, 造園雑誌, 57(2), pp. 143–150.
- ⁴⁵ 谷中英記 (1990): 都市近郊レクリエーション林の計画における基本課題. 造園雑誌 53(5), pp. 263–268.
- ⁴⁶ 羽生冬佳 (2004): 江戸の名所の成立・成熟過程に関する研究 : 名所の魅力要素・空間構成の分析を通じて. (社)日本都市計画学会都市計画論文集 39(3), pp. 115–120.
- ⁴⁷ 見附真悠子 (2018): 公園における「日本らしさ」の考察 -江戸から現代への変遷. 法政大学大学院.
- ⁴⁸ 佐々木邦弘 · 平岡直樹 (2002): 「江戸名所記」に見る17世紀中頃の江戸の名所の特徴. 信州大学, 38(2). pp.37-44.
- ⁴⁹ Seoul History Archives http://www.museum.seoul.kr/archive/NR_index.do
澗松美術館 (<http://kansong.org/collection/danopungjeong/>)
- ⁵⁰ Hwang, KeeWon (2009): *The Leisure and Outdoor Recreation Culture of Korea*. Seoul National University Press.
- ⁵¹ ラック計画研究所(1975) : 『観光・レクリエーション計画論』
- ⁵² Hwang, KeeWon (2009): *The Leisure and Outdoor Recreation Culture of Korea*. Seoul National University Press.
- ⁵³ <大快圖>、劉淑 (1846): THE ACADEMY OF KOREAN STUDIES (<http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0014857>)
<泉雨閣>《金吾契帖》、金允謙(1768): 韓国美術情報開発院 (<http://www.koreanart21.c>

om/education/artAppreciation/view?id=7600)

<秋の野遊会>《桃菊佳帖》、作家未詳 (1778): 韓国学中央研究院 (<https://www.aks.ac.kr/index.do>) <http://blog.daum.net/gijuzzang/8515485>

Korea Creative Content Agency (<http://www.kocca.kr/>)

<端午風情>、申潤福 (18C~19C): 潤松美術館 (<http://kansong.org/collection/danopungjeong/>)

<雪後野宴>、金弘道 (18C): KOREA CREATIVE CONTENT AGENCY (<http://www.culturecontent.com>)

<納涼漫興> 蕙園傳神帖、申潤福 (1805): National Institute of Korean History(<http://www.history.go.kr/>)

本章の内容は、学術雑誌論文として出版する計画があるため公表できない。

第2章. 近代以降の都市自然地の保全活用に関する制度の変遷

1. 本章の目的と調査方法
2. 近代以前の都市自然地
3. 近代以降の都市自然地の保全活用に関する取り組みの変遷
4. 問題と課題
5. 補注及び引用・参考文献

本章の内容は、学術雑誌論文として出版する計画があるため公表できない。

第3章. 都市自然地における保全活用に関する 制度の現象と運用

1. 本章の目的と構造
2. 本章の調査方法と対象地
3. 土地利用システム
4. 都市自然地において保全活用に関する制度
5. 考察
6. 補注及び引用・参考文献

第4章. 文学作品からみた都市自然地での 伝統的楽しみ方

1. 本章の目的と構造
2. 本章の調査方法
3. 自然系名所と楽しみ方と立地
4. 結論
5. 補注及び引用・参考文献

第4章. 文学作品からみた都市自然地での伝統的楽しみ方

1. 本章の目的と構造

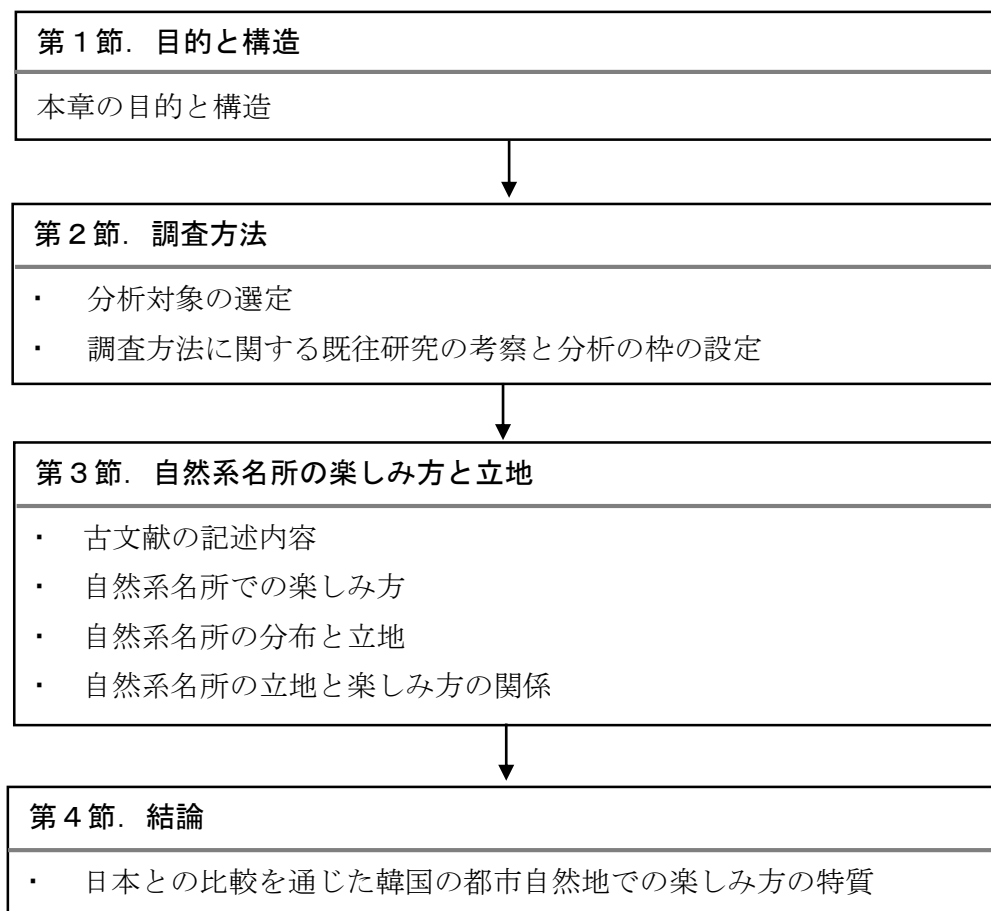
1. 1. 本章の目的

本章では、第2章で述べたように、都市自然地でのレクリエーション活動が制度化される以前、自然発生的に行われていた時期に都市自然地での楽しみ方の特質を確認しようとした。

したがって、都市自然地において、伝統的に人々がどのように自然と触れ合っていたのかを把握すること、そして、そのような活動が行われていた場所、すなわち自然系名所が成立する背景としての地形に焦点を当て、地形と楽しみ方との関係性を考察すること、の2点を目的とする。上の手順を経て、自然系名所における人びとの「楽しみ方」を整理し、自然系名所が成立する背景にある地形との関係性について分析を行う。

この過程で、日本との比較を通じて、韓国の特質を考えてみたい。日本の場合、名所研究の蓄積があるので、それと比較することで、韓国の特質をより明確に把握することができると思う。

1. 2. 本章の構造



図IV - 1 第4章の構造

2. 本章の調査方法

本研究では、古文献等に記載されている各名所における都市住民の楽しみ方や立地の特質を抽出し、朝鮮時代における人々の楽しみ方を明らかにする。都市周辺の名所をはじめ風景が優れた場所や多くの人々がレクリエーションのために訪れる場所に関しては、八景詩や八景図、風俗誌、歌詞文学などの古文献が残されている。こうした古文献等を研究資料として分析する研究方法は、人と自然とが合理的に共生していた時代の人々の楽しみ方や土地利用のあり方を理解する方法として韓国や日本において用いられてきた。

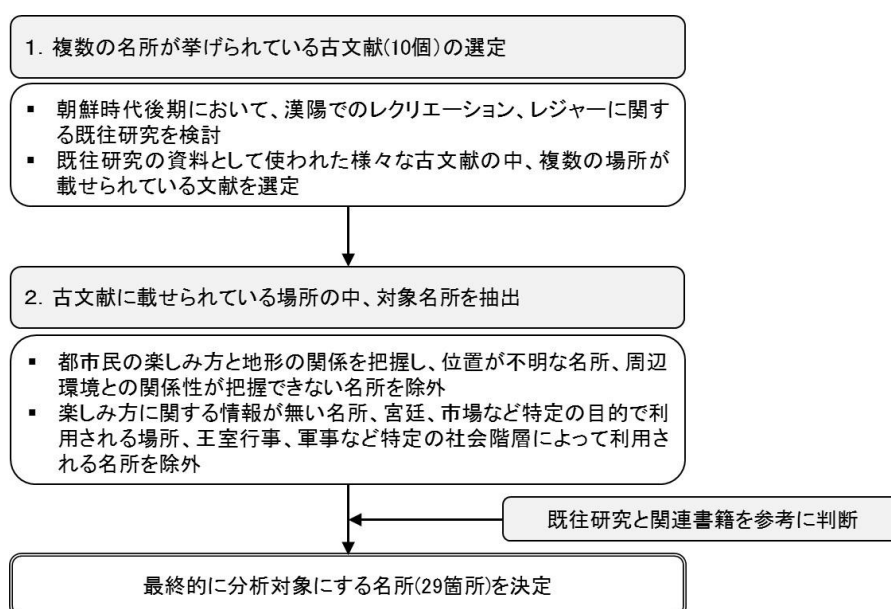
2. 1. 分析対象の選定

朝鮮時代後期に名所のみを扱っているガイドブックのような古文献がないため、分析のための場所を抽出するために、複数の段階の抽出作業を経た。まず、朝鮮時代後期の漢陽でのレクリエーション、レジャーをキーワードとする既往研究^{1) 2) 3) 4)} から名所を紹介する10の古文献を選別した(表IV-1)。

表IV - 1 分析対象資料一覧

	文献名	時期	分類	内容	名所数
1	京校名勝帖 ⁵⁾	1740	絵画集	漢江あたりの名所を描いた絵	33
2	陽川八景帖	1742	絵画集	陽川あたりの名所を描いた絵	8
3	壯洞八景帖	1755	絵画集	仁王山と北岳山の名所を描いた絵	11
4	国都八詠	1800前後	詩歌	漢陽の代表的名所を詠んだ詩歌	8
5	漢京識略 ⁶⁾	1800前後	風俗志	漢陽での名所に関する記録	19
6	京都雑誌 ⁷⁾	1800前後	風俗志	漢陽の人々の暮らし、歳時風俗の記録	8
7	瀕陽歳時記 ⁸⁾	1819	風俗志	漢陽の歳時風俗、年中行事の記録	3
8	漢陽歌 ^{9) 10)}	1844	歌詞	漢陽の魅力的な場所、祭り、日常などの記録	23
9	東国歳時記 ¹¹⁾	1849	風俗志	歳時風俗、年中行事の記録	18
10	東国輿地備考 ¹²⁾	1870頃	地理志	地理的事実、樓亭などの名所に関する記録	20

次に、10の古文献で名所として挙げられている場所の中で、自然地での楽しみを考えるにあたり適する対象を選定するため、既往研究と関連書籍^{13) 14) 15) 16)}に基づいて、以下の手順で分析対象を抽出した。10の古文献では、人物、景色などで有名になったところとして約125ヶ所を挙げており、その中で、資料で取り上げられた名所における都市民の楽しみ方と地形の関係を把握し、位置が不明な名所、周辺環境との関係性が把握できない名所は分析対象から除外した。また、楽しみ方に関する情報が無い名所、宮廷、市場など特定の目的で利用される場所、王室行事、軍事など特定の社会階層によって利用される名所を除いた結果、1740年～1870年頃までの10の古文献に記載される計29箇所の名所を分析対象とした。



図IV - 2 分析対象になる名所の選定の流れ

表IV - 2 分析対象とする自然系名所の一覧

番号	名所名	番号	名所名	番号	名所名
1	洗心臺	11	南池	21	狎鷗亭
2	蠶頭峰(南山)	12	蕩春臺	22	挹清樓
3	弼雲臺	13	洗劍亭	23	濟川亭
4	箭串橋	14	夾澗亭	24	月波亭
5	北屯	15	泉雨閣	25	望遠亭
6	清風溪	16	獨樂亭	26	淡淡亭
7	後彫堂	17	聽松堂	27	小岳樓
8	雙檜亭	18	晴暉閣	28	七松亭
9	興仁門(東池)	19	立石浦	29	彰義門
10	天然亭(西池)	20	楊花津		

2. 2. 本章の調査方法に関する既往研究の考察と分析枠の設定

ここでは、本章での調査分析の枠を設定するため、朝鮮時代の名所での活動の特性を把握するための分析資料として山水画と詩文などの古文献を用いた既往研究を検討した。

2. 2. 1. 朝鮮時代における名所の特質の分析方法について

一般的に、古文献を分析資料に用いた研究は、文献の語彙及び内容を通じて特質を把握するため、テキストの分析や絵図の景観分析が分析方法として使われる。古文献を資料として使う研究は、初期には、絵図の資料のみを研究資料として扱っているものが多かったものの、近年は絵図のみではなく、様々な文学資料を一緒に使っている研究が多く行われている。研究の目的によって、詩文や絵図の中で一つのみが活用される場合もあるものの、詩文には曖昧な表現も多いため、特質を把握するうえでは、両資料をすべて活用するのがより効果的だと考えられる。

韓国では、古い時代の絵画（山水画）の分析を通じて、自然風景地の価値や韓国らしい景観を把握しようとする試みは1990年代前半から継続して行われてきた。韓国で山水画の全盛期と言われる時期は朝鮮後期で、この時期には、真景山水画が出現しているが、これは、単純な山水画に比べると記録の特性を持っており、歴史的又は学術的に極めて重要な資料である¹⁷⁾。また、真景山水画は各地域の特徴的景観・地形・地勢・植生・人間形態など多様な風土が窺われる歴史的資料であると言われる¹⁸⁾。

表IV - 2は、古文献の分析を通じた景観分析に関する研究である。いくつかの既往研究を見ると、Kang (2001) は、都市計画的観点から、ソウルを対象にする山水画のうち場所が予測可能な21点を抽出し、作品での眺望対象と視点場との関係を明確にした。文学作品の記述と絵図の史料を合わせて分析する研究方法を利用した研究としてLee・Sung (2016) は、かつての詩文と絵図の文献を分析し、伝統的花見名所の特質を明らかにした。Kim (2018) は19C末、朝鮮を訪ねた欧米人の記録から語彙と内容分析を通じて現れる景観の類型別の分析と景観認識の特性を調べ、共通に表れる景観対象の抽出及び類型分析、景観に対する認識様相の分析を研究のツールにした。また、Jung (2018) は、名勝の地理学的観点からの価値に着目し、名勝での体験を把握するため、詩文分析を通じて景観要素の分析及び体験を類型化した。

表IV - 3 古文献の分析を通じた景観分析に関する研究

研究者 (年度)	分析資料(数)	分析のツール及び内容	記述項目の区分
Hwang (1995) ¹⁹⁾	山水画86点 (ソウルのみ)	-(本文なし)	山、寺、溪、臺、津、門、洞
Kang (1998) ²⁰⁾	山水画245点 (実景、整形式)	景観構図	人工系(建物、亭など)、自然系(巖、溪谷など)
Kang (2000) ²¹⁾	-	絵画に書かれている詩文で 山の特徴に関するキーワード から山の形態を区分	山のタイプ: 単独峰、急な山、緩慢な山 並み
Kang (2001) ²²⁾	ソウルを対象にする 山水画のなか、 場所が予測可能な 21点	篠原(1994)の景観把握モデル	視点場: 江、山 眺望対象: 津島(渡し場; 江)、名所(江、 山)、烽燧台(山)
Kang et al. (2002) ²³⁾	100点	眺望点と眺望形態 の関係から類型化 (眺望行動の区分は、韓国辞 書から抽出)	眺望点(22) 眺望形態(8)
Choi・Kang (2005) ²⁴⁾	山水画670点	-	-
Yoo et al. (2009) ²⁵⁾	山水画約90点	山體、水體、微機構の表現 に区分し、風土景観の類型 化	地形形状: 山、江、谷、溪谷、岩など 自然形状及び人間行態: 雪、雨、夕焼 け、霧など 時節
Park et al. (2014) ²⁶⁾	山水画629点	篠原(1994)の景観把握モデル を利用し、自然風景の類 型化	山: 蓮峯型、多峯型、独立峯型、山奇岩 型、山溪谷型、山水邊型 江: 江山型、江水型、江邊型、江奇岩型 海: 海邊型、海奇岩型 都市: 市街地パノラマ方
Jang (2014) ²⁷⁾	九曲詩、九曲図	-	人文学的解釈(元型景観の解釈) 景観要素: 形態(建築、地形・地質、水 空間、生物)、意味、風土 生態学的解釈(現在景観の解釈) 地質構造、現存植生
Lee・Sung (2016) ²⁸⁾	花見名所4ヶ所に 関する文献(17件)	書かれている語彙と内容を 把握して景観特性の区分	物景(花、お酒、岩、亭など)、情景(作者 の感情)、体験行為(飲酒、作詩、花見、 誌会、遠足、歌うこと)
Kim(2017) ²⁹⁾	水景観が表現され た105点(鄭敼の眞 景山水画)	地形(水関連)の特徴と微地 形の関係	地形区分: 山間溪流、上流、中流、下 流、海 微地形区分: 水形状(13)、点景(添景?) 要素(13)
Jung (2018) ³⁰⁾	地方の名勝を対象 にする詩文(150 件)	環境美学の観点のPorteous の理論、遺産の保存と管理 側面からのMasonの理論を基 づいて体験方式のツールを 設定	景観要素: 地形要素(山、川、谷、江、 月、水、泉、滝)、気候要素(雲、風、 空)、植生要素(森、木)、名勝体験の方 式: 記念、治癒、修練、快樂)
Kim・ Shin(2018) ³¹⁾	欧米人8名の記録	書かれている記録を説明、 描写、比喩、比較など記述 方法 語彙と内容、文脈上の表現 を中心に肯定的・否定的評 価に区分し認識を推論	自然景観: 山岳景観(山、丘陵、溪谷、樹 林、崖)、河川及び海岸景観(海、江な ど)、人工景観: 街、名勝・古跡、近代施 設、耕作地)

2. 2. 2. 本研究における分析方法

以上の分析方法に関する先行研究の検討を通じて、本章では、楽しみ方を把握するための資料の抽出方法及び分析基準などを述べる。本研究では、韓国古典総合データベース³²⁾を利用して、各名所の名前で検索された詩と紀行文などの古文献を研究対象として抽出した。これらと共に、各名所に関する絵図を収集し、分析資料として利用した。その後、対象作品の記述と絵画の分析を行うための既往研究^{33) 34) 35) 36) 37) 38)}を検討し、本研究での古文献の分析方法の参考にした。これらの研究は、景観要素、自然要素、行動、情景に関する項目を抽出し、分析することで、当時の人々が景観や文化をどのように楽しんでいたのかを調べており、このような分析方法は本研究においても適切な方法であると考えられる。景観や利用特性の分析の手順は以下のとおりである。

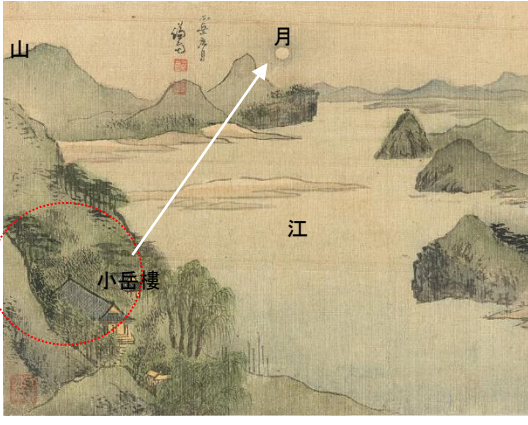
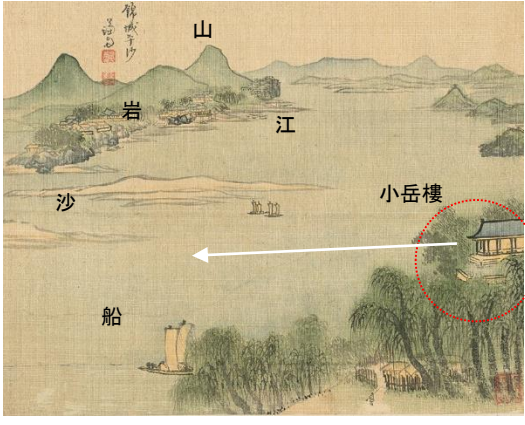


1) 主活動としての景観観賞の分析

名所の景観特性の把握にあたっては、名所における観賞活動を観賞対象、観賞方法、季節の大きく3点から把握した。

一つ目の観賞対象（景物）については、基本情報として視点場と視対象の確認を行った。視点場については、①表IV-1の古文献で挙げられているように名所の名称が視点場として知られている場合（23箇所）、②文献及び絵画のタイトルから読み取れる場合、③タイトルでは判断できないものの、文書のテキストから読み取れる場合とした。なお、視対象（景物）の抽出は、人工要素、自然要素、気候要素などの景観要素を整理し、文献の記述内容（例えば“～で有名である”）及び絵画の表題から視対象となる景物を把握、整理した。なお、図IV-3のaとbのように一つの名所に関する複数の景物が存在する場合には、1カ所の名所であったとしても異なる名所としてそれぞれを分析した。

二つ目の観賞方法では景物に対する視点場の位置（高さ）と視点場からの距離の2つを把握、整理した。景物に対する視点場の位置の判定は、視点の高さに関する記述（表-2参照）、絵画における視線方向を基準とした。そして、視点場から視対象までの距離の区分については、視点及び視対象（景物）を現視点で特定できるものに関しては、実際の距離を樋口（1975）の視距離の区分³⁹⁾を参考に判断し、また、特定できないものに関しては、文章の中の距離に関する記述、または景物の見え方に関する記述（表IV-4参照）と絵画での景物の描かれ方（細部描写、パターン化した形態等）を合せて判定を行った。視点場と視対象との位置や距離が特定でき、「低・同・高」と「近・中・遠」の複数の見え方が想定される場合には、複数に該当するとした。

最後に、三つ目の季節については、春夏秋冬のうち特定しうる季節を把握、整理した。

a. 景物：月	b. 景物：江
	
<p>名所27. 小岳樓 謙齋（1741年頃），「小岳侯月」</p>	<p>名所27. 小岳樓 謙齋（1741年頃），「錦城平沙」</p>
c. 景物：植物（桃，柳）	d. 景物：溪流
	
<p>名所3. 彌雲臺 林得明（1786年頃），「登高賞花」</p>	<p>名所 18. 晴暉閣 謙齋，「晴暉閣」</p>

資料： a、b、d：Kansong Art and Culture Foundation⁴⁰⁾、c：Samseong Museum of Publishing⁴¹⁾

図IV-3 名所の景観特性の分析例

表IV- 4 本研究で景物の観賞方法に関する区分と対応する文章表現等

	区分	記述
視点場の位置 (高さ)	高	・名所の名称に「臺、棒」など高い場所を意味する単語が含まれる ・見え方に関する記述の中に「見下ろす、高い場所で」という表現が含まれる
	同	・「見上げる」、「見下ろす」や高さに関する記述がない場合
	低	・景物の観賞に関する記述の中に「見あげる」という内容が含まれる
	混	・一つの景物の観賞に関する記述の中に「見下ろす」「見あげる」という内容が同時に含まれる
視点場からの距離	遠	・見え方に関する記述の中に「遠」、「広」、「開」という表現が含まれる
	中	・「遠」、「近」に関する記述がない場合
	近	・見え方に関する記述の中に「近」、「狭」、「閉」という表現が含まれる ・視対象に関する細部な記述
	混	・「遠」「近」の記述が混在する

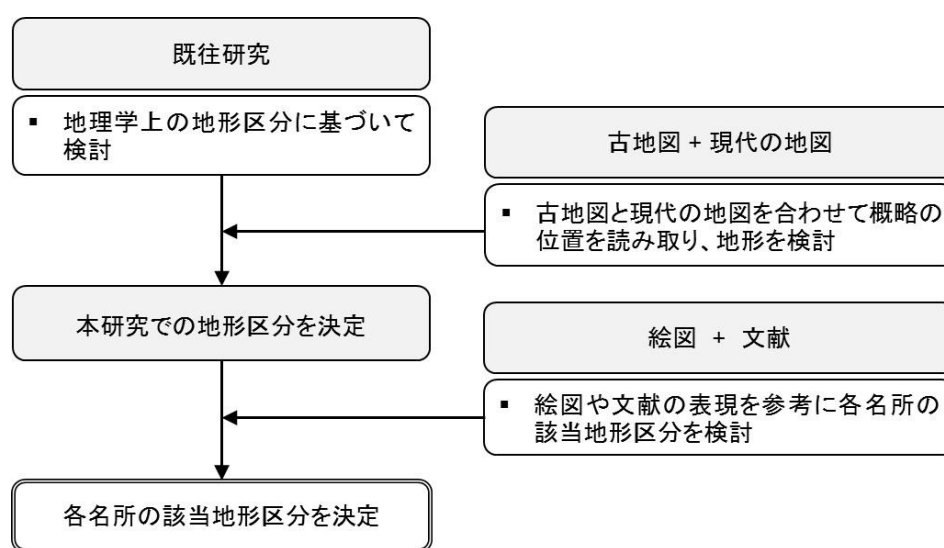
2) その他の補助活動の分析

名所では、主景物を“見る”という活動以外に、船遊び、釣り、詩作、絵を描き、飲食、踊り、歌い、灯遊び、城壁巡り、弓術などの利用も行われており、これらを補助活動と位置づけてその特性の把握、整理を行った。こうした補助活動についても、文献資料から主活動とは分けて読み取ったうえで類型区分し、観賞活動タイプおよび立地との関係について考察した。

3) 名所の分布と立地特性の分析

本研究の対象である漢陽の地形区分にあたっては、ソウルの山の特質に関する知見⁴²⁾、朝鮮時代の漢陽の都市構造⁴³⁾、朝鮮時代の山水画による地形区分⁴⁴⁾を参照し、地形を山、丘陵、溪谷、江などに大区分し、地形の多様性を考慮して水景をさらに細かく小区分し、平地、高台・高地などに類型区分した。そのうえで、分析対象とした29の名所の位置と地形の対応関係を把握し、整理を行った。

地形区分の基準については、前述した既往研究の区分に基づき、古地図と現代の地図上の大まかな位置を検討しながら判断した。そのうえで、絵画や記録の記述内容を参考にして、最終的に判断した。記述内容は、例えば、名所1から名所3については、主に山の中の高いところに位置していることが分かり、“険しい土地の形勢”や“登る”という表現が、名所2については“一番高い峰”と言う表現が、名所3に関しては、“そり立って広くて平ら”、“聳出”、“高い”のような表現から場所のイメージを類推解釈することができる。また、溪谷の中でも、深い溪谷と命名した名所においては、“深い溪谷（名所6）”または、“地勢が険しい（名所7）”と記述されていた。



図IV- 4 本研究で地形区分の流れ

3. 自然系名所の楽しみ方と立地

3. 1. 古文献の記述内容

29箇所を対象地に関する古文献の記述内容は、二段階にわたって表に整理した。まず、古文献の中で、自然での楽しみと関係がある部分のみを整理した（付録2参照）。次に、そこから景物、位置関係、活動に関する単語を抽出し、表IV-5のように整理した。また、整理された表は、3. 2. で、主景物の選定及び観賞方法を判断する資料として使った。

表IV- 5 名所ごとの古文献の記述内容

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考
		自然物	天気・時代	高さ	距離		
1. 洗心臺	1	花(李、桃) 松林	春	上がる(臺)		歌うこと	花見で有名な場所
	2	月 山 花 夕焼け 花			内(臺)	飲酒、音楽観賞(琴)、歌うこと	
	3	鳥の鳴き声 花 花、柳(都城) 柳、標的 園	春・夕方 晴れ	高い		世間離れ 飲酒 歌うこと 弓道	
	4	園 松林		見下ろす 高い、上がる	(近)		地勢が険しく
	5	山 花(都城) 花(桃の花、李の花)	春・雨		(遠)	宴会 飲酒	
	6	山 樹林	春	上がる		世間離れ	
	7	花	春(3月)	上がる		弓道、作詩	花見の遊覧客が集まる場所
	8	樹林 花	春		くぐり抜けて 通る		
	9	花々	-	高い(臺)			遊び場で有名
	10	夕焼け 花	春風		開		
	11	雲、山 溪流 柳(宮) 梅(徐氏園)				飲酒	
2. 巖頭峰	1	江、山 帆船(入り江)	風	登る、高い (峰) 高い		眺める 横にして眺める	一番高い峰
	2	春景色 松	春	上がる	広げられる (重) 近(目の前)		一番高い峰
	3	花	春			花見	花見の遊覧客が集まる場所
	4	都城	初八日、夕方			然灯行事の見物 音楽演奏(尺八と琴)	然灯行事
3. 弼雲臺	1	花(近所の人家)	春			飲酒、作詩	花見で有名な場所
	2	都城 花、鳥の鳴き声				飲酒、作詩	
	3	都城 花、柳	春 春、晴れ	上がる		見物	
	4	夕焼け(城壁)、雲 夕焼け 花、人々	夕方 夕方	高い	遠い	見れる	

名所名	文献番号	景物		位置関係		活動	備考	
		自然物	天気・時代	高さ	距離			
3. 弼雲臺	5	蝶、花 陽炎 鳥の鳴き声、花 園	春、昼			花見		
	6	陽炎 花 蜂、日傘	春、晴れ			歩く 花見		
	7	都城 柳、楼臺 桃の花 林泉	春、昼	高い(露出)			そそり立って広くて平ら	
	8	花				花見		
	9	香の花					香花の見物で人が集まる場所	
	10	花、柳 陽炎 夕焼け	雨					
	11	花				作詩		
	12	花				花見	花見の遊覧客が集まる場所	
	13	花				花柳	花柳の遊覧客が集まる場所 遊び場で有名	
	4. 箭串橋	1	草 柳	春 春風 朝 夕方			乗馬(草を踏む) 掃宅 音楽演奏(笙、洞簫)、飲酒	
		2	野 山 草 鶯、牛馬	雨後 朝 春(3月末)		遠い 遠い	乗馬 飲酒	
		3	芳草 紅背、光陰 黄鶯				飲酒	
		4	野草、泉 馬群 牧人	春	平ら			
5		草原						
6		馬群 草	朝日、風 見下ろ(亭) 春、夕方		遠い	飲酒、音楽観賞		
7		野、草	晴れ、暖かい 風 春、朝 夜	平ら		飲酒 掃宅		
8		草					京成の十詠の一つ	
9		牧場 草						
10		草 野	春、雨後 晴れ	平ら		飲酒、景色観賞 (亭からの)音楽観賞 飲酒、談笑		
5. 北屯	1	花(桃) 花(桃)	春 晩春			花見 花見		
	2	花(桃) 谷川		上がる(石)			谷	
	3	溪流 花(桃、柳) 坂、人家、谷川	春			見回す	飲酒、談笑、投壺 席を移しながら飲酒、談笑	
	4	花(桃)、小川						
	5	花(桃)					桃の花見の遊覧客が集まる場所	

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考	
		自然物	天気・時間代	高さ	距離			
5. 北屯	5-6	花(桃; 人家) 人々、車、馬		見下ろす		行ったり座ったりする 歌う、音楽観賞(筈、尺八)		
	5-7	花(桃)					花柳の遊覧客が集まる場所	
	5-8	化木 谷川、苔 山村						
6. 清風溪	6-1	泉、石					ほんのり、深い	
	6-2	水、石				宴会(飲食、音楽観賞、談笑)	水石の見物で一番	
	6-3	樹林 蓮華の香、溪流の音		上がる(亭)		詩を讀む、昼寝		
	6-4	山 雲、霧						
		菊、紅葉	秋					
	6-5	樹林、谷						
		岩 月	風			音楽(琴)、飲酒		
	6-6	月	夕方				(庭園)散歩	
		花の香、鳥の鳴き声 竹、側柏、松 巖、泉						
	6-7	月、雲				飲酒		
	6-8	溪流、池						
		松林 池(影)	夕方			宴会 様に移動 歌うこと、飲食、談笑		
	6-9	水、石 松						深い溪谷
カラス 溪流		夕方、風			歌うこと			
6-10	紅葉	秋					霧の谷のような場所	
	雲、山 セミの鳴き声 檜	夕焼け				草笛吹き		
6-12	樹林 泉、花	暖かい日光						
		小雨 夕焼け、月	高い(亭)		音楽演奏(琴)、作詩(硯)			
6-13	紅葉						紅葉がきれいな場所	
7. 後影堂	7-1	葉の音 溪流の音	風 雨			飲酒		
	7-2	崖、夕焼け 泉水 盤石、畑、崖 花 松	春 冬				巖石	
		山 都城 池、苔、池(巖の影)					地勢が高く	
	7-3	花 花の香 月、梅	早春 風					
	7-4	紅葉				山登り 飲酒、談笑	歳時風俗	
	7-5	花、木 霧、夕焼け 月、梅	夕暮れ 春					
8. 雙檜亭	8-1	泉 紅葉、柏	秋	見下ろす				
	8-2	泉 紅葉	秋(9月)					

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考	
		自然物	天気・時間代	高さ	距離			
9. 興仁門	9-1					船遊び、宴会(作詩)		
	9-2	楊柳 薔	風					
	9-3					船遊び、宴会(作詩)		
	9-4	楊柳	春				楊柳を見物として人が集まる場所	
	9-5	柳 川、原、日光 城、雲 葉 稲	風		遠く			
					広がる			
9-6	柳	春				柳を見物として人が集まる場所		
10. 天然亭	10-1	砂坂 蓮華					柳笛	
	10-2	柳 蓮華 池	夕焼け 秋			飲酒		
				涼しい	上がる(亭)			
	10-3	池、蓮華				飲酒 作詩、飲食		
	10-4	池				飲酒		
	10-5	花 鳥の鳴き声 山、陽炎 花々	夜明け、雨		上がる(亭)		音楽観賞	
					遠い			
	10-6	蓮葉	秋 夏					
	10-7	池 射臺、草 蓮華の香	暖かい日光 微風					
			夕焼け 初秋				飲食、談笑	
	10-8	蓮華				飲酒、作詩		
	10-9	蓮華					蓮華を見物として人が集まる場所	
10-10	垂柳、池 花々	風				飲酒		
10-11	池、蓮華 峯、城壁、山			遠い			宴会、作詩、飲酒	
10-12	蓮華						避暑の場として人が集まる場所	
10-13		蓮華	暑さ				飲酒、文学	
		蓮華の香 人家、水鳥				釣り		
		蓮華、月				作詩 飲酒		
		蓮華	夜遅く					
		山、鳥の鳴き声	朝明け			眠り 飲酒		
10-15	池、蓮華 セミの鳴き声 月					宴会、花見 音楽観賞(尺八と太鼓)		
11. 南池	11-1	山、峯 池 月 蓮					飲酒、踊り	
	11-2	池、城壁(月光)	風 夜 朝明け			歌うこと		

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考	
		自然物	天気・時代	高さ	距離			
11. 南池	11-3	池、蓮華	春、朝雨			集まり、飲酒		
	11-4	黄色い柳、赤い桃の花 青い池柳、梅	春			作詩		
12. 蕩春臺	12-1	水、石		上がる			山の間に位置	
	12-2	草	昼の日差し、陽炎 春					
	12-3	溪谷、山霧 清い峯 池の魚の鳴き声、谷鳥の鳴き声、谷草、梅	日光 新春 雪はれ 晩冬、春風					
	12-4	溪流	晩冬、春風	登る(楼)		飲酒		
	12-5	峯	雪 夕方		望む	飲酒、作詩		
	12-6	水、石 砂 峯、夕焼け				飲酒		
	12-7	溪流 盤石、砂 石の音 溪流、砂(日光) 松 山、水、泉、石	風				広く平らな臺	
	12-8	溪流 樹林、鳥の鳴き声	晩春					
	12-9	山、溪流、亭	春					
	12-10	緑陰、水、石				作詩、絵を描く		
	12-11	水、石				飲食、歌う	水石を見物として人が集まる場所	
	12-12	-				飲酒、文学	避暑の場として人が集まる場所	
	12-13	-					遊び場で有名	
	13. 洗劍亭	13-1	臺、巖 滝	梅雨			水の見物	
		13-2	溪流の音 石	夕方			音楽観賞(尺八) 作詩	
13-3		緑陰 水、石		高い(亭) 上がる				
13-4		水盤 雪の上の霜 鶴						
13-5		滝 盤石 岩	梅雨			水の見物 盤石での字を書く練習		
13-6		溪流の音 崖		高い(亭)				
13-7		泉、石 谷、巖 滝、山		上がる(亭)		歌う		
13-8		崖、樹木	秋風		高い(亭)			
		滝 紅葉				談笑 紙に墨を抜くこと(簾草) 紅葉しながら飲酒(宴会)		

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考	
		自然物	天気・時代	高さ	距離			
13. 洗劍亭	13-9	溪流 盤石、陰 城壁 樹林、石 溪流の音、峯	梅雨 風		ぼんやり			
		滝 樹木 溪流、砂、石の音 木、夕焼け	にわか雨 雨風 雨後	上がる(亭)		ぼつねんと長い間座って作詩		
		13-11	13-12	夕焼け(城壁) 水の音	雨			遊び場で有名
	14-1	小川、滝				飲酒		
	14-2	滝 落ち花、鳥の鳴き声	春			飲食 散歩 帰宅	街の人々が遊ぶ場所	
14. 次潤亭	14-3	滝				作詩、飲酒	渚	
	14-4	滝、亭、月の光 松の音、雲 滝の水	風 雨後			登山 作詩、飲酒		
	14-5	泉の音 花の香 竹、小川 魚				飲酒		
	14-6	老松林 細い歩道 山 石			遠	飲酒 散歩		
	14-7	風景	晴れ、遅くまで				船遊び	
		花(桃) 松の影、苔 谷、夕方の光						
	14-8	小川、滝					街の人々が遊ぶ場所	
	15. 泉雨閣	15-1	小川	夏				避暑に良い
15-2		水の音 樹林、セミの鳴き声 山、夕焼け 泉、樹木の葉	立秋、涼しい					
15-3		山、泉の音 ゼミの鳴き声	立秋					
15-4		霧、石、泉 山、雲 柳 松の影 セミの鳴き声						
		水 鳥の鳴き声 山 松の果実					昼ね	
15-6		小川	風 夏				避暑に良い	
16. 獨楽亭	16-1					一人遊び		
	16-2	星の光 樹木の若葉	春					
17. 聴松堂	17-1		風の音 夜遅く、風			横にする		
	17-2	松の影、鶴				居眠りしながら座っている		
	17-3	松の影						

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考
		自然物	天気・時間代	高さ	距離		
18. 晴暉閣	18-1	水、石壁 霧、夕焼け					
	18-2	家、畑、小道 山、滝の音 柳の葉、魚群 緑陰、鳥(鶯)の泣き 声 月	秋雨	高い(楼)			
	18-3	滝の音 蓮の葉、魚群 緑陰、白露 月	霧 秋雨	高い(楼)			崖の隙間にある
	18-4	松、巖 泉水の音				飲酒	
	18-5	溪流の音 樹林 落ち葉(桐)	雨後 霧 夜			集まり 飲酒	
	18-6	水、石壁 波、船			無限		
	19. 立石浦	19-1	雲 怪石	秋			
19-2		水草	秋			釣り、飲食	
19-3		水	雨後				
20. 楊花津	20-1	落ち葉(枯れ葉) 積もっている雪	風 雪	平ら			江頭 川岸
	20-2	居酒屋 積もっている雪	風			飲酒、作詩	江辺
	20-3	花、柳 水、砂、草 (歌をうたう)子供漁師 月 草 (太鼓を叩く)商人 (歌をうたう)人々	2月 夜 朝雨後				
	20-4	江 柳 水 波 草 山、歌っている人々 居酒屋				歌う 船に乗ってお酒を購入 帰宅	
	20-5	積もっている雪 山	小雨 強い風 雪		はるか		江頭
	20-6	積もっている雪 魚家、竹 村、柳	強い風 雪			作詩、飲酒	
	20-7	江、夕焼け 楼臺、雲					
21. 狎鷗亭	21-1	波 花 江 砂 峰 花(杜若)の香	春の朝			歌う(溜瀝歌)	

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考
		自然物	天気・時間代	高さ	距離		
21. 狎鷗亭	21-2	カモメ 波	風	登る(亭)		飲酒 詩を詠むこと 音楽演奏(胡琴)	
	21-3	江 船		見下ろす 登る		山登り	
		江、カモメ 空、地 魚、鳥 江辺			遠く		音楽観賞(聞こえる)
	21-4	カモメ 舟					のんびりする
		江 草、木 霧、花	早春	下に			船遊び 作詩
	21-5	月(江) 霧、江		高い			
	21-6	鳥 草木 砂 月	風				
	21-7	鳥 柳 カモメ、夕焼け 草、砂					
	21-8	雲、夕焼け 船 カモメ					
	21-9	波 漁舟 草 カモメ 山々				飲酒	
	21-10	江 蘆と菱 カモメ	霧、風				
	21-11	漁師、カモメ					
	21-12	水辺、カモメ 魚、鳥 雲煙 碁盤 船 柳	風、煙 霜焼け				
		波 カモメ、潮、海口 月光 曇 オイカワ、カモメ 雲、鴨群	風 風 風、露	見下ろす(亭)			笛 下で座る
21-13	カモメ 船 江	秋風					
21-14	入り江 漁師 カモメ 水辺の花々、夕焼け (江)	夕方 春風	上がる(亭)	遠く		音楽観賞(聞こえる)	

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考
		自然物	天気・時間代	高さ	距離		
21. 狎鷗亭	21-15	江、船 落花、夕焼け				音楽観賞	
	21-16	白鷗 江辺 山、波		登る(亭)		飲酒、作詩	
		魚、鳥 カモメ	春風	高い(亭)		詩を詠む 談笑	
	21-17	波 船歌 山、雲 風、波 鳥 草花(丘上) 夕焼け				飲酒、帰宅	
		江 カエルの鳴き声	風雨			飲酒、作詩	
		漁師 柳、セミの鳴き声	夕方				
	21-18	石、月、船 水の音、カモメ	秋	高い(亭)			
22. 抱清楼	22-1	樹木 月(江) カモメ 鴨、波 帆影	夜 秋風		はるけき		
		紫吊花森、葦、霧			高い、登る (楼)	作詩、飲酒	
	22-2	都城、波			見回す		
	22-3	漁師	夕方	上がる(楼)		飲酒	
	22-4	江				作詩、飲酒	
	22-5	カモメ					
	23. 濟川亭	23-1	月、江	秋			飲酒
23-2		空、江 山 江辺、樹林 丘陵 雲、山 波 夕焼け、山	雨後			飲酒、作詩、釣り	
23-3		江 島、草				音楽演奏、船遊び	
		漁師 魚 波				飲酒、談笑、作詩	
23-4		木 月(江)	夕方			音楽観賞、飲食	
		山、江 雲煙		高い	開ける		
23-6		江、砂煙 波		遠く			
23-7		山 江		上がる(亭)		宴会	
			風、雨 春			歌う、飲酒	

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考	
		自然物	天気・時間代	高さ	距離			
23. 濟川亭	23-8	空 月	秋			月を観賞		
	23-9	雁 船 夕焼け、船	秋 風		登る(亭)			
		江 雲、月 月			高い(楼)	飲酒、音楽観賞(聞こえる)		
	23-11	江				飲酒、音楽演奏		
	23-12	江 霧 月				音楽観賞(聞こえる)		
24. 月波亭	24-1	村 魚 浮草 江、月の光 月(江) 風樹、江 霧	夕方 風	上がる(楼) 降りる		飲酒 歌う		
					遠く			
25. 望遠亭	25-1	霧、水 月	雨後、夜 秋					
	25-2	山 カモメ 月				飲酒、音楽観賞		
	25-3	夕焼け 山 鴨						
	25-4	江辺 葦華	春				釣り 飲酒、談笑	
		雲山 江 風、月、水、雲		高い(亭)		飲酒		
	25-5	煙湖 江、山 樹林、白露(水辺) 穀物 江山、風月 夕焼け、霧、波 山、月光	雨後			広がる	飲酒	
		山 鳥(燕) 鳥(カモメ、ゴイサギ)	夕方、夕暮れ 雨		遠く	飲酒		
	25-6	江山 干潟 峰 夕焼け、帆柱 雁 浮草					音楽演奏(琴)	
		稲穂 渡し場 船(商売船) 月 波 城壁、山 空船、鷗 空と地 煙樹(都城) 漁師の歌う音 江と原	立秋 秋	見下ろす		作詩		
	25-7	武士達 江、船	明け方	登る(亭)見下ろす		遠く	飲酒、作詩、絵を描く	

(続き)

名所	文献番号	景物		位置関係		活動	備考	
		自然物	天気・時代	高さ	距離			
26. 淡談亭	26-1	月 峰	夜			作詩、談笑、囲碁、将棋、音楽、飲酒 船遊び		
	26-2	雲	夜明け			音楽演奏(笙)		
	26-3(1)	山、日の入り、雲 江、霧、月、船 岩(港口)、波	夜、雨					
	26-3(2)	砂、苔 島、山、風						
	26-3(3)	山 雲、日	雨後					
	26-3(4)	月 渡し場の頭、潮	霧後 夕暮れ					
	26-3(5)	山、海潮 船船、渡し場 波、風 船、夕焼け 草、霧、砂 櫓をこぐ音	夕暮れ					
	26-3(6)	草 柳、花	雨風		広がる			
	26-3(7)	江、夕焼け、亭 夕焼け、山 福戸、水辺 魚船						
	26-3(8)	苔、石、釣り場	雨、霧 吹雪			釣り		
	26-3(9)	村、煙	夕方、雨後 風					
	26-4	雲、水 紅葉(坂)	夜			向かい合う		
	26-5	江、水辺 夕焼け、江 江、山	雨風					
	27. 小岳楼	27-1	江辺、村、鳥の鳴き 声、星 朝波	晴れの日				
		27-2	日の出 月(江)				音楽演奏(琴) 船遊び(飲食) 飲酒 歌う、音楽演奏(琴) 二人遊び	
		27-3	山、カモメ 江、波、煙氣 雲、島	霧		遠く	音楽演奏(笛)	
27-4		山、日の出	夜明け			釣り		
28-1		松		登る	遠く	望める		
28. 七松亭	28-2	都城 花々、柳			遠く			
	28-3	松、鶴						
	28-4	小川、樹林 人々 老松 花	雨					
	28-5	雲 溪谷 崖、樹林 月光、泉 紅葉 松の音	秋 霧後			飲食、作詩		
	28-6	樹林、鳥の鳴き声 化木 芳草 溪流 山	昼 雨後		高い(楼)			
	29-1	都城(烟花) 星、月、雲 山	四月 夜			音楽演奏(笙)		

3. 2. 自然系名所における活動と楽しみ方

3. 2. 1. 観賞活動（対象と方法）






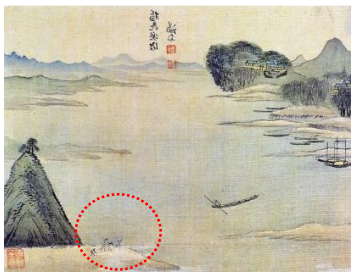

観賞対象の整理にあたっては、記述内容から観賞対象になる景物を主景物と副景物に分けて把握、整理した結果、主景物は李、桃、柳、蓮、その他の花木、紅葉などの植物（A）に加えて、溪流（B）、江（C）、月（D）、雪（E）、街（F）の6つに区分できた。また、副景物には山、街、溪流、池、石（岩）、樹林、江、船などがあつた。

視点場と視対象の関係性から主景物の観賞方法をみると、月以外の主景物の観賞では視点場と景物がほぼ同じ高さ、あるいは相対的に視点場が高い、俯瞰する名所が多かつた。一方、観賞対象までの距離は近景から中景、中景から遠景のものがあるなど一定せず、多様性があつた。各名所の観賞対象と観賞方法を整理した結果、観賞活動には15の類型があつた。表IV - 6における観賞活動の類型は主景物、副景物、観賞活動により区分し、主景物の大分類（A～F）、主景物の小分類（1～3）、観賞方法（a～c）によってラベリングを行った。最も多かつた観賞活動はC2-bであり、江を主景物とし、比較的高い場所から中景あるいは遠景の距離で江の風景を観賞していた。次いで、D2が多く、月を主景物として江の周辺の高い場所から観賞していた。

表IV - 6 景物ごとの観賞活動の対象と方法

区分	対象		方法		タイプ (数)	箇所数
	主景物	副景物	高さ	距離		
景物A 植物	植物(桃、柳)	山、街	高	中・遠	A1	3
	植物(桃)・植物(杏、柳)	溪流	同	近・中	A2-a	2
	植物(紅葉)	溪流	同	近	A2-b	3
	植物(桃、柳)	池	同	近	A3	3
景物B 溪流	溪流	岩	高	中	B1-a	2
	溪流	石	同・高	近・中	B1-b	2
	溪流	石	同	近	B1-c	3
景物C 江	江	山、岩	同	近・中	C1	1
	江	山、岩、船	同	遠	C2-a	1
	江	山、岩、船	高	中・遠	C2-b	7
景物D 月	月	山	低	遠	D1	1
	月	山、江	混	混	D2	4
景物E 雪	雪	山	同	遠	E1	1
	雪(氷)	石	高	中	E2	1
景物F 街	街	山	高	遠	F1	3
計	-	-	-	-	15	37

表IV - 7 景物ごとの絵図の例⁴⁵⁾

景物A (植物)		
A1	A3	A4
		
名所2	名所6	名所9
景物B (溪流)		
B1	B2	
		
名所12	名所15	名所16
景物C (江)		
C1	C2	
		
名所12	名所15	名所18

(続き)

景物D (月)	景物E (雪)
D1	E1
	
名所	名所20

主：景物F (街) は、絵図無し

3. 2. 2. 補助活動

自然系名所での利用形態として、歳時風俗に関する活動に加えて、自然観賞のような静的な活動からものづくり、伝統的な遊びなど体を動かす動的なものまで多様であった。

表IV - 8 名所ごとの補助活動

番号	名所名	補助活動
1	洗心臺	花見(3)、飲酒(6)、音楽観賞・演奏(3)、歌うこと(3)、宴会(3)、弓道(2)、作詩(2)、世間離れ(2)
2	蠶頭峰	花見(1)、燃灯行事の見物(1)、音楽観賞・演奏(1)
3	彌雲臺	花見(8)、作詩(3)、飲酒(2)
4	箭串橋	飲酒(6)、音楽観賞・演奏(3)、談笑(1)
5	北屯	花見(2)、歩く(1)、音楽観賞・演奏(1)、歌うこと(1)、作詩(1)、談笑(1)、投壺(1)
6	清風溪	飲酒(4)、音楽観賞・演奏(3)、作詩(2)、宴会(2)、歌うこと(2)、昼寝(1)、散歩(1)、談笑(1)、草笛吹(1)、紅葉見(1)
7	後彫堂	飲酒(2)、山登り(1)、談笑(1)
8	雙檜亭	-
9	興仁門	船遊び(2)、宴会、作詩(2)、柳笛(1)
10	天然亭	飲酒(10)、作詩(5)、音楽観賞・演奏(2)、宴会(2)、花見(2)、談笑(1)、釣り(1)、眠り(1)、避暑(1)
11	南池	飲酒(2)、宴会(1)、歌うこと(1)、踊り(1)
12	蕩春臺	飲酒(7)、作詩(2)、歌うこと(2)、踊り(1)、絵の描き(1)、水石見(1)、避暑(1)
13	洗劍亭	作詩(3)、水見(2)、飲酒(2)、音楽観賞・演奏(1)、字の書き(1)、歌うこと(1)、談笑(1)、宴会(1)
14	夾澗亭	飲酒(4)、飲食(1)、散歩(2)、作詩(2)、登山(1)、船遊び(1)
15	泉雨閣	昼ね(1)、避暑(2)
16	獨楽亭	一人遊び(1)
17	聽松堂	居眠り(1)
18	晴暉閣	飲酒(2)、宴会(1)
19	立石浦	釣り(1)、飲食(1)
20	楊花津	飲酒(3)、作詩(2)、船遊び(1)
21	狎鷗亭	音楽観賞・演奏(4)、飲酒(3)、作詩(3)、歌うこと(1)、山登り(1)、船遊び(1)、笛(1)、談笑(1)
22	挹清樓	飲酒(3)、作詩(2)
23	濟川亭	飲食(1)、飲酒(6)、作詩(3)、音楽観賞・演奏(3)、談笑(2)、釣り(1)、船遊び(1)、歌うこと(1)、宴会(1)、月見(1)
24	月波亭	飲酒(1)、歌うこと(1)
25	望遠亭	飲酒(4)、音楽観賞・演奏(2)、釣り(1)、談笑(1)、作詩(1)、絵の書き(1)
26	淡淡亭	作詩(1)、音楽観賞・演奏(2)、飲酒(1)、船遊び(1)、釣り(1)、談笑(1)、
27	小岳樓	音楽観賞・演奏(3)、船遊び(1)、飲食(2)、一人遊び(1)、歌うこと(1)、釣り(1)
28	七松亭	飲食(1)、作詩(1)
29	彰義門	音楽観賞・演奏(1)

以上の活動を本研究では、運動型、もの作り型、飲食型、文化型、一人遊び型、の5つに区分して整理した。具体的には、水遊び、弓道、船遊び、釣りなどは「運動型」に、柳の笛作り、花チヂミ作りなどは「もの作り型」に、飲食、宴会などは「飲食型」に、詩作、描画、読書、教育、朗唱、音楽観賞などは「文化型」に、隠逸、隠遁などは「一人遊び型」に、それぞれ含まれている。とりわけ、飲食型と文化型の活動はほとんどの自然系名所で行われており、運動型は主に江を主景物とする名所で行われ、船遊び、釣りなどが行われていた。

表IV - 9 観賞活動ごとの補助活動

観賞活動	補助活動				
	運動型	物作り型	飲食型	文化型	一人遊び型
A1	33% (1/3)	-	66% (2/3)	100% (3/3)	-
A2-a	-	-	50% (1/2)	100% (2/2)	-
A2-b	-	-	100% (3/3)	100% (3/3)	-
A3	-	33% (1/3)	100% (3/3)	100% (3/3)	-
B1-a	100% (2/2)	-	100% (2/2)	100% (2/2)	-
B1-b	-	-	100% (2/2)	100% (2/2)	-
B1-c	-	-	-	100% (3/3)	100% (3/3)
C1	100% (1/1)	-	100% (1/1)	-	-
C2-a	-	-	-	-	-
C2-b	71% (5/7)	-	86% (6/7)	100% (7/7)	14% (1/7)
D1	-	-	100% (1/1)	100% (1/1)	-
D2	-	-	100% (4/4)	100% (4/4)	-
E1	-	-	-	-	-
E2	100% (1/1)	-	100% (1/1)	100% (1/1)	-
F1	-	-	-	-	-

3. 2. 3. 自然系名所での楽しみ方

主景物ごとに自然系名所における楽しみ方をみると、植物を主景物とする花見の場合、遠くまでを眺め展望し、遠い場所にある植物とともに山や街を觀賞するタイプ（A1）と、溪流や池などの水景を副景物として近い場所を觀賞するタイプ（A2-a、b、A3）があった。この觀賞活動では、季節の変化との関連があり、作詩のような文化活動や飲食をともなって花見が行われていた（表IV-10）。たとえば、北屯（名所4）は『京都雑誌』『東国歳時記』『漢京識略』などの文献で春の花見の名所として選定された場所であり、尹愔の『無名子集』では満開の桃花と溪流が觀賞対象となり、その香りと溪流に写される姿を觀賞する楽しみ方が描写されていた（洞裏桃花滿 村中澗水馳 / 拂枝香襲袂 臨石影搖池 / 眼醉何須酒 神癡未暇詩 / 遊人喧日夕 俱是樂平時）。

また、溪流を主景物とする名所では、主景物と比較的近い距離から溪流の音を聞きながら溪流と石と一緒に觀賞するタイプ（B1-a、b、c）があった。補助活動としては飲食が行われていた他、文化活動も多かった。たとえば、南龍翼（1628-1692）の『壺谷集』の「晴暉閣」では、晴暉閣（名所18）の位置は、霧、夕焼けによって幽玄、神秘的な場所と評価され、滝の音を青山の雷鳴に喩え、柳葉、魚、ウグイスの鳴き声が描写されていた。

さらに、江を主景物とする名所は3つあり、主に高い場所から山、岩、船とともに遠望し、飲食をともなう宴会や文化活動、船遊びのような補助活動が行われていた（C2-b）。また、近景から中景の比較的近い場所の岩と遠くの山と一緒に觀賞、釣りをする名所（C1）もみられた。たとえば、徐居正（1705）の『漢都十詠』の「立石釣魚」では、川岸で石を鑑賞しながら釣りを楽しむ姿（溪邊怪石如人立 / 秋水玲瓏照寒碧 / 把釣歸來籍綠蕪 / 百尺銀絲金鯉躍 / 細斫爲膾燻爲羹 / 沙頭屢臥雙玉瓶...（後略））が描写されていた。

加えて、季節によって觀賞できる自然、時間帯などが一時的でうつろう景物として、雪と月がある。月を主景物とする名所では船に乗った觀賞活動があり、1人で觀賞する、お酒を飲む、詩を作るといった補助活動があった。また、主に江の近くの高台にある楼、亭等の施設において、空に上った月を見上げる、江に映る月を見下ろすといった觀賞活動があったほか、名所（名所23-27）、山の高い場所から遠望し、彌雲臺（名所3）から山と月を見上げていた。たとえば、丁若鏞（18-19C）の『茶山詩文集』の「同諸友乘舟至月波亭汎月」では、親友とともに船で名所24へ辿り着き、夜に舟遊びをし、お酒を飲み、歌い、魚を見て楽しんだ姿が描写されていた（月波亭下扁舟泊 / 墟里煙生日初落 / 登樓飲酒下樓歌 / 時見潮頭大魚躍 ... 中略... 俄看天際玉輪涌 / 玻瓈碾碧澄泓長...（後略））。

一方、雪を主景物とする名所では、広い範囲に雪が積もった風景をほぼ同じ高さの視点場から観賞（E1）し、凍った溪流（E2）を近い場所から、あるいはより高い視点場から観賞していた。とくに、後者では、高い視点場の亭から主景物の雪を見つつ、飲食、文化活動の補助活動があり、前者では特定の副景物は重要ではなく、雪そのものの観賞が重要であった。朝鮮時代の第22代王である正祖は、洗劍亭（名所13）を訪ねて滝の氷を観賞し、詩文（洗劍亭前百道氷 懸崖倒壑雪霜凝 琉璃錯布三千界）を残した。また、楊花津（名所20）は朝鮮時代初期から雪景色が知られており、広がりのある河原が雪で覆われた景観を眺めながら、雪を踏んで楽しんだと伝えられている（楊花踏雪）。

最後に、街を主景物とする名所では、山を背景として漢陽の街が観賞対象となり、文化型の補助活動が行われていたほか、特定の補助活動をとまわず、日常的に街の俯瞰が楽しまれていた。たとえば、李裕元（1814-1888）の『林下筆記』では、「七松亭は、…中略… 登って遠く眺めるに適する。」と記述されていた。

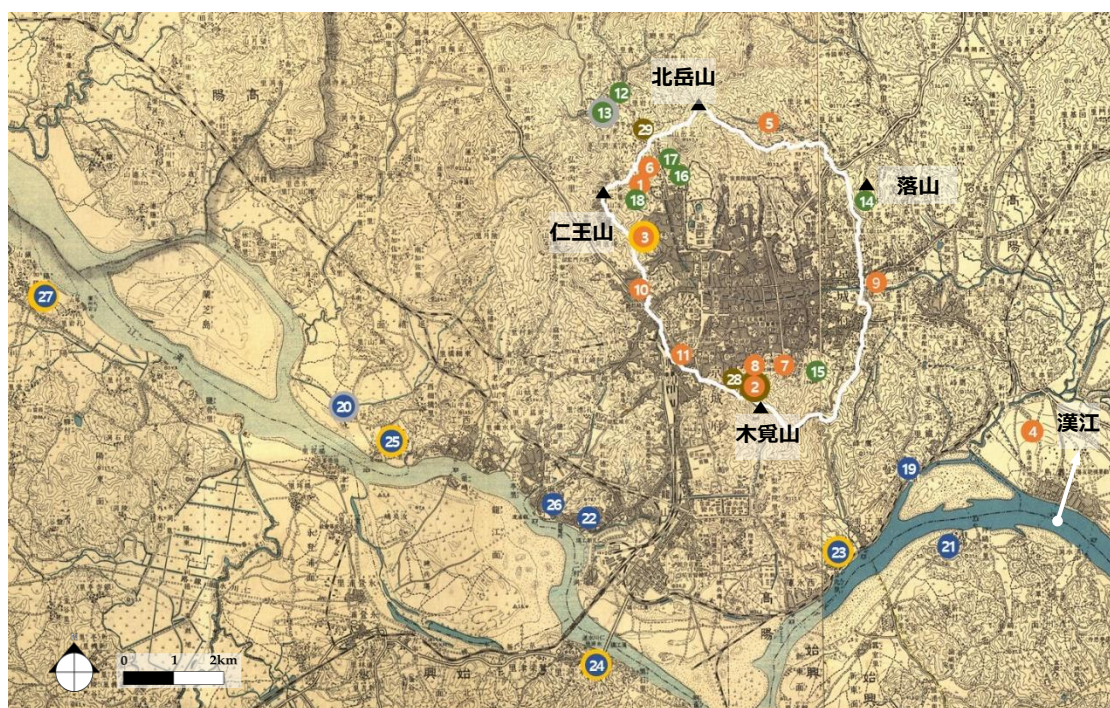
表IV - 10 自然系名所の楽しみ方と立地の総合表

名所番号	名所	観賞活動						補助活動	立地		
		観賞対象		(景観要素)	観賞方法		主要季節			タイプ	箇所数
		主景物	副景物		高さ	視距離					
1	洗心臺	植物(桃、柳)	山、街	桃、柳、松林、山、街	高	中、遠	春	A1	3	運動、飲食、文化型	高台・高地
2	轟頭峰(南山)	植物(桃、柳)	山、街	桃、柳、松林、山、街	高	中、遠	春			文化型	高台・高地
3	弼雲臺	植物(桃、柳)	山、街	桃、柳、松林、山、街、溪流	高	中、遠	春			飲食、文化型	高台・高地
4	箭串橋	植物(杏、柳)	溪流	杏、柳、石、山、馬	同(高)	近、中	春	A2-a	2	飲食、文化型	川
5	北屯	植物(桃)	溪流	桃、花木、街、田、溪流	同	近、中	春			文化型	広い溪谷
6	清風溪	植物(紅葉)	溪流	紅葉、杉、松林、溪流、山	同	近	秋	A2-b	3	飲食、文化型	深い溪谷
7	後彫堂	植物(紅葉)	溪流	紅葉、泉	同	近	秋			飲食、文化型	深い溪谷
8	雙繪亭	植物(紅葉)	溪流	花木、紅葉、石間水	同	近	秋			飲食、文化型	深い溪谷
9	興仁門(東池)	植物(蓮、柳)	池	蓮、柳、池、小川、山、農地、城壁	同	近	夏	A3	3	物づくり、飲食、文化型	平地
10	天然亭(西池)	植物(蓮、柳)	池	蓮、柳、池、樹林、池、山、城壁	同	近	夏			飲食、文化型	平地
11	南池	植物(蓮、柳)	池	蓮、柳、池、山、城壁	同	近	夏			飲食、文化型	平地
12	蕩春臺	溪流	石	松林、岩(石)、川、山	高	中	夏	B1-a	2	運動、飲食、文化型	溪谷
13	洗劍亭	溪流	石	松林、岩(石)、川、山、滝	高	中	夏			運動、飲食、文化型	溪谷
14	夾澗亭	溪流	石	岩(石)、溪流(小川、滝)	同、高	近、中	夏	B1-b	2	運動、飲食、文化型	溪谷
15	泉雨閣	溪流	石	花木、樹林、溪流、石、街	同、高	近、中	夏			運動、飲食、文化型	溪谷
16	獨樂亭	溪流	石	松林、岩(石)、溪流、山	同	近	-	B1-c	3	文化型、一人遊び	深い溪谷
17	聽松堂	溪流	石	松林、岩(石)、溪流、山	同	近	-			文化型、一人遊び	深い溪谷
18	晴暉閣	溪流	石	松林、岩(石)、溪流、山	同	近	-			文化型、一人遊び	深い溪谷
19	立石浦	江	山、岩	江、山、岩、砂、船	同	近、中	-	C1	1	運動、飲食	川
20	楊花津	江	山、岩、船	船、川津、江、夕焼け、船	同	遠	-	C2-a	1	不明	江
21	狎鷗亭	江	山、岩、船	柳、松林、峰(岩)、江、山、鳥、船	高	中、遠	-			C2-b	7
22	挹清樓	江	山、岩、船	江、山、岩、船	高	中、遠	-	運動、飲食、文化型	高台・高地		
23	濟川亭	江	山、岩、船	江、山、岩、月、船	高	中、遠	-	運動、飲食、文化型	高台・高地		
24	月波亭	江	山、岩、船	江、山、岩、月、船	高	中、遠	-	運動、飲食、文化型	高台・高地		
25	望遠亭	江	山、岩、船	江、山、岩、月、船、川津	高	中、遠	-	運動、飲食、文化型	高台・高地		
26	淡淡亭	江	山、岩、船	江、山、夕焼け、船	高	中、遠	-	文化型	高台・高地		
27	小岳樓	江	山、岩、船	柳、松林、峰(岩)、江、山、月、船	高	中、遠	-	飲食、文化型、一人遊び	高台・高地		
3	弼雲臺	月	山	桃、柳、松林、山、街、溪流	低	遠	-	D1	1	飲食、文化型	高台・高地
23	濟川亭	月	江	江、山、岩、月、船	混	混	-	D2	4	運動、飲食、文化型	高台・高地
24	月波亭	月	江	江、山、岩、月、船	混	混	-			運動、飲食、文化型	高台・高地
25	望遠亭	月	江、山	江、山、岩、月、船、川津	混	混	-			運動、飲食、文化型	高台・高地
27	小岳樓	月	江、山	江、山、夕焼け、船	混	混	-			飲食、文化型、一人遊び	高台・高地
20	楊花津	雪	山	柳、松林、峰(岩)、江、山、月、船	同	遠	-	E1	1	不明	江
13	洗劍亭	雪(氷)	石	松林、岩(石)、川、山、滝	高	中	冬	E2	1	運動、飲食、文化型	溪谷
2	轟頭峰(南山)	街	山	桃、柳、松林、山、街	高	遠	-	F1	3	文化型	高台・高地
28	七松亭	街	山	街、山、松、溪流	高	遠	-			不明	高台・高地
29	彰義門	街	山	街、山、松林、溪流	高	遠	-			不明	高台・高地

3. 3. 自然系名所の分布と立地

3. 3. 1. 分布

漢陽は、東西南北方向にそれぞれ海拔125mの駱山、同328mの仁王山、同265mの木覓山、同342mの北岳山があり、連続する山の連なりが稜線を形成し、その稜線に囲まれた盆地地形である。さらにその外側には、北側境界に700m以上の高い峰が続き、南側は、川幅の大きい江が東西に流れている。それゆえ、多様な土地の起伏が様々な地形をつくり、そうした地形に名所が位置していた。図IV-5は、1918年に朝鮮総督部が発行した地図を部分拡大した図に各自然系名所の位置をプロットし、自然系名所の分布を図示したものである。全体としては、まず、漢陽の周囲の山に多く、漢陽の中心からみて西側と南側に多く分布するものの、北側、東側にも分布し、すべて方角の山に名所を確認できた。また、南側の江に沿って多くの名所が分布していた。



●：植物(A)，●：溪流(B)，●：江(C)，●：月(D)，●：雪(E)，●：街(F)

主：一つの名所に二つ以上の景物がある場合、色を重ねて表示

図IV - 5 自然系名所の分布

3. 3. 2. 立地

地形の種類区分から、漢陽の地形は平地、高台・高地、溪谷、川、江に区分でき、とくに溪谷は深い溪谷とその他に分けて把握、整理した。29の名所のうち、12カ所は高台・高地に立地し、最も多かった。次いで、11カ所の名所は溪谷にあり、とくに深い谷地形を示す溪谷に6つの名所が立地していた。そのほか、平地に3カ所、川に2カ所、江に1カ所の名所があった。楼亭が立地するには、溪流、巖盤、松林が重要要素として作用ある。一般的に、地形の段差によって溪流や滝、池などを形成する空間を占有したり、岩盤地帯、松や岩盤に圍繞されたりしたところに該当する。このようなところは共通して山水景観が秀麗なところ、眺望が容易なところ、閑静な雰囲気形成するところである。

表IV - 11 名所ごとの立地

名所 番号	名所	立地	名所 番号	名所	立地
1	洗心臺	高台・高地	16	獨樂亭	深い溪谷
2	蠶頭峰(南山)	高台・高地	17	聽松堂	深い溪谷
3	彌雲臺	高台・高地	18	晴暉閣	深い溪谷
4	箭串橋	川	19	立石浦	川
5	北屯	溪谷	20	楊花津	江
6	清風溪	深い溪谷	21	狎鷗亭	高台・高地
7	後彫堂	深い溪谷	22	挹清樓	高台・高地
8	雙檜亭	深い溪谷	23	濟川亭	高台・高地
9	興仁門(東池)	平地	24	月波亭	高台・高地
10	天然亭(西池)	平地	25	望遠亭	高台・高地
11	南池	平地	26	淡淡亭	高台・高地
12	蕩春臺	溪谷	27	小岳樓	高台・高地
13	洗劍亭	溪谷	28	七松亭	高台・高地
14	夾澗亭	溪谷	29	彰義門	高台・高地
15	泉雨閣	溪谷			

3. 4. 自然系名所での楽しみ方と立地の関係性

各名所の立地を、観賞対象、観賞方法、補助活動との関係からみると、漢陽は周囲に大小の山、溪谷があり、主景物として水を含む名所が多く、副景物との関係性から水と石、岩の景物との組み合わせの景観構造を持つ名所が多かった。




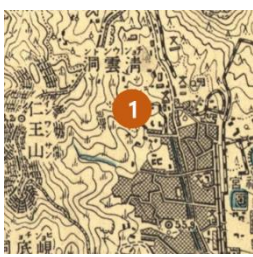
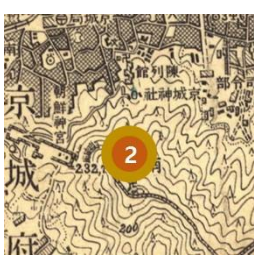




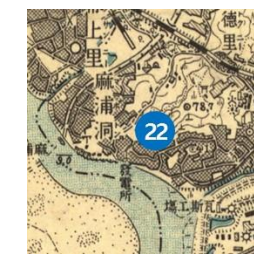


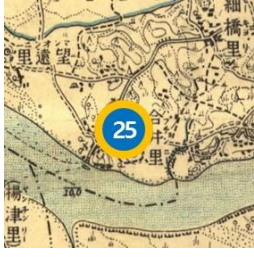

立地別に名所をみると、まず、高台・高地に立地する名所では、視点の移動をともなうことなく、視点を高い場所に固定できる高台に起き、視点と視点場を明確に位置づけて活動が行われていた。また、春になると街の花を見下ろし（A1）、江から近い高い場所に楼、亭のような施設を設置し、江を含む自然風景を観賞する（C2-b）、月を主景物として観賞する（D1、2）、街と山を遠望する（F1）といった観賞活動が行われ、景物を観賞しながらお酒を飲み、詩を作り、歌うなどの文化活動が行われていた。

次に、深い溪谷に立地する名所では、その特有の地形から近景にある植物、溪流が観賞対象となり、周囲の環境との距離感の近さが特質となっていた（A2-b、B1-c）。このような場所には、楼、亭などの建築物があり、文化活動だけでなく、一人で遊ぶ補助活動も行われていた。一方、低山の溪流などに立地する名所では、溪流そのものを景物として周囲の石とともに観賞されていた（B1-a、b）。また、深い谷地形を持たない、広い溪谷や川では、歩くなどして視点を移動させながら景物を観賞していた（A2-a）。










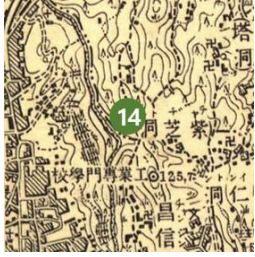
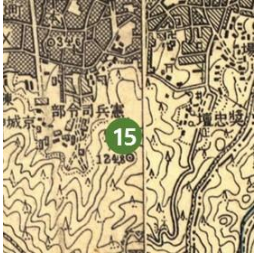



さらに、平地に立地する名所では、近景の植物が主景物となり、石と一緒に観賞されていた（A3）。また、飲食と文化活動に加えて、物づくりの補助活動が行われていた。

そのほか、江が広がる名所では、江そのものを主景物として観賞し、山と岩と一緒に遠景が観賞対象となり（C2-a）、季節の景物として広い江の上の雪も観賞対象となっていた（E1）。加えて、川の名所では、山と岩とともに観賞し（C1）、川の周りに広がる野原の名所では植物と溪流が観賞されていた（A2-a）。

表IV - 12 地形と楽しみ方

地形	対象地			タイプ
平地				A3
高台・高地				A1 D1
				F1
江辺				C2-b
				

(続き)

渓谷	深い	  	A2-b
		  	B1-b
	その他	  	A2-a B1-a E2
		 	B1-b
	川	 	A2-a C1
	江		E1

4. 結論

本章では、漢陽を事例として取り上げ、都市自然地における伝統的な楽しみ方を把握、整理し、自然系名所が成立する背景としての地形に焦点を当て、地形と楽しみ方との関係性を明らかにした。ソウルは土地に起伏があり、地形的な変化に富む盆地上にあり、現在のソウルの一部となっているかつての漢陽では、地形的特質に合わせて、楽しみ方が選択され、自然が楽しまれてきたと考えられる。本章での分析結果から、景物には植物、溪流、江など6つの大類型があり、それらの楽しみ方は15の類型に区分、整理できた。また、名所は、溪流、江、高台・高地など5つの立地の類型とも結びつき、景物と地形の組み合わせが自然系名所における楽しみ方を規定していると考えられる。

四季がはっきりしている国であれば、季節ごとの自然との触れ合いは、現代のような人工的遊び場が存在しなかった時代の人々にとって良い遊びであったし、それは、伝統的な楽しみとも言える。ただし、伝統的な楽しみ方と位置特性との関係は国によって異なると考えられる。各国で伝統的に人々がどこでどのように自然を楽しんできたかを確認することによって、それぞれの国の自然地での楽しみ方の原型及び特質を比較し、理解することが可能である。俗に、東アジアでの自然地での伝統的遊びは、欧米の遊びとは異なると言われており、隣接国家間では類似した特質を持っている。特に、韓国の場合、第2章で述べたように、近代に入って、都市自然地に関する制度的構造は、日本の影響も存在しており、概念の変化に関しても日本の影響を受けている。そこで、ここでは、日本との比較を通じて、韓国の特質をより明確にしようとした。

4. 1. 既往研究から見る日本の江戸名所での楽しみ方の特質

第1章の既往研究の検討で前述したように、日本の江戸名所に関しては、1980年代に入ってから様々な研究が行われてきた。ここでは、その中で、初期に行われた研究である、江戸の四季の名所を地形に着目した樋口ら（1981）の研究⁴⁶⁾と、江戸における四季の行楽を整理した小野（1993）の研究⁴⁷⁾を参考にして、日本で江戸時代の人々の自然との楽しみ方の特質を考える。

日本では、17世紀後半（1600年代）から都市民の自然との触れ合いの場としての名所に関する案内書（京都の名所）が発行されはじめ、17世紀以後、都市の発展と消費生活の拡大にともない、花見をはじめ、紅葉など四季の行楽に応じた遊山地が名所化されていた⁴⁸⁾。これらの四季の名所は、1800年代に入って、江戸の年中行事や四季の名所を集大成した花暦や歳時記、図会など様々な案内書で紹介された。日本において、自然との触れ合いというと、花見が考えられる。奈良時代の梅の花見から始まった日本の花見は、平安時代に至って桜の美しさに注目し始め、江戸時代に至っては、貴賤、老若、男

女を問わずあらゆる階層の人々が参加して、桜を代表とする季節の花のもとで酒宴を開き、詩歌連俳といった文芸の趣味に興じたり、太鼓、三味線などの楽器をまじえて賑やかに歌い踊ったりして楽しめる庶民的な娯楽として、江戸時代の半ばすぎには全国各地の都市に普及した。この時期には、季節ごとの行楽行事が庶民生活に浸透していくなかで花見の名所だけでなく、月見、菊見、雪見、そして虫聞きなどの名所が登場しており、すなわち、名所は季節という時間軸によって形成されていたものである。なお、江戸の四季の名所のみを集大成した『江戸名所花暦(1827)』や、江戸の年中行事と四季の景物を記録した『江戸年中行事(1803)』、『東都歳時記(1838)』などの記録には、当時に年間で楽しめる季節の景物が約40以上存在していたと言われる(付録4参照)。また、樋口ら(1981)によると、これらの季節の景物を楽しめる四季の名所は、312ヶ所であり、その中に神社が138ヶ所(44%)、百花園などの園地や染井の植木屋などが36ヶ所(12%)、そして、これらの閉鎖的領域での四季の名所以外の自然の丘陵や川や原や野や田などの背景と一体になった四季の名所が44%に区分される。その中で、春の花見の名所について、小野(1993)は、郊外の花見の名所が郊外の山や野、寺社境内などであり、そこで桜をはじめ、梅、柳、ツツジなどの春の花見が行われていたことを明らかにした。特に、花見は空間的に、都市と農村の境界に位置して都市的な要素と農村的な要素を含み、聖と俗との境界に位置していると述べた。なお、民営花園や田園風景など自然美の観賞と料理屋での享乐的な遊興、寺社参拝などの行為が結びついていたことも、当時の江戸名所の特質として挙げられている。

以上の研究は、日本において、近代的産物である公園での画一的な計画及び整備方法から脱皮して、多様な自然とのふれ合いの重要性を論じることに於いて様々な示唆を与えた。

4. 2. 韓国における都市自然地での伝統的楽しみ方の特質

ここでは、韓国の都市自然地での伝統的楽しみ方を日本の江戸名所に関する研究から得た知見と比較しながら、韓国における伝統的な都市自然地の楽しみ方の特質について考察する。

韓日両国とも、過去には、場所ごとに現在よりさらに特化された景物による自然との触れ合いが行われていた。より詳しく見ると、日本の場合は、季節ごとの花やその他の景物が非常に多様であり、それらを楽しむ名所も多様に存在していたのに対し、韓国の場合は、景物の種類は日本に比べると多くなかったものの、地形的特性によって異なる楽しみ方が存在していたことが明らかとなった。特に、地形の特性によって自然的に選ばれていた自然系名所は、そこでの自然の観賞方法や視対象になる景物も、現代では失われていたり異なっていたりすると言える。

主に、険しい渓谷の中や、森をくぐり抜けて通り過ぎると出現する高く平らな臺のような地形の活用が特質的であった。現代においては、都市公園などを造成するとき地形の改変を行い多様な利用を可能にするための平坦化がなされることが多いものの、当時、地形の凹凸はむしろ自然での楽しみを増大してくれる自然の装置であった。また、季節の花のような自然物を近い距離で観察する活動もあったものの、展望が良い高いところから花々を見下ろしたり、溪流の流れを楽しみながら観賞したりすることも、当時の人々が多様な地形を生かして自然を楽しんでいたものであると考えられる。

次に、観賞対象になる景物の種類にも違いがある。古文献の記述内容から見ると、名所の多くは、溪流の周辺や江の周辺であり、かつては溪流、泉、滝、小川、江、海などの水要素が多く登場しており、このような水要素は、視覚的だけでなく、聞いたり、触ったりしながら楽しんできた。これは、現代において、管理上の問題で水要素が排除されがちであることを考えると残念である。また、現代において花見と言うと、いつの間にか桜の花見が一般的に認識されており、桜の名所には多くの人々が集まっている。しかし、かつては、桃の花と柳、桃の花と李の花など、その種類も異なっており、常緑の緑と花々の色との対比から感じられる美しさが観賞のポイントであった。

また自然系名所では、人々は点的に身の置き場を設定して、その周辺の自然を楽しむ楽しみ方が多かった。具体的には、広い盤石などを視点場として認識して心的な境界を設定したり、楼亭のような単独設置などを設置し、楼閣や縁側、壇に上がって座ったり、あるいはござを敷いて座り、周辺自然を楽しんでいた。これは、段差をつくって座ったりござを敷いたりして座ることは、個人が占める場所を周辺とは区別して私的空間化するものであり、自然要素を一つの要素と見なして屋外を室内のように可変的に活用しようとしたものであると考えられる。つまり、当時は、自然を楽しむための場所として複

雑な整備を必要としなかったといえる。別荘を設置するとしても、山水が秀麗なところに亭の規模の身軽な居住空間を設け、境界を設定してマダン(庭)を確保した後、自然に囲まれた最小限の人工領域を確保しただけで自然を楽しんでいたことがうかがえた。

6. 補注及び引用・参考文献

- ¹ Park, SuJi · Kim, HanBae · Lee, SeungHee (2014): The Comparative Study on the Landscape Attractions of Seoul in Joseon Dynasty: Focusing on the Eight Scenery Poems. True-View Landscape Paintings and Folklore Literatures: Korea Research Institute for Human Settlements 82, pp. 17–35.
- ² Cho, KyuHee (2006): Transition: Two Modes of Landscape Painting in Early Eighteenth-Century Korea. Journal of Art History and Visual Culture 5, pp. 192-232.
- ³ Cho, KyuHee (2012): Late Joseon Pictures of Notable Sights of Hanyang and Eight views of Hanyang Reassessed. Soongsil University 10, pp. 147–194.
- ⁴ Na, HeaYoung (1999): A Study on the Hanyang Myung Seung paintings. Ewha Womans University.
- ⁵ Korea National Heritage Online <<http://www.heritage.go.kr/heri/idx/index.do>>
- ⁶ 『漢京識略』 柳本芸(1777～1842)、權泰益(2016) 探求堂.
- ⁷ Encyclopedia of Korean Folk Culture <<http://folkency.nfm.go.kr/>>
- ⁸ National Folk Museum of Korea
- ⁹ 漢山居士(1844) 『漢陽歌』
National Library of Korea <<http://viewer.nl.go.kr:8080/main.wviewer#>>
- ¹⁰ General Libraries <<http://www.davincimap.co.kr/>>
- ¹¹ Encyclopedia of Korean Folk Culture <<http://folkency.nfm.go.kr/>>
National Folk Museum of Korea
- ¹² 「東国輿地備考」第2編漢城府名勝條（韓国総合DBより）
- ¹³ Kim, YoungSang (1985): Seoul's Scenic and Historic Places: The Seoul Special Municipal Historical Compilation Committee.
- ¹⁴ Seoul City (1977): The 600-Year History of Seoul Vol. 1, 2, and 3: The Seoul Special Municipal Historical Compilation Committee.
- ¹⁵ Hwang, KeeWon (2009): The Leisure and Outdoor Recreation Culture of Korea. Seoul National University Press.
- ¹⁶ Yun, ChinYoung (2013): Reviewing the noted places of the west village and a true-view landscape painting of late Joseong period. The Institute of Seoul Studies, 2013, 50, pp. 69–107.
- ¹⁷ 姜明秀・萩島哲(2000):山や丘陵地を活用した景観計画の指標づくり —山水画にみる

ソウルを対象にして—日本建築学会大会学術講演__概集.p.1061—1062

- 18 Yoo, KaHyun · Sung, JongSang (2009): Research on Cultural Scenic Landscape in Jingyeong Sansuhwa -Centering around Gyeongjae Jeongseon's Works-. Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture 27(4). pp.74-82.
- 19 Hwang, K.W. (1995): A study on the Seoul near view painting by Gyeongjae Jeong Sun. Master's thesis, Sungshin Women's University.
- 20 姜明秀 · 萩島哲 (1998): 山水画による山水景観の構図に関する基礎的な研究 : 朝鮮時代後期の眞景山水画と定式山水画に対する景観構図の類型化(伝統的景観). 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済 · 住宅問題, pp.523-524.
- 21 姜明秀 · 萩島哲 (2000): 山や丘陵地を活用した景観計画の指標づくり —山水画にみるソウルを対象にして— 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済 · 住宅問題. pp.1061—1062.
- 22 Kang, MyungSoo (2001): Pattern Classification and Characteristics Concerning Landscape on Mountainas and Hills by Using a Landscape Picture – The Case of Seoul City-. Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture 29(4), pp.12-23.
- 23 Kang, YoungJo · Bae, Mikyung (2002): Prospect Behavior in the Analysis of Kyummjae Chung Sun:s One Hundred Scenes from the Real Landscape Painting. Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture 30(5), pp.1-15.
- 24 Choi, HoSuk · Kang, SinAe (2005): The spatio temporal changing of real-scenery landscape painting (實景山水畫) in the Joseon Dynasty and its meanings. Journal of Korean Classics Studies 42, pp.243-268.
- 25 Yoo, Kahyun · Im, SeungBin (2009): Research on Cultural Scenic Landscape in Jingyeong Sansuhwa -Centering around Gyeongjae Jeongseon's Works-. Journal of the Korean Institute of Landscape Architecture 37(1), pp.87-99.
- 26 Park, ChanWoo · Lee, YeonHee · Kim, JaeJun (2014): The Types and Characteristics of Natural Scenery in Landscape Painting during Joseon Dynasty. 103(4), pp.687-695.
- 27 Jang, Jongsu (2014): Interpretation of Korean Traditional Sansu Landscape Using Ecological Analysis -A Case Study on the Gugok Landscape of Songnisan(Mt.). University of Seoul.
- 28 Lee, Jaei · Sung, JongSang (2016): Study on Landscape Characteristics of Flower-viewing Sites through Historical Literatures in the Late Joseon Dynasty. Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture 34(2), pp.35-44.

-
- ²⁹ Kim, YongHee (2018): Study on the landscape characteristics of waterfront in real landscape painting. Dong-a University.
- ³⁰ Jung, SanYa (2018): A Typology of Experiencing the Scenic Site during the Joseon Dynasty Era - A Case Study of Yeongseo Area. Graduate School of Korea National University of Education.
- ³¹ Kim, DongHyun · Shin, HyunSil (2018): A Landscape of Joseon Dynasty in Late 19C century through Experience Record of Modern Westerners. Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture 36(1), pp.20-33.
- ³² Korean Classics Comprehensive DB <<http://db.itkc.or.kr/>>
- ³³ 羽生冬佳(2004): 江戸の名所の成立・成熟過程に関する研究 : 名所の魅力要素・空間構成の分析を通じて. (社)日本都市計画学会 都市計画論文集 39(3), pp. 115-120.
- ³⁴ Ibid. 28.
- ³⁵ Gill, JiHye · Son, YongHoon · Hwang, KeeWon (2016): A Study on the Cultural Landscape around Lotus Ponds of Fortress Wall of Seoul through Old Writings in the Joseon Dynasty. Journal of Korean Institute of Traditional Landscape Architecture 34(1), pp. 1-17.
- ³⁶ Kim, SunHwa (2014): A study on the placeness of pavilion of the Han River in Seoul during Chosun dynasty. Sangmyung University.
- ³⁷ Ibid. 31
- ³⁸ Seo, J.U. (2012): Interpreting Cultural Scenery in Hanson and the Surrounding Area as Expressed in the Realistic Landscape Paintings of Jeong Seon. Korea University.
- ³⁹ 樋口忠彦 (1975): 景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間. 技報堂.
- ⁴⁰ Kansong Art and Culture Foundation <<http://kansong.org/>>
- ⁴¹ Samseong Museum of Publishing <<http://ssmop.org/>>
- ⁴² Seoul City (1997): Seoul's Mountains; The Seoul Special Municipal Historical Compilation Committee.
- ⁴³ Kwon, Y.S.(2003): The Spatial Structure of 'Hanseongbu' in Late Joseon Dynasty. Seoul National University.
- ⁴⁴ Ibid. 36
- ⁴⁵ Encyclopedia of Korean Culture <<http://encykorea.aks.ac.kr/>>
Private Collection
Kansong Art and Culture Foundation<<http://kansong.org/>>

National Museum of Korea <<http://www.museum.go.kr/>>

⁴⁶ 樋口忠彦・杉山晃一・横山隆二郎 (1981): 江戸の四季の名所について. 第16回日本都市計画学会学術研究発表会.

⁴⁷ 小野佐和子 (1993): 戸時代の都市と行楽. 造園雑誌 57(2), pp.143-150.

⁴⁸ Ibid. 48

第5章. 結論

1. 本研究のまとめと総合考察
2. 今後の課題

第5章. 結論

5. 1. 本研究のまとめと総合考察

本研究は、韓国のソウルにおいて、豊かな自然地が十分に活用されず、維持管理もきちんと行われていないまま、放置されているという現実的な問題意識から始まった。そこで、このような問題が生じてきた原因をはっきり理解し、今後の保全活用の在り方を考えるために、諸法制度の導入過程及び現在の制度の運営状況を把握し、歴史的に都市自然地が人と自然との触れ合いの場として果たしてきた価値及び役割に着目した。その結果、近代以降の都市自然地の保全活用に関する取り組みの問題と課題、現在運用されている法制度の特徴と維持管理及び利用・活動の状況、そして都市自然地での伝統的な楽しみ方を明らかにすることができた。こうした研究の成果を設定した研究目的の①～④に則して記述すると以下の通りである。

①の目的においては、韓国の都市自然地における近代以降の保全活用に関する取り組みの特徴を確認し、問題と課題を導出した。

近代以降、都市自然地において保全活用に関する諸制度が導入され始め、当初は、都市自然地における利用と保護とを対立する概念として捉え、諸制度が設定された。こうした考え方によって、都市自然地において、都市公園が利用を重視する都市計画施設として整備され、また、その以外の都市自然地における保護が必要なエリアに関しては、行為規制を伴う制度によって指定がなされた。その後、用途地域として緑地地域が新設され、都市自然地の全域が、ある程度の行為規制を伴うエリアとして位置付けられた(表V-1)。そして、ソウルのような大都市の場合は、都市周辺に広範囲の緑地帯である開発制限区域が指定されて緑地地域制度と共に長い間、都市自然地を守る機能を果たしてきた。

しかし、このような都市計画施設以外の都市自然地、中でも比較的緩い保護規制のエリアを中心に、十分に利用されるわけでもなく、また管理も十分に行われないまま放置される自然地の増加などの問題が生じている。これは、現在の都市自然地における保全活用に関する諸制度が十分に整えられておらず、時間の経過とともに問題が徐々に顕在化してきたものと見られる。また、都市自然地の制度的区分によって、利用のための場所として都市公園が都市計画上に位置付けられ、その計画・整備に際しての基準で重点が置かれたのは、配置の公平性と管理の効率性であり、土地の自然資源性や地形的多様性は大きく考慮されていなかった。

以上のように、近代に入ってから都市自然地に関する制度やその基調になる考え方は、その以前とは異なる形へ変化した。都市自然地の保全活用に関する諸制度は、現代

に至るまで、徐々に変化してきているものの、この時期に変化し確立された大きな構造的変化が現代の都市自然地において生じている様々な問題に対する根本的な原因になっていると考えられた。そこで、現在の保全活用に関する諸制度の運営や制度による実際の維持管理やそこでの利用・活動などを検討し、韓国における現在の制度的特徴を細かく把握すること、伝統的楽しみ方を把握・分析して都市自然地での利用的側面に関してより多角的に検討することを本研究での課題として示した。

表V-1 都市自然地における近代期の立地や考え方の変化

時期 区分	制度的区分 (重視される機能)	立地の考え方	
		立地形態	重点価値
近世		自然発生的 立地	自然資源及び地形 の多様性
近代		計画的配置	公平配分

②の目的に関しては、現在において都市計画施設以外の都市自然地に関する保全活用制度を、国、自治体等の行政レベルごとに、運営状況と維持管理及び利用・活動を検討した。その結果、まず韓国において都市自然地の保全活用は、国が制定した法律による諸制度を中心に行われていた点を指摘できた。これに対する国と自治体の役割をみると、国が法律によって大枠の基準を定め、これに基づいて、自治体が委任条例を制定して都市自然地の保全活用に関する詳細を決定することになっている。また、これらの制度の運営に関してみると、自治体の自律性を高めるため、自治体が制度の指定及び行為規制の権限を持っていることをはじめ、その他にも制度の運営に関する多くの役割を自治体が担当することになった。しかし、そのため自治体の負担が増えており、維持管理及び利用・活動に関して他の主体による役割分担が必要になっていることが考察された。

一方、都市計画施設以外の都市自然地において、維持管理及び利用・活動の側面からみると、韓国でこのような都市自然地の維持管理は、基本的に強い罰則と監視活動を通じた管理が中心となっていた。これは、都市自然地での行為制限という側面からは、効果的な管理方法であるものの、今後、より質的に高い維持管理及び活用していく方策に

関しては、日本の事例との比較を通じて、行政間での望ましい役割分担が必要であることを考察した。つまり、韓国に示唆する点を考えると、現在、存在する法律による諸制度の運営に際して、土地買収などの予算に関する部分は国が役割を分担して担当することで自治体の負担を軽減するとともに、自治体レベルでは、地域の自然環境や社会状況に応じて独自の制度を形成するなどさらにきめ細かい対応が必要であると考察された。そして、これらの制度で指定された都市自然地において、確実に保全活用していくためには、実際に人々が手を入れて、維持管理する活動が必要である。このように住民など民間との連携が必要不可欠であり、そうした参加を誘導するためのインセンティブを設定するなどの運用が必要であることが示唆された。

③の目的に関しては、かつて、都市自然地で多くの人々による自然との触れ合いが行われていた場所を自然系名所として命名し、伝統的な楽しみ方を明らかにするとともに、立地的特性との関係を検討した。分析対象地である漢陽は地形的変化に富んだ盆地で、地形的特徴に合わせて、楽しみ方が選択され、自然とのふれ合いが楽しまれてきたと考えられる。本研究では、第4章で分析対象にした文学作品を通じて、自然系名所で景物、観賞活動、その他の活動の組み合わせによる楽しみ方が存在することが分かった。また、これらの地形類型との結びつきについても類型ごとにパターンがあることが分かった。そして、日本における都市自然地での伝統的楽しみに関する既往研究での知見と比較しながら、韓国の都市自然地での伝統的楽しみ方の特性に関して考察を深め、特に地形との関係が深い点が特徴的であること考察された。

伝統的な楽しみ方と立地タイプとの関係に関するこのような研究成果は、現代の都市市民により多様な楽しみ方を提供するための重要な知見を提供するとともに、今後都市自然地をより効果的に整備し利用するうえでも重要な知見を提供すると考えられる。また、伝統的な楽しみ方と立地特性との関係は国によって異なると考えられる。各国で伝統的に人々がどこでどのように自然と楽しんできたかを確認することによって、それぞれの国の自然地での楽しみ方の原型及び特徴を比較し、理解することが可能である。本研究で用いた方法論は、各国の都市緑地をどのように享受するかという特徴を知るのに有効であることも考察された。

④の目的に関しては、2章で導出した現代の都市自然地に関する課題について、3章と4章での検討から導いた保全管理に関する特徴と伝統的楽しみ方の特性を総合的に考察することで、今後の都市自然地の保全管理に関する考える方の方向性を論じたい。

まず、2章の制度的変遷と3章の現在における制度的特徴を総合的にみると、韓国の都市自然地において、近代期に都市自然地を量的に確保するという目的に関しては、現在

の保全活用に関する諸制度は有効であるものの、実際に空間の維持管理及び利用・活動の状況を見ると、既存の法による制度以外の新たなアプローチが必要であると考えられた。韓国においても、行政の役割については、各地域の自治体の自律性を高める考え方が望ましいという方向へと転換しているものの、その役割の分担において、土地購入など現実的に自治体の制度運営に大きい負担を与える予算に関する問題については、国の役割を拡大すること、そして自治体レベルでは、より地域の条件に合った制度の導入と運用の促進が必要になると考えられる。また、その過程において、地域住民が中心となって、保護すべき場所やレクリエーションのための場所を選択し、活用していくことが望ましいとみられており、継続的な活動のためには、官民協働を促す制度的な裏付けが同時に行われる必要がある。

また、都市自然地は人為的な地形の操作を加えなければ、不便で活用度が低いという認識から脱して、伝統的な楽しみ方を参考に多様なレクリエーションを想定すれば、より広範な地形状況が様々な活動の適地と見なすことが可能であり、対象地を幅広く考える認識の転換が必要である。都市自然地における伝統的な楽しみ方を見ると、当時は、平地や緩やかな傾斜又は、急傾斜地まで、様々な場所での楽しみが行われていた。しかし、現代の都市自然地においては、このような観点からの活用の制度や計画が手薄であると考えられる。面的によく整備された都市公園だけでなく、現時点では放置されているさまざまな立地の都市自然地が伝統的な楽しみを再現することができる潜在的な価値を持っており、その際には、必ずしも規格化された面積や設備が必要なことはない。例えば、点的な位置に最小限のスペースのみを整備して、かつての観賞活動の視点場のような利活用をするなど、公園として利用される可能性がある。また、現在に整備されているスペースと連携して観賞対象となる空間の維持管理も考えてみることもできるだろう。

以上を踏まえ、総合すると、今日の都市自然地において、循環的・順応的管理が官民協働により実施されることが求められてきている。今後、保全管理においては、近代以後導入された制度の効率的運用と共に、かつては維持管理における住民の役割が多かったことを考え、住民を含む民間の参加を拡大していく必要がある。この時、国よりは住民に身近な自治体の役割が要求され、自治体を中心になった持続的維持管理のため制度的に支えるのも必要であると考えられる。利用に関しては、制度に規定した画一的空間造成ではなく、場所又は地域の特性を生かした空間計画が行われ、そこでの人々の自然との触れ合いの楽しみを増大させられるように意図することが望ましいと考えられる。

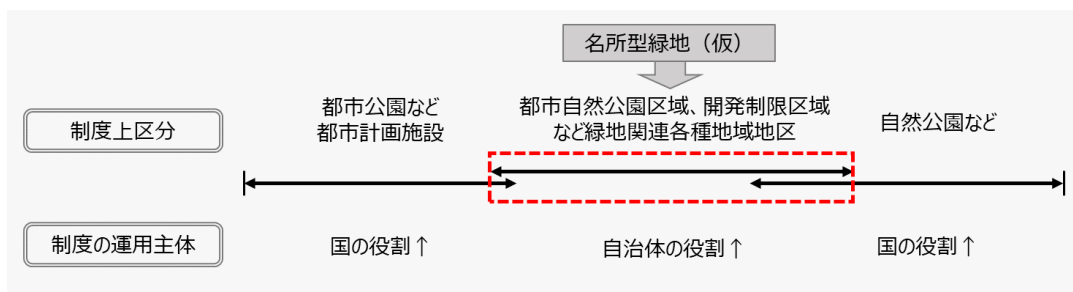
5. 2. 今後の課題

最後に今後の問題として残された現実上の課題と研究上の課題にもふれておきたい。

5. 2. 1. 現実上の課題

第1章で述べたように、現在、都市地域において都市公園や自然公園以外の自然地で十分な管理ができないところが多く存在している。ここでは、今後このような都市域の自然地の管理に関する課題を解決する方法として、自然地での伝統的な利用に関する考え方を導入することを提案したい。本研究を通してかつて都市周囲の自然地との境界エリアに位置し、他の土地利用が難しい緑地は、自然との触れ合いを楽しむ場所として有効に活用されてきたことが明らかになった。こうした境界域の緑地の活用の在り方は、韓国らしい自然との付き合い方を見直し、継承する意味でも現代において十分に活用していくことが重要であると考えられる。また、現在、十分に管理されていない緑地を地理的、空間的自由度が高い伝統的な利用方式で活用することは、レクリエーションの利用と、最低限の人為を加えて自然を管理することを両立する活用の在り方を意味する。現在の緑地制度では、このような利用の在り方を担保する仕組みは明確には存在しない。しかし、都市公園や自然公園以外の緑地において利用の自由度を高める空間の選定及び活用方法を名所的な利用として制度上に位置付けること（名所型緑地）で、韓国の伝統的な緑地利用方法から現在の緑地制度を捉え直し、両者を踏まえた今後の緑地制度の在り方を検討することができる。

そして、このように地理的にも空間的にも利用の自由度を高める制度は、法律で定められる一律的制度ではなく、自治体独自の制度として位置付けることが望ましいと考えられる。これによって、各自治体が地域の自然資源の特性を考慮して柔軟に立地を選定できるだけでなく、制度の運用においても地域の人的資源、財政状況に柔軟に対応することが可能となり、制度の運用の実効性を高めることができるだろう。



図V-1 今後の都市自然地に対する制度と行政の役割分担のイメージ

5. 2. 2. 研究上の課題

本論の4章で分析した伝統的楽しみ方においては、一般庶民の楽しみ方に関する資料の入手が困難だったため、社会階層別の楽しみについては触れられなかった。特定階層のみの楽しみ方も含まれているため、当時のすべての人々の楽しみ方であるとは言えない。特に、庶民の活動の実態については、更に、研究を深めることが必要であると考えられる。ただ、本研究では階層と関係せずに、当時の人々に都市自然地において、どのような場所でどのように楽しんでいたのかを全版的に調べたというところに意義があると考えている。

また、漢陽を対象とした研究結果が韓国の一般化としうるか否かについても、もう少し研究の蓄積が必要である。特に、本研究では都市自然地を対象としたことから、漢陽が適地であると想定されたが、地方の農村地域における自然地の伝統的な楽しみ方については更なる研究が必要と考えられる。ただいずれにせよ、漢陽が当時、一番人々が集まっていた韓国の代表的な歴史・文化都市と言われており、漢陽が持つ多様な地形環境の中で多くの人が地形を変更せず、そのままの自然環境を活用し、自然と様々に向き合いつつ満喫していたことは、このことは現代の都市自然地においても利活用の多様性を示唆すると考えられる。

最後に、今後、日本をはじめ、昔から韓国と関係を結んできた他国との比較・考察を加えて、韓国の都市自然地における伝統的楽しみ方をもっと深く論じる必要があると考えられる。なお、これらの伝統的楽しみ方の特徴を現代の都市自然地において反映し、その考え方を展開するためには、都市自然地での人々の楽しみ方に関する空間的特徴を明確にする作業が必要であるが、その点は今後の課題としたい。

付録 1. 緑化・緑地保全に関する条例等の制定一覧と保全地区等の指定状況 (H29. 3. 31現在)

都市名及び 都市数 [※]	条例等名称及び条例数	制定年	改正年	緑化条例等による		緑地保全条例等による			
				地区指定		地区指定			
				有無	面積 (ha)	有無	面積 (ha)		
市町村部 23区	東京における自然の保護と回復に関する条例	1973年 04月 01日	2009年 03月 31日			○	50	757.91	
千代田区	千代田区緑化推進要綱	1998年 10月 01日	2010年 03月 31日			○			
中央区	中央区花と緑のまちづくり推進要綱	1989年 03月 31日	2012年 03月 15日			○	1 (市部と重複)	面積不明	
港区	港区みどりを守る条例	1974年 06月 28日	2009年 03月 25日						
新宿区	新宿区みどりの条例	1990年 11月 30日	2009年 03月 31日						
文京区	文京区みどりの保護条例	1975年 04月 01日	2002年 12月 06日						
台東区	東京都台東区みどりの条例	1992年 10月 01日	2005年 07月 01日						
墨田区	墨田区良好な建築物と市街地の形成に関する指導要綱	1995年 10月 11日	2012年 07月 01日						
墨田区	墨田区集合住宅の建築に係る居住環境の整備及び管理に関する条例	2008年 07月 01日	2012年 07月 01日						
江東区	江東区みどりの条例	1973年 10月 13日	1999年 12月 16日						
品川区	品川区みどりの条例	1994年 03月 30日	2002年 03月 30日						
目黒区	目黒区みどりの条例	1991年 04月 01日	2009年 10月 01日						
大田区	大田区みどりの条例	2013年 04月 01日							
世田谷区	世田谷区みどりの基本条例	2005年 03月 14日	2013年 10月 01日			○	4	1.30	
渋谷区	渋谷区みどりの確保に関する条例	1978年 04月 01日	2001年 04月 01日						
中野区	中野区みどりの保護と育成に関する条例	1978年 12月 16日	2006年 10月 20日						
杉並区	杉並区みどりの条例	1973年 10月 01日	2006年 03月 20日						
豊島区	豊島区みどりの条例	2002年 12月 09日							
北区	東京都北区みどりの条例	1985年 09月 30日	H18. 4. 1						
荒川区	荒川区みどりの保護育成条例	1980年 03月 21日	2007年 09月 27日						
荒川区	荒川区市街地整備指導要綱	1997年 09月 01日	2014年 03月 01日						
板橋区	東京都板橋区緑化の推進に関する条例	1979年 12月 01日	2005年 03月 14日						
練馬区	練馬区みどりを愛し守りはぐくむ条例	1977年 04月 01日	H19. 12. 17 H26. 4. 1						
足立区	足立区緑の保護育成条例	1976年 07月 10日	2009年 03月 25日						
葛飾区	葛飾区緑の保護と育成に関する条例	1975年 07月 08日	2005年 10月 01日						
江戸川区	江戸川区緑化推進要綱	1973年 10月 01日	2004年 10月 01日						
江戸川区	江戸川区住宅等整備事業における基準等に関する条例	2005年 12月 22日	2015年 04月 01日						
八王子市	八王子市民の生活環境を守る条例	1972年 07月 10日	2003年 03月 03日						
八王子市	八王子市緑化条例	1986年 09月 30日				○	6	7.60	
八王子市	市街地内丘陵地のみどりの保全に関する条例	2005年 07月 01日				○	45	28.27	
立川市	立川市緑化推進条例	1974年 04月 01日	2000年 07月 24日			○	12	1.74	
立川市	立川市宅地開発等まちづくり指導要綱	1993年 10月 01日	2013年 04月 01日						
立川市	立川市環境基本条例	1998年 03月 26日	2000年 07月 24日						
武蔵野市	武蔵野市みどりの保護育成と緑化推進に関する条例	1985年 03月 23日	2005年 12月 22日			○	5	0.04	
武蔵野市	武蔵野市緑化に関する指導要綱	1997年 11月 01日	2009年 04月 01日				4	0.77	
武蔵野市	武蔵野市まちづくり条例	2008年 09月 19日	2014年 03月 18日	0	0.00				
三鷹市	三鷹市まちづくり条例	1996年 03月 29日	2014年 07月 07日						
三鷹市	三鷹市緑と水の保全及び創出に関する条例	2000年 03月 30日				○	2	0.97	
府中市	府中市自然環境の保全及び育成に関する条例	1972年 03月 29日							
府中市	府中市地域まちづくり条例	2003年 09月 24日	2014年 09月 26日						
昭島市	昭島市の緑を守り育てる条例	1986年 04月 01日							
調布市	調布市自然環境の保全等に関する条例	1972年 12月 21日	1996年 04月 01日			○	26	2.79	
調布市	調布市ほっとするふるさとをはぐくむ街づくり条例	2004年 09月 22日	2008年 12月 16日						
町田市	町田市緑の保全と育成に関する条例	1983年 12月 24日	2000年 03月 31日						
小金井市	小金井市宅地開発等指導要綱	1972年 06月 01日	2007年 02月 01日						
小金井市	小金井市緑地保全及び緑化推進条例	1983年 07月 09日	2000年 12月 22日			○	2	0.42	
小平市	小平市緑の保護と緑化の推進に関する条例	1973年 04月 01日	1985年 04月 01日						
日野市	日野市緑化及び清浄化推進に関する条例	1975年 12月 27日	H. 18. 10. 1						
日野市	日野市緑地信託等に関する条例	1989年 07月 06日				○	25	4.88	
東村山市	東村山市緑の保護と育成に関する条例	1973年 06月 27日	2002年 03月 28日			○	32	9.21	
国分寺市	国分寺市の緑の保護と推進に関する条例	1974年 02月 19日				○	19	2.53	
国分寺市	国分寺市まちづくり条例	2004年 06月 24日	H23. 8. 11に 改正						
国立市	国立市緑化推進条例	1988年 04月 01日							
国立市	国立市まちづくり条例	2016年 03月 31日							
福生市	福生市の緑を守り育てる条例	1975年 12月 23日	2004年 03月 30日						
狛江市	狛江市緑の保全に関する条例	1973年 03月 31日	2014年 03月 31日			○	12	2.09	
狛江市	狛江市まちづくり条例	2003年 03月 31日	2013年 10月 09日						
東大和市	東大和市みどりの保護・育成に関する条例	1972年 12月 22日	1991年 04月 01日			○			
清瀬市	清瀬しみどりの環境をつくる条例	2006年 03月 31日							
東久留米市	東久留米のみどりに関する条例	1972年 09月 30日	2004年 03月 31日						
東久留米市	東久留米市宅地開発等に関する条例	2005年 09月 26日	2007年 03月 30日						
武蔵村山市	武蔵村山市みどりの保護及び育成に関する条例	1986年 03月 31日	1999年 05月 01日			○			
武蔵村山市	武蔵村山市まちづくり条例	2011年 10月 05日	2015年 09月 04日						
多摩市	多摩しみどりの保全及び育成に関する条例	1975年 03月 31日	2010年 03月 31日						
多摩市	多摩市街づくり条例	2006年 12月 22日	2012年 03月 30日						
稲城市	稲城市における自然環境の保護と緑の回復に関する条例	1974年 04月 01日	H15. 4. 1			○	14	9.94	
羽村市	羽村市宅地開発等指導要綱	1992年 12月 01日	2016年 04月 01日						
あきる野市	あきる野市ふるさとと緑地保全条例	1995年 09月 01日	2005年 04月 01日						
西東京市	西東京しみどりの保護と育成に関する条例	2001年 01月 21日							
瑞穂町	瑞穂町樹木及び樹林地の保存に関する条例	2003年 04月 01日							
大島町	「榎の木」保護育成と回復に関する条例	1979年 06月 30日							
大島町	大島町環境保護条例	2005年 04月 01日							
利島村	利島村保存樹木の指定及び保存に関する条例	2001年 03月 15日							
新島村	新島村環境保全条例	1974年 03月 28日	1976年 02月 20日						
三宅村	三宅村環境保全条例	1973年 03月 15日							
八丈町	八丈町修景美化条例	1975年 03月 31日	1987年 04月 25日						
小笠原村	小笠原村環境保全条例	1988年 03月 14日							
55 (1)		77		0	0	0.00	16	258	830.46
23		26		0	0	0.00	1	4	1.30

資料：国土交通省の都市緑化データベースより

付録2. 自然系名所での活用に関する記録内容

1) 洗心臺

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“春に花見に良い場所である。。歌って笑いながら東臺に上ったら、一万本の白い李の花と赤い桃の花が咲いたね。”(一部)
2	『清陰集』第11巻「雪窖集」〔近家十詠〕、金尙憲(1671)	西麓蒼蒼萬松陰。松間石臺清人心。芳筵美酒娛賓客。復侍琴歌相對樹。園林寂寞喪亂後。明月依然照今古。吾家三世與同里。何日歸來指某樹。 → 鬱蒼とした松林の中にある石臺。飲酒と音楽観賞(琴歌)する姿。明るいう月。
3	『無名子集』第三〔洗心臺遯追樂歌 口占贈之〕、尹愔(1741-1826)	哀絲豪竹媚青春。偶爾相逢酒數巡。自是江山閑者管。不知誰主又誰賓？ → 一人で音楽(絲竹)を楽しみながら江山を見たり春を満喫しているところに、偶然に友達に会って飲酒する姿。
4	『無名子集』第三〔洗心臺〕、尹愔(1741-1826)	迥出世塵上。惟開山鳥喧。綠臺留御榻。紅綦接宮園。恰攬風光浩。都歸體勢尊。徘徊不能去。日暮更開樽。昭回章偉彼。一洗來喧喧。宇宙風雲會。都城花柳園。頌騰東國聖。祥曙北辰尊。 近侍多才俊。廣歌醉玉樽。巖臺高可射。軍馬靜無喧。綠柳千官位。紅心百步園。鼓頻知聖武。峯岷仰嚴尊。歲歲春光裏。均霑內賜樽。尙憶去年事。新恩鼓樂喧。天晴陪法駕。花發賞名園。 世族紆殊寵。詞臣近至尊。駕才空恨望。猶似飲衢樽。 → 人間の世界から遠く外れて鳥の声ばかり聞こえる所に行き、青い樓臺と赤い花弁を観賞する姿。夕方に再びお酒を飲む姿。花と柳の綺麗な都城を見て歌いながらお酒を飲む姿。巖の臺が高いため弓を射ることが良く、青い柳と赤い標的、太鼓の響き。
5	『樊巖集』下〔駕臨洗心臺時賜札乙卯〕、蔡濟恭(1720-1799)	“地勢が険しく、下に千個の園と万本の木が見下ろせる。”(一部)
6	『樊巖集』第1巻(庚和録)〔曾在乙卯 卿宰以東宮誕降賞花洗心臺 有詩傳於後 上感念舊甲重回 親次其時靈城君朴公文秀韻 命諸臣奉和〕、蔡濟恭(1720-1799)	松陰不改舊層臺。前後華筵慶慶開。花外南山如有意。慙慙影入祝君盃。玉趾觀華又此臺。滿城春樹雨新開。桃紅李白渾閑事。天地醺醺北斗盃。 → 高い臺に松の下影でお祝い宴を開いて向こうの山を見ながらお酒を飲む姿。城内の春樹木が雨に降られて開花した姿。赤い桃と白い李を見ながらお酒を飲む姿。
7	『弘齋全書』第6巻2〔登洗心臺賞花。口占。示諸臣和之。以茗熟爲令。〕、正祖(1814)	暇日芳春節。心臺洗俗喧。兩山眞一戶。千樹亦同園。豔豔天光靚。登登地勢尊。坐間多皓髮。來歲又今樽。 → 花が咲く春の暇な日、洗心臺に上がって世俗の騒がしさを洗う姿。門のような二つの山と一つの園のような千本の木。険しく高い土地の形勢。
8	『洌陽歲時記』、金邁淳(1819)	“京城花柳盛於三月 南山之蠶頭北岳之弼雲洗心二臺爲遊賞湊集之所 雲攢霧簇盡一月不衰。。率耆老近密諸臣射侯賦詩。。”(一部) → 南山の蠶頭峯と北岳の弼雲臺と洗心臺が花見の遊賞客が集まる場所である。雲のように集まって霧のように押し寄せ、一ヶ月間ずっと人が減らない。洗心臺に上がり、弓道と作詩する。
9	『樊巖集』第2巻(御定 榮恩録)〔上拜宣禧宮登洗心臺 臺在宮之後岸 煮花射帳 君臣同樂而歸〕、蔡濟恭(1824)	邦慶觀華日。宸誠拜廟時。鸞輿穿樹度。龍袞隔花知。耆老如前歲。春臺又好期。依然栢梁會。絃管被新詩。 → (洗心臺に上がって、花煎遊びと弓術をしながら楽しむ姿。)樹林をくぐり抜けて通ってある花。春日に音楽演奏と作詩する姿。
10	『漢陽歌』、漢山居士(1844)	樓臺江山がよい遊び場
11	『茶山詩文集』第2巻〔奉和聖製洗心臺賞花〕、丁若鏞(1762-1836)1865	千樹花中百尺臺。春風六十一回開。願將滿眼紅霞片。盡汎龍樓獻壽杯。 → 無数の花樹の中に百隻高い洗心臺で春風と赤い夕焼けを楽しむ姿。
12	『茶山詩文集』第4巻〔夏日遣興〕、丁若鏞(1762-1836)	仁王斜抱洗心臺。玉聲看花歲一廻。雲擁翠微開幕次。水流芳潤汎觴杯。李嬪宮靜垂疎柳。徐氏園深映遠梅。咫尺揮毫稱獨歩。幾回天語獎菲才。 → 花見。山を隠している雲。水流に杯を浮かべてお酒を飲む姿。静かな李嬪の宮にしばしば見える柳、徐氏庭園の深く見える梅。

2) 蠶頭峰(南山)

	文献名	記述内容
1	『文谷集』卷一〔登南山望遠〕、金壽恒(1699)	上盡南山上上頭。臨風騁望散幽愁。陶潛籬下悠然見。何似如今我輩遊？ 高臥蠶頭指點間。天邊江水繞群巒。微茫極浦風帆亂。知是龍山、鷺渚間。 → 南山の一番高い峰に上って風当たりながら眺める姿。高く横になつてのんびりと望める山と江。はるかな入り江の船。
2	『無名子集』詩稿 冊二〔登南山蠶頭〕、尹愔(1790)	高坐南山第一峯。煙花濶展萬千重。若爲借得樵夫斧。斫却面前三四松。 → 南山の一番高い峰に上って座ると目の前に広げられる千万重の春景色を観賞する姿。目の前に邪魔になる三四本の松。
3	『洌陽歲時記』、金邁淳(1819)	“京城花柳盛於三月 南山之蠶頭北岳之弼雲洗心二臺爲遊賞湊集之所 雲攢霧簇盡一月不衰”(一部) → 南山の蠶頭峯と北岳の弼雲臺と洗心臺が花見の遊賞客が集まる場所である。雲のように集まって霧のように押し寄せ、一ヶ月間ずっと人が減らない。

4	『東国歳時記』、洪錫謨(1849)	“羣童競買而弄玩至 燃燈之夕例弛夜禁士女傾城初昏遍登南北麓觀懸燈或携管絃沿街而遊 人海火城達夜喧闐鄉村婆提挈爭來必登巖頭觀之”(一部) → 然灯行事があった日の夕方、満都の男女たちが宵の口から南山と北岳の麓に上がって、灯を付けておいた市内の光景を見物する姿。尺八や琴を持って街を歩き回り、遊ぶ人々。
---	-------------------	--

3) 弼雲臺

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李疇(1530)	“弼雲臺近所の人家で花木をたくさん植えて、成人人たちが春日に花見する場所としてはまずここを挙げています。坊間の人々が酒を飲みながら詩を作るために日々集まる。”(一部)
2	『無名子集』詩稿 冊一〔弼雲臺〕、尹愔(1776)	三角山前六角堆，白雲峯下弼雲臺。眼中街市眞棋局，身外風光屬酒杯。 花鳥欣欣皆造化，笙歌處處自清哀。微吟緩節歸來興，天際輕陰薄暮開。 → 目の前の碁盤のような市街地。夕暮れになるまで、周りの風光を見物して飲酒し、花と鳥の調和を考えながら音楽(笙)観賞する姿。
3	『無名子集』詩稿 冊一〔登弼雲臺 丙申〕、尹愔(1776)	春意長安頓覺奢，弼雲臺上領繁華。風微倦舞千街柳，氣暖爭妍萬種花。自是吾身高在此，非關眼力直窮遐。西城日暮輕陰好，且向譙樓望天涯。 → 春の気色(春意)が漢陽に熟し、弼雲臺の上にながらぎの春意を見物。風が少なく、街ごとに柳の枝は静かである姿。 暖かさに満開したあらゆる花 高い臺にいと遠くまで見えるね 日の暮れるころ美しい薄雲(日暮輕陰好) → 晴れた春日に弼雲臺に上がり、柳と様々な花及び遠くの景色を觀賞して夕暮れに帰宅
4	『燕巖集』第四卷「映帶亭雜咏」〔弼雲臺看杏花〕、朴趾源(1737-1805)	斜陽候斂魂 上明下幽靜 花下千萬人 衣鬢各自境 → 夕日が暮れて行たら上は明くて下は幽邃な姿。花の下で遊ぶ多くの人々。
5	『燕巖集』第四卷「映帶亭雜咏」〔弼雲臺賞花〕、朴趾源(1737-1805)	戲蝶何須罵劇顯。人逐隨蝶趁芳錄。春青畫白遊絲外。井烘烟暄紫陌前。各各禽啼容汝意。頭頭花發任他天。名園坐閱無童髻。白髮堪憐異去年。 → 蝶のように花と遊びに行く人々。陽炎の向こう青い真昼の春。鳥のなき声とあちこち咲いている花。名園に座って見回る姿。
6	『青莊館全書』第二卷「嬰處詩稿二」(嬰處詩稿二)〔弼雲臺〕、李德懋(1741-1793)	晴雲西郭試春衣。眼纏遊絲百丈飛。連日莫辭成晚晚。是遊何幸及芳菲。魚鱗萬屋蒸花氣。蓮朶三峯抱日暉。景福地明翔白鳥。吾心遙與爾忘機。 → 陽炎が燃える晴れの春日に村の家ごとに咲いた花々と遠くの峰に日が書けているのを觀賞する姿。
7	『無名子集』詩稿 冊四〔弼雲臺〕、尹愔(1804?)	西臺聳出石寬平，白日青春富洛城。玉輦繞花清蹕靜，朱樓遮柳遠煙輕。何村桃李高門擁，是處林泉獨樹明。細路回筇餘興在，浮雲入望却愁生。 → そそり立って広くて平らな臺。麗らかな日差しと青い春が豊かな都城。柳に隠された赤い樓臺。門が高いある村の桃の花。樹林と泉にすっきりとした一本の木。
8	『茶山詩文集』第1卷〔春日棟泉雜詩〕、丁若鏞(1762-1836)	“看花要往弼雲臺”(一部) → 花見をするために弼雲臺に行く
9	『京都雜志』遊賞、柳得恭(1800年前後)	“弼雲臺杏花 北屯桃花 興仁門外楊柳 天然亭荷花 三清洞蕩春臺水石 膾詠者多 集于此都城周四十里 一日遍巡周覽城内外花柳者爲勝 凌晨始登昏鍾可畢 山路絶險有委頓而返者。” → 弼雲臺の杏花、北屯の桃の花、興仁門外の楊柳、天然亭の蓮華、三清洞の蕩春臺の水石がお酒と歌を楽しもうとする人々がたくさん集まる場所だ。都城の回りは40里だが、これを1日に回りながら城内外の花と柳を觀賞することをよい見物となされていた。早朝に登り始めたら、夕暮れにすべて終えるようになるが、山道が険しくて放棄して戻ってくる場合もある。
10	『弘齋全書』卷二「春邸錄二」〔国都八詠〕〔弼雲花柳〕、正祖(1814)	雲臺著處矜繁華。萬樹柔楊萬樹花。輕輦遊絲迎好雨。新裁浣錦綴明霞。粧成白袷皆詩伴。横出青帘是酒家。獨閉書帷何氏子。春坊朝日又宣麻。 → 万本の垂り柳と万本の花木。陽炎と夕焼け。作詩する姿。
11	『洌陽歳時記』、金邁淳(1819)	“南山の巖頭峯と北岳の弼雲臺と洗心臺が花見の遊賞客が集まる場所である。雲のように集まって霧のように押し寄せ、一ヶ月間ずっと人が減らない。”
12	『東国歳時記』、洪錫謨(1840頃)	“踏青から有来した花柳(山丘と溪谷を探して遊びに行くこと)の場所で弼雲臺の杏子の花、北屯の桃の花と興仁門外の柳等が景色が一番良い場所として花柳の遊賞客が主にここに集まる。”
13	『漢陽歌』、漢山居士(1844)	樓臺江山がよい遊び場

4) 箭串橋

	文献名	記述内容
1	月山大君(1454-1488) 〔箭郊尋芳〕	春郊細草如華茵。春風載酒尋遊人。朝來駿馬踏青去。日暮醉歸空惜春。青衫年少上樓曲。高閣笙簫政喧吸。垂楊柔弱綠陰深。明日秋千掛院落。 → 春風が吹く日、酒を積んで馬に乗って遊びに行き、郊外の錦のような細い草を觀賞し、夕日に酔って帰る時、少年たちが高い楼閣で、笙と洞簫を演奏する姿と青い柳を詠む。
2	『新增東國輿地勝覽』、梁誠之(1415-1482)	承閑信馬出紅塵。極目郊原物像新。天外遠山青似黛。雨餘芳草碧如茵。鶴鶩上下鳴初日。牛馬紛披散四垠。浩蕩春風三月暮。不妨携酒賞良辰。 → 馬に乗って出かけたなら遠く見える新しくさわやかな野の風景。遠くに高く濃い山。雨後の青い花と草。暖かい朝の鶩の泣き声。四方に散らばる牛群と馬群。3月が終わるころの春日、お酒を飲みながら楽しむ姿。
3	『三灘集』卷之一〔進新都八景詩〕 箭郊尋芳、三灘 李承召(1422-1484)	芳草全勝錦作茵。紛紅駭綠正愁人。士女相將競光陰。羅縵繡幕照青春。黃離白日玲瓏曲。流年正似一呼吸。急喚美酒酬佳節。倒載歸來烏帽落。 → 芳草の上に座って紅青と光陰の景色を觀賞する姿。夕方になり、黄鶩の鳴き声を聞きながら飲酒する姿。
4	『三灘集』卷七〔新都八景〕北郊牧馬、鄭道傳(1791)	瞻彼北郊如砥。春來草茂泉甘。萬馬雲屯鵠厲。牧人隨意西南。 → 春日、平たい野の草と馬群を望む姿。
5	『澤堂集』「澤堂先生集」卷之一〔漢都八景 月課〕 箭郊牧馬、李植(1674)	望中雲錦布官郊。豐草青青蓋地坳。迴立蒼明旭日。長鳴噴玉颯風颺。房精舊入耽羅貢。駿骨常隨太僕抄。最喜華陽高絕處。一樽臨眺聽吹簫。 → 涼しい風が吹く朝、郊外の絹雲のような青い草原と青い空。高い亭に上がって風景を見下ろしながら飲酒と音楽觀賞する姿。
6	『樂全堂集』卷四〔水雲亭 青溪晚雨〕 其二 箭郊平蕪、申翊聖(1682)	春生沙苑外。日落華陽道。千群望似雲。漠漠王孫草。 → 春の夕方、遠くの雲のような千群の馬と草。
7	『四佳集』「四佳詩集補遺一 東文選」〔漢都十詠〕 箭郊尋芳、徐居正(1705)	平郊如掌草如茵。晴日暖風濃殺人。朝來沽酒典青衫。三三五五尋芳春。飛觴轉急流水曲。清尊易枯長鯨吸。歸來駿馬踏銀蟾。玉笛聲殘杏花落。 → 風が暖かい晴れ春の朝、お酒を買って友達と春遊びに行く姿。平らな野と草を見ながら飲酒する姿。浮かぶ月を見ながら帰る姿。
8	『燃藜室記述』別集 卷十六「地理典故」〔都城宮闕〕、李肯翊(1776)	京成の八詠の中の一つである。(東門教場) 京成の十詠の中の一つである。(箭郊尋芳)
9	『弘齋全書』卷之百六十八「日得録」八〔政事〕、正祖(1799)	“箭郊の牧場は、泉が甘く草が豊かだ。”
10	『虛白堂集』「虛白堂詩集」卷一〔漢都十詠 次徐達城韻〕、成倪(1841)	雨餘芳草鋪翠茵。滿郊春色迷行人。東門十里風日美。玉壺載酒尋晴春。心探野趣坐溪曲。高閣笙簫謔喧吸。銜杯一笑罄餘歡。天際斜陽半輪落。 → 雨後、平らな草と野の春景色。晴れて遠くまで見える野原。小川に座って郊外の風景を觀賞する姿。夕方までお酒のみながら、近所の楼から聞こえる音楽を聞いた、しゃべりながら遊ぶ姿。

5) 北屯(北屯 or 北渚洞)

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“洞のうち、桃の木を植えて春に桃の花が花盛りと、都城人たちが遊びながら見物する。。。清き流れの丘に沿って住民たちが桃の木を植えて生活する。晩春ごとに遊んでいる人と車馬がいつばいだ。”
2	『無名子集』「無名子集」詩稿 冊二〔北渚洞〕、尹懽(1741-1826)	洞裏桃花滿。村中澗水馳。拂枝香襲袂。臨石影搖池。眼醉何須酒？神癡未暇詩。遊人喧日夕。俱是樂平時。 → 谷の中に満開した桃の花。村を通り過ぎて急いで流れる溪水。香しい花の枝をかき分け、岩に上がって水に映った影を見る姿。昼夜で見物客らで騒々しい姿。
3	『無名子集』詩稿 冊三〔上巳遊北渚洞〕、尹懽(1741-1826)	蘭亭千載後。暮春歲癸丑。麗日屬上巳。芳辰携好友。城北東流水。石上清瀏瀏。羽觴波綠蟻。屈曲隨湍走。詩文傲今古。談笑溢左右。隔岸笙歌起。投壺迭勝負。桃花滿眼舒。色之以綠柳。 深紅映淺紅。霞蒸亘原歎。人家極瀟灑。夾溪開竹籬。悅入武陵源。自疑是漁釣。騁望暢幽情。緬想永和九。未知逸少會。亦有此樂否？斜日蕩林梢。光景萬千糺。坐久還移席。壺乾更呼酒。 齊言興未已。欲起時被肘。兒童走復來。喧說終在口。閑僻兼富貴。茲遊誠難朽。名區本無主。世事復何有？昔聞沂雩詠。聖師喟然取。嚶嚶願學志。不恨沒藜莠。 → 春、花見で石の上を流している溪流を觀賞しながら飲酒、作詩、談笑、投壺などを楽しむ姿。多くの真紅と桜色の桃の花と青い柳の調和を觀賞する姿。あちこちの坂、人家、谷川を見回す姿。席を移しながら飲酒と談笑する姿。
4	『青莊館全書』「青莊館全書」卷之二十(雅亭遺稿十二- 應旨各體)〔城市全圖〕、李德懋(1741-1793)	北屯桃花天下紅。短籬人家碧溪澗。(一部) → 青い溪流辺にある人家の低い垣から見える赤い桃の花。
5	『京都雜志』〔遊賞〕、柳得恭(1800年前後)	“弼雲臺杏花 北屯桃花 興仁門外楊柳 天然亭荷花 三清洞蕩春臺水石 觴詠者多 集于此 都城四十里 一日遍巡周覽城内外花柳者爲勝 凌晨始登昏鐘可畢 山路絕險有委頓而返者。” → 弼雲臺の杏花、北屯の桃の花、興仁門外の楊柳、天然亭の蓮華、三清洞の蕩春臺の水石がお酒と歌を楽しもうとする人々がたくさん集まる場所だ。都城の回りは40里だが、これを1日に回りながら城内外の花と柳を觀賞することをよい見物となされていた。早朝に登り始めたら、夕暮れにすべて終えるようになるが、山道が険しくて放棄して戻ってくる場合もある。

6	『樊巖集』「樊巖先生集」卷之三十五〔遊北渚洞記〕、蔡濟恭(1824)	“巖之下莎與沙半之 意行意坐俯視之 村家點點分麓。。。都人士自達官 至閭巷民庶 遊賞如不及 車馬殷殷轟轟 歌呼迭作 間以笙簫。”(一部) → 行ったり座ったりしながら見下ろすと、村家が点々と山の麓に散らばっているが、ほとんど桃の花を垣根にした。。。都城の人々は階層に関係なく遊んで見物することを時間が足りないように熱中した。車と馬の轟音や歌の音、笙と尺八吹く音が聞こえた。
7	『東国歳時記』、洪錫謨(1840頃)	“踏青から有来した花柳(山丘と溪谷を探して遊びに行くこと)の場所で弼雲臺の杏子の花、北屯の桃の花と興仁門外の柳等が景色が一番良い場所として花柳の遊覧客が主にここに集まる。”(一部)
8	『阮堂全集』「阮堂先生全集卷九」〔北屯看桃花〕、金正喜(1868)	城東尺五地。花發萬林齊。佛乘如將悟。仙源了不迷。乳苔又礪合。眉黛兩山低。罨畫村茅潔。行當借地棲。 → 城の近所の樹林に開花した花。交差する小川に咲いている青い苔。両側に離れている眉毛のような低い山。網のように人家が並べている村。

6) 清風溪

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“仁王山の麓にあるが、洞府がほんのりと深く、泉石が美しく、静かながら遊びながら見物する値する。”(一部)
2	『象村集』「象村先生集」第25巻墓誌銘〔同知敦寧府事金公墓誌銘〕、申欽(1566-1628)	“知樞以下三君鼎宅相望。知樞公家占北麓最勝。名曰青楓溪。水石爲郡中甲。每於佳辰令節。諸子孫必盛饗品備志物。延素所客習於公者以娛公。欽亦靡不與焉。雕軒板輿。往來有煒。几山案溪。絲彈竹吹。婆娑盤桓。公類其間。間出談論。纏纏不厭人聽。顧見諸子孫列侍其側。袍笏盈床。符彩互映。意者公之福祿。愈往而愈未艾也。噫。其盛哉祉哉。係以銘曰。(一部)” → 水石が良い場所。宴会などで飲食、音楽観賞、談笑する姿。
3	『仙源遺稿』上〔太古亭即事〕、金尙容(1611)	樹密濃陰靜。亭虛小簾涼。泉鳴階下珞。荷送枕邊香。手懶拋詩卷。神昏入睡鄉。山中閑意味。偏覺此時長。 → 夏に亭に上がって、蓮華の香りをかきながら、亭の下を流している溪流の音を聞く姿。一人で詩を詠んだり、昼寝しながら楽しむ姿。
4	『谿谷集』「谿谷先生集」卷之二十七〔清風溪閑次韻〕、張維(1643)	咫尺連園圍。風煙自不通。因人地始勝。造物意偏工。嶽影當軒外。溪雲入戶中。秋光更點綴。細菊間丹楓。 → 繁華街と近いが、世の中から断絶されたような姿。山の影と溪流の雲霧。秋の日光と薄い黄色の菊と赤い紅葉。
5	『清陰集』「清陰先生集」卷之十一〔雪窗集〕〔近家十詠〕、金尙憲(1654)	清風溪上太古亭。吾家伯氏此經營。林壑依然水墨圖。巖崖自成蒼玉屏。父子兄弟一堂席。風月琴樽四時樂。勝事如今不可追。此時此情何人識。 → 樹林がある谷に屏風のような岩の絶壁の中にある楼。四季に月と風、音楽(琴)、飲酒などを楽しむ姿。
6	『農巖集』卷之一〔春夜。偶至楓溪。與士興 時傑 昆季晤語。翼朝。賦此寄之。乙卯〕、金昌協(1675)	山暝暖蒼翠。月華散疎林。幽人坐虛閣。萬籟靜方沈。澗芳識幽花。谷響聞棲禽。偶至本無期。却忘閒夜深。起來步庭除。竹柏交清陰。微風松際來。爲我吹素襟。怡然適性靈。遂獲塵外心。欲去復遲回。巖泉有遺音。 → 松林、竹、側柏林の間に散らばる月、溪流辺の花の香、鳥の声を楽しみながら、庭園を散歩する姿。
7	『農巖集』卷之一〔夜飲楓溪時。池閣新修。〕、金昌協(1683)	蒼蒼雙檜外。月出素雲層。堯寧新堂潔。壺樽好客仍。澗流祭伏檻。池影倒張燈。慣是追游地。清幽似未曾。 → 月と雲、溪流、池の中の影を見ながら飲酒する姿。
8	『農巖集』卷之一〔宗會既罷。復與數三兄弟。飲清風池閣。〕、金昌協(1651-1708)	歡讌殊未疲。馳景忽西落。撤筵松林阿。移席清風閣。曲池映華棖。高炬爛炤灼。騎歸紛馳散。留寫尙交錯。視樽惜餘醪。騰觴命新酌。逸興盈素襟。嘲諧相噴薄。童殺詎畏罰。嚶鳴固同樂。申歌屬四座。側耳行來作。 → 夕方に松林の坂での遊びを止め、楼に席を移す姿。曲がった池に映す影を見て飲酒、談笑、歌う姿。
9	『無名子集』詩稿 冊一 卷一〔清風溪金仙源家池閣。次壁上韻。〕、尹愾(1741-1826)	昔日仙源宅。今來感物華。深深泉石好。落落檜松多。入洞無塵想。凭軒自浩歌。清風吹不盡。林際莫昏鴉。太古亭前水。清風閣下通。幽深見天巧。粧點費人工。不意城塵裏。忽如峽霧中。丁寧留後約。秋色滿山楓。 → 深い渓谷での歌う姿。水石と松、清い風、夕方のカラス。山いっぱい紅葉がきれいな秋の日。都城の中であるが深い山谷のような風景に感動する姿。楼亭の前の溪流。
10	『青莊館全書』卷之二「嬰處詩稿二」〔同尹景之 秉鉉、汝範、明五、稚川、汝溫遊清風溪。帶女蘿。嘯歌竟夕。〕、李德懋(1741-1793)	澗雲橫抹岫如眉。萬樹蟬清落照時。自在癡儒青薛被。何來髯客鐵騎驄。大明石剝丹書淺。第一池涵柏影欹。縹緲尹生能卷葉。七星畔劃然吹。 → 晴れの日、山と夕焼け、セミの鳴き声を観賞しながら、草笛の吹く姿。
11	『東塾集』卷之七「楓溪集勝記」、金養根(1734-1799)	青楓溪。吾先世舊居。而近爲仙源先生後承所主。在京城壯義洞西北。坊是順化。麓是仁王。一名青楓。溪以楓名言。必有其義而今未可攷。蓋白嶽雄峙於其北。仁王環擁於其西。一溪雷轉。三塘鏡開。西南諸峰。林壑尤美。溪山之勝。殆甲於郡中。蟠龍之崗。或稱卧龍。實爲屋後主山。其前即蒼玉峰也。峯西數十步。爰有小亭翼然。臨于溪上。用茅覆之。一間有餘。二間不足。可坐數十人者。太古亭也。右挾清溪。左抱華嶽。取唐子西山靜似太古之句名之。有老杉數株。碧松千章。前後森蔚。循亭而左。有三池皆鍊石而方築之。自亭北穴引溪流于巖底。一池既盈。又入第二池。二池既盈。又入第三池。上日照心。中曰涵碧。下曰滌襟。我樂齋先祖之又號三塘以此。涵碧之左。有大

		<p>石平正其面。厚薄相等。廣袤恰如數席布。可坐彈琴。故別名曰彈琴石。聞自忠原之彈琴臺。隨漕船來者而名之。亦以其蹟也。彈琴之左。有四間堂二間房。房前又為半間軒。即所謂青楓池閣。我蒼筠先祖南還後。遂為仙源粧點者也。閣額韓石峯畫筆。又於梁上揭清風溪三字。籠之以紅碧紗者。宜祖御筆。而閣之東為嘯傲軒。即陶詩嘯傲東軒下。聊復得此生之意也。軒右為溫室。室中扁以卧遊庵。用宗少文卧遊名山之義。山內勝槩。枕上可盡。南廳楣上刻揭昭顯世子所書窓臨絕磴聞流水。客到孤峰掃白雲之詩。境絕可想也。庭南有數百丈大檜。年可數百。而無一枝向衰可喜。西廳外壇上有二株古松。涼陰滿地。最宜月夜。名曰松月壇。壇之北石壁如畫屏。有三松狀如偃蓋者。為蒼玉峯。清陰詩曰林壑依然水墨圖。巖厓自成蒼玉屏。亦名畫屏巖。會心臺在太古西。凡三層。真簡文所謂會心處不必在遠者也。會心之左右磴上。有凜然祠。則仙源影子奉安處也。祠前石面。刻大明日月四字者。尤庵宋先生筆。天遊臺在會心上。翠壁斗起。自然成臺。一名憑虛。一區形勝。盡輸于此。壁面刻朱夫子百世清風四大字。故又名清風臺。臺上為振衣巖。俯臨長安。岡非千仞而意自不俗。亦稱振衣岡。會心前石路劣容人足者。為朝真磴。天遊朝真之西。憑虛漱玉之下。有洗耳巖。二層落瀑。巖石成凹。有類洗盤。故得是名云。洗耳下流。與振驚瀑合。瀑在迷花洞口太古亭南。夏則奔流激石。冬則冰雪凝懸。狀如驚振。奇絕可觀。由洗耳振驚。緣溪北上。為爛柯谷。谷口有玉流巖。一名漱玉。有石平鋪。清泉流離。可濯可浴。中有玉簪峰。峭石如削玉。昌黎所謂山如碧玉簪者。逼境語也。溪邊有巖作階級者。上有小石壇。疑是古人祭星處。故名之。其左拜星壇。左有遠心庵。所謂佛堂故基。極幽靜蕭灑。崗巒環複。桃杏芬郁。不覺城市咫尺。真僊境也。金僊樞道淳甫年前以萊伯履禧氏所送幾金重修。扁用草書。黃運祚筆。爛柯之南。有遊仙峯。洞壑深僻。松檜葱蒨。人跡之所罕到也。其南為羽化臺。又其南為青霞洞。蓋仁王之西有三大峰。第一峰即霞月。春秋月落。正在峰頂。故名之。其左稍北處為白雪嶺。所謂太白峯者。無乃是嶺否。白雪下有聖齋井。今稱七星巖。長安士女之有求虔禱者咸歸焉。井邊有石燈白。下有丹崖石室。其下為遊仙洞。第二峰即碧蓮。在落月下。峰之狀如蓮花始吐。下接清冷峽。東望振衣岡。所謂紫烟峰者。必在此中。第三峰則柱笏。其下為清冷峽。峽在笙鶴碧蓮之間。翠壁削立於峽中。水聲冷冷。深不可俯瞰。水落處謂之飛來泉。棲鶴巖在碧蓮下。石壁巖絕。不可攀援。有鶴鸞騰鶴來棲。其南崖有坐佛石龕。側擁峽口者為風詠巖。巖下有長松一樹。青霞洞在羽化南。由一線樵路。尋入洞中。則清流瀉玉。六月猶寒。上有笙鶴峰。峯峯森如削玉。苔蘚蒼然。望之如笙鶴僊人。翻翻來儀。其南清冷翠屏巖。又在青霞中。丹崖蒼壁。如張繡屏。盛夏猶有爽氣。不可久留。青霞之中有羽化臺。臺上下有松三兩株。極清曠爽。小坐其上。飄飄然有白日昇僊之想。神女峰在臺上。小峰娟妙可愛。名之以神女。取老杜語也。所謂朝雲峰者。必在此中。北與遊仙洞接。青霞之中。又有忘歸巖。其下為畫屏巖。即松月之北池閣之西也。迷花洞在太古亭南楓溪上。路由振驚巖入。春來杜鵑爛漫山坡。令人魂迷眼眩。有細礪兩崖中坵如石門。上有盤陀大石。可坐四五十人。名曰管雲臺。白嶽三角諸峰。羅列眼前。臺西為送月嶺。踰小嶺有洗心臺。管雲石門之邊。為舒嘯臺。山杏千餘株。當春盛開。如張雪幄云。而今亦無之可恨。臺下為鳴玉磻。即太古亭南墻外也。遊仙清冷青霞迷花四洞之水。於此會同。故亦名清流湍。峯之在嘯傲南者亦稱柱笏。無乃一山而再見否。朝夕相對。爽氣常滿襟袖。卧遊之西。有月華井。廢久不濽。吾甚惻之。適於是年暮春者。大駕親御太古亭上。顧瞻凜然祠曰此仙源影子閣也。名賢攸芋。不宜荒廢。仍令度丈量宜修理。於是乎古祠亭閣。丹青一新。門墻肅淨。溪山改觀。而井亦改築焉。真所謂王明並受其福者也。萬松岡在溪南案對處。松多先生手植。而是為都城之內。朝家所管領云。歲庚戌清和節。</p> <p>→ 石の上で音楽演奏(彈琴)する姿。夜景を楽しむ姿。</p>
12	『江漢集』卷一〔太古亭、會李獻可、宋士行〕、黃景源(1790)	<p>芳園暖照陽，嘉樹鬱蔥蒨。耿介二友生，携酒命良宴。暄泉脉動，露潤花光變。高亭棟石池，微雨清琴硯。念昔文忠公，於焉會群彦。風儀尚不泯，典刑如復見。孤蹤守空檻，殘月照哀椽。君子明大義，尊榮非所戀。</p> <p>→ 暖かい日、お酒を飲みながら樹林と泉、花を観賞する姿。小雨が降ると高い亭に上がって琴を演奏したり、字を書いたりする姿。</p>
13	『東国歳時記』、洪錫謨(1840頃)	<p>“都俗登南北山飲食以爲樂 蓋襲登高之古俗也 楓溪後凋堂南北漢道 峯水落山有賞楓之勝”</p> <p>→ 都城の風俗にこの日(九日)の南山と北岳に上がって食べながら遊び。これは登高する中国の昔の風習によるものである。青楓溪、後凋堂、南漢山、北漢山、道峰山、水落山などが紅葉がきれいだである。</p>

7) 後彫堂

	文献名	記述内容
1	『月汀集』卷三〔謹次壁上韻奉賀主人〕、尹根壽(1537-1616)	<p>重訪終南舊日園，朝來喜氣正盈門。高情幾度思先代，遺慶爭看屬後孫。翠壁含風枯葉響，寒溪得雨亂流喧。忽忽未展悲歡意，更待山花映酒樽。</p> <p>→ 久しぶりに園に来て、青い絶壁の枯れ葉が風に揺れる音、雨が降ってうるさく流れる冷たい溪流を見ながら飲酒する姿。</p>
2	『記言』卷之十三〔後凋堂記〕、許穆(1674)	<p>後凋堂者。世祖名臣權翼平公舊宅。堂在木覓北麓祕書監東巖石之崖。世祖幸其第。後世迄于今稱云。其西崖。有石泉。命曰御井。其上。有素閑堂遺址在焉。堂三間。南有溫室。冬就溫。夏就涼。不尚奢華。蒼崖夕照。戶牖蕭灑。制作古遠。自相國之世。歷數百年。六傳而至司徒公。迺始重創之。不改棟易楹。亦不加增飾。其傾圮者完。黝暗者新。堂宇如舊。堂廡南。泉出石下。極清冽。階礎下。皆山石盤陀。庭畔層壁尤奇。三月山花盛開。滿園多松。冬寒至。柯葉不改。太史公稱歲寒然後知松柏之後凋。此所謂後凋堂。警戒之義也。地勢高。觀望北麗。華山，白岳，仁王列岫。禁苑穹林。層宮</p>

		高闕。建官立市。治道之所出。百貨之所殖。四方輻輳。經緯九軌。紫陌萬井。與又溪。鶴洞。並稱南山勝區。司徒公二世。有師傳蹟。穿堂前石池。苔深水清。巖影畢照。師傳有男歿。好方正能博文善行。吾以爲權氏有人。歷舉前代古事古跡。請余後調堂記。文成三百志之。我大行十五年冬十月辛丑。 → 木覓山の北側崖の巖石に位置。青い崖に照らす夕焼け。石下の冷たくて澄んだ泉水。砌下の盤石と庭の畑には切り立った崖。3月の山花と冬にも青い松。地勢が高くて北麗を望むと見える山(華山, 白岳, 仁王)。林の中で突き出た宮殿と官庁、市街地。堂の前に石を破って作った池。濃い苔と清い水、水に映った巖の影。
3	『松巖集』續集卷四〔次後凋梅答韻〕、權好文(1680)	獨占幽軒第一春, 相看皆是舊情人。細香便可風前惹, 瘦影還宜月下親。 → 早春に寂しく咲いた花。風に吹いてくる爽やかな香り。月の下の清い梅の枝。
4	『東国歳時記』、洪錫謨(1840頃)	“都俗登南北山飲食以爲樂 蓋襲登高之古俗也 楓溪後凋堂南北漢道 峯水落山有賞楓之勝” → 都城の風俗にこの日(九日)の南山と北岳が上がって食べながら遊び、これは登高する中国の昔の風習によるものである。青楓溪、後凋堂、南漢山、北漢山、道峰山、水落山などが紅葉がきれいである。
5	『雲養集』卷六〔贈西湖子爵〕、金允植(1909)	名樓暇日共飛騰, 談屑霏霏到夕陽。時事關心唇齒切, 簪襟無際海山長。春深花木綠泉館, 夢繞烟霞片瀨莊。細月簾櫳人半醉, 庭梅自發吐清香。 → 暇な日に有名な樓で夕暮れまでお酒を飲みながら談笑する姿。春の花と木、霧と夕焼け、月と梅。

8) 雙檜亭

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“倉洞の前にあるが、石澗水を見下ろし、紅葉と柏が多くて、秋に遊びながら見物するのに適する。”
2	『漢京識略』18c後半	“南山の下の倉洞の前にある。石の隙間の泉とカラコギカエデ、ダンコウバイのようなものが多くて9月の紅葉の時、遊びするのに良い。”

9) 興仁門(東池)

	文献名	記述内容
1	『無名子集』詩稿 册六〔其四百四十三〕、尹懽(1807)	西京幸復東池, 設宴泛舟更賦詩。惟一條差可取, 尋求箕墓立箕祠。 → 東池で、船遊びをしたり、宴会を開け作詩する姿。
2	『芝峯集』卷一〔庇雨堂八詠〕(東池細柳)、李蔭光(1633)	楊柳滿池渚, 東風初罷絮。枝枝颺碧絲, 綽得流鶯語。 → 池辺の青い垂り柳が風に揺れている姿。ウグイスの音。
3	『東史綱目』、安鼎福(1712-1791)	→ 船を東池に浮かべ、宴会を開けて酒を飲みながら作詩する姿。
4	『京都雜志』〔遊賞〕、柳得恭(1800年前後)	“弼雲臺杏花 北屯桃花 興仁門外楊柳 天然亭荷花 三清洞蕩春臺水石 鶻詠者多 集于此 都城周四十里 一日遍巡周覽城内外花柳者爲勝 凌晨始登昏鐘可畢 山路絶險有委頓而返者。” → 弼雲臺の杏花、北屯の桃の花、興仁門外の楊柳、天然亭の蓮華、三清洞の蕩春臺の水石がお酒と歌を楽しもうとする人々がたくさん集まる場所だ。都城の回りは40里だが、これを1日に回りながら城内外の花と柳を観賞することをよい見物となされていた。早朝に登り始めたら、夕暮れにすべて終えるようになるが、山道が険しくて放棄して戻ってくる場合もある。
5	『興猶堂全書』詩集 卷二〔將赴忠州出國東門作〕、丁若鏞(1762-1836)	興仁門外柳濛濛, 極目川原霽色同。野水逶迤流白日, 城雲澹蕩耐輕風。糝黃嫩葉迷芳甸, 漲綠新苗沒遠空。一馬二童頗簡略, 我行隨意適西東。 → 興仁門外の生い茂る柳。遠く清い川と原。曲がりくねった野原と川に照らす明るい日。城と風に漂う雲。都城外の郊外に生い茂った淡黄色の葉。広くに敷かれた青い稲。
6	『東国歳時記』、洪錫謨(1840頃)	“都俗出遊於山阿水曲謂之花柳卽上巳踏皐之遺俗也 弼雲臺杏花北屯桃花興仁門外楊柳其最勝處多集于此 京外武士及里民張侯分耦爲射會以賭勝負飲酒爲樂 秋節亦然 姑娘採取皐草盈把者作髻削木而加之着以紅裳謂之閣氏 設褥席枕屏以爲戲 兒童折柳枝作築以吹之 謂之柳笙” → 踏青から有来した花柳(山丘と溪谷を探して遊びに行くこと)の場所で弼雲臺の杏子の花、北屯の桃の花と興仁門外の柳等が景色が一番良い場所として花柳の遊賞客が主にここに集まる。

10) 西池(西池 or 天然亭 or 盤松池)

	文献名	記述内容
1	〔西池賞花記〕、李胤英(1714-1759)、李麟祥(1710-1760)	“私たち五人はゆつくり歩いて、西池と一緒に達した。砂丘が雪のように白いが、木の影がひらひらた。万余りの蓮華が月光を浴びて光彩を放つが、露は宝玉のように光り輝いていて香ばしいた。”(一部)
2	『茶山詩文集』2 詩集 卷二〔重游西池〕、丁若鏞(1795)	繫馬林亭下，臨風水柳傍。夕陽棲菌菴，秋色滿池塘。澹淡猶殊豔，連延作衆芳。壺乾勿遽起，且復挹清香。 → お酒を飲みながら夕日に輝く蓮華と池を觀賞し、蓮華の香を楽しむ姿。
	『弘齋全書』卷二「春邸録二」〔国都八詠〕(盤池賞蓮)、正祖(1814)	曲塘滄瀟一泓然。十里香生萬本蓮。拌露聯珠渾絳粉。抽絲結蒂抵青錢。偏憐兒女開萍道。誰訪仙人泛葉船。恍似瀛溪光霽夜。靜研無極欲成編。 → 曲がった池にきれいに溜まった水。芳しい万の蓮華。赤い玉のように蓮華に結ぶ露と蓮の葉。船を浮かべるため、子供が水草の道を開いている姿。
3	『竹石館遺集』一「卯君與玉流紫霞簾飲會天然亭」〔卯君與玉流，紫霞，簾飲。會天然亭。余以公事未與。而諸君分酌。以竹字屬余。〕、徐榮輔(1803)	紫霞山人才不俗。胷中渭川千畝竹。暇日訪我到西池。誰與共者來比屋。吾宗才標通籍美。玉川先生山野服。盤松亭子無暑氣。綠波清水千千斛。此池荷花一國聞。膩碧粉紅寫漪縠。霞客乘興動毫素。滿堂涼颯生肅肅。清詞艷語左右發。政如逸蹄相馳逐。祿米我足充沽酒。翠瓜紅杏飯肥肉。人生會意苦難得。却嗟臨時公事速。五言長城柏梁副。蘭亭一詠元陳目。 → 亭で蓮華を觀賞しながら、飲酒、作詩と食事する姿。
4	『蕪山紀程』卷之一〔十一日〕(天淵亭)、李海應(1803)	夕抵良策。亦龍之別館也。亭在館之南。背巖臨淵。境甚絕。左於右壁間。以朱使之蕃筆。刻日第一溪山。又曰聽流巖。亭扁曰三奇亭。以江山之勝。亭榭之麗。妓樂之妙。俱得三奇也。登亭會酌。夜久始散。 → 亭でお酒を飲みながら周辺の景色を觀賞したりする姿。
5	『蕪山紀程』卷之四〔十五日〕(天淵朝雨)、李海應(1804)	平明睡起。雨脚濛濛。殘葩瘦蕊。倉潤於岩壁間。比諸昨冬。景色倍佳。暫登天淵亭。聽樂而發。(鳥語盈簷客倚欄。蒼屏嵐氣遠空濛。池塘上下花千朵。開盡東風細雨中。) → 雨が降る夜明けに亭に上がって音楽を聞きながら花を觀賞する姿。
6	『無名子集』詩稿冊四〔天然亭賞蓮 時花已盡〕、尹楮(1808)	蓮花成子已凋零，蓮葉滿池猶自青。秋風一夜催霜後，藕敗香殘只有萍。 → 蓮華が散って青い蓮葉いっぱいの秋の池。
7	『與猶堂全書』詩集卷四〔夏日遣興〕、丁若鏞(1762-1836)	西郊馳道夾城長，朱夏迫隨趁晚涼。四達軒楹開僻巷，一群鞍馬照芳塘。射臺日暖莎苗綠，魚檻風微菌菴香。沈李浮瓜欣笑傲，常時歸影逼斜陽。【天然亭在敦義門外】 → 暖かい夏の日、夕方まで亭で蓮華の香を楽しみながら飲食と談笑する姿。
8	『與猶堂全書』文集卷十三〔竹欄詩社帖序〕、丁若鏞(1762-1836)	“杏始華一會，桃始華一會，盛夏瓜果既熟一會，新涼西池賞蓮一會，菊有華一會，冬大雪一會，歲暮盆梅放花一會。每陳酒設筆硯以供觸詠。” → 初秋に涼しい時西池で飲みながら作詩し、蓮華の見物するための集まりの約束。
9	『京都雜志』遊賞、柳得恭(1800年前後)	“弼雲臺杏花 北屯桃花 興仁門外楊柳 天然亭荷花 三清洞蕩春臺水石 觸詠者多 集于此都城周四十里 一日遍巡周覽城内外花柳者為勝 凌晨始登昏鍾可畢 山路絕險有委頓而返者。” → 弼雲臺の杏花、北屯の桃の花、興仁門外の楊柳、天然亭の蓮華、三清洞の蕩春臺の水石がお酒と歌を楽しもうとする人々がたくさん集まる場所だ。都城の回りは40里だが、これを1日に回りながら城内外の花と柳を觀賞することをよい見物となされていた。早朝に登り始めたら、夕暮れにすべて終えるようになるが、山道が険しくて放棄して戻ってくる場合もある。
10	『與猶堂全書』詩集卷六〔消暑八事〕、丁若鏞(1824)	垂柳光風轉碧池，芙蓉顔色使人遲。藐姑冰雪超超想，越女裙衫滄滄姿。一棹兼宜彎象鼻，百花那得妒蛾眉？天心留此娉婷物，靜使塵脾苦熱時。【西池賞荷】 → 避暑のため、垂柳と池の近所で風を感じながらお酒を飲む姿。
11	『阮堂全集』六〔天然亭重修記〕、金正喜(1836)	“畿輔新營。有亭曰天然。亭以池勝。池於近都最大。且饒芙蓉。遂取天然去雕飾之義。名亭云。然華峴特秀。與紫閣控遠勢。左右闢起。而西城線白於前。白嶽半扶。微露坡上如佛髻。皆於亭灌注拱合。爽朗秀媚如圖畫。天然亭之勝。又未必專以池勝也。。。巡按使携寶賈。燕閒遊戲。必於亭。冠蓋之從華峴往來。卿士大夫治祖帳迎餞。必於亭。至若酒人韻侶。鬪奇選勝。分曹張隊。攬紅衣而詠咏。響碧簫而為飲。拍浮其間。流連為樂。夸飾太平之歲。亦必於亭。是以亭之勝尤顯焉。” → 都城近所で蓮華が一番大きく多い池として知られた天然亭から見える山と城壁の風景及び宴会、作詩、飲酒などの遊び。
12	『東国歳時記』、洪錫謨(1840頃)	“天然亭荷花三清洞蕩春臺貞陵水石觸詠者多集于此以傲河朔之飲 都俗又於南北溪澗為濯足之遊” → 天然亭の蓮華と三清洞の蕩春臺、貞陵の水石には、飲酒と文学を楽しもうとする人々が多く集まり、昔中国の河朔地方でのようにお酒を飲みながら避暑する。また、都城の風俗には、溪流で濯足する遊びがある。
13	『眉山集』「眉山先生文集」卷之三〔天然亭賞荷。與申白坡。尹蓮史同賦。〕、韓章錫(1832-1894)	病喝支離朱墨間。為看紅藕到西灣。披襟欲駐壺中日。投釣空搖水底山。冉冉滿衣香可掬。亭亭圓蓋翠堪攀。年年人老花如舊。三十番開一往還。萬柄荷花一境清。茅茨如畫渚禽鳴。儂非解飲還癡絕。君豈緣詩太瘦生。玉井船來風引影。碧筩珠滴露無聲。會須滌盡朱炎苦。池館停杯待月明。 → 避暑のため、蓮華と蘆屋、水鳥の鳴き声を楽しみながら、釣り、作詩、飲酒の姿。
14	『黃綠此集』九「梅泉野綠」、黃玪(1910)	天然亭子辟炎蒸 夜上菱荷宿上層 平生大葉田田屹 抵死清香柄柄凝 池迎滄海三更月 鐘上楊州萬戶燈 范蠡西施湖上去 青山鷄鳴酒如冰 → 夏の夜に避暑のため、亭で夜もすがら寝たり、お酒を飲みながら蓮と池を觀賞する姿。
15	『雲養集』卷之二〔七月十四日閏杓庭 台鎬觀察邀飲天然亭賞荷花北村詩友會者二十餘人〕、金允植(1917)	水面涼開錦洞天，紅粧簇立畫樓邊。捧心愁絕前宵雨，隔帳魂還別潑烟。鎮日行廚林下鬧，千家危堞境中連。東都地主風流足，第一看花記此年。勝遊政似習家池，休笑山公上馬遲。全省簿書多暇日，滿堂簫鼓樂明時。秋心靜入吟蟬葉，夜氣虛生繞鵲枝。寄語荷花今莫恨，風清月曉有人知。 → 雨が降った後、夜まで池と蓮華を觀賞したり、飲酒、音楽觀賞している宴会の姿。セミの鳴き声、月。

11) 南池

	文献名	記述内容
1	『虚白堂集』卷之三「南池蓮」、 〔與如晦有本月夜臨蓮池飲〕、成 倪(1439-1504)	南山蒼翠高嶠岫，雲峯缺處黃金輪。崇禮門中下魚鱗，長安道上無行人。呼兒展席臨芳 沼，夜深月色晴逾皎。亭亭翠蓋擁紅粧，香遠益清風颯颯。樽中萬斛驅愁波，今夜不飲 將如何？雖無趙瑟《鸞》、《鶴》操，邀與影娥同婆娑。 → 夜遅く、池の辺に座ってお酒を飲んだり、踊りながら、月と蓮を觀賞する姿。
2	『白沙集』「白沙先生集」卷之一 〔南門蓮亭。步月賞蓮。開城上歌 聲寥亮。〕李恒福(1556-1618)	碧藕香風動地吹。層城樹影散離奇。歌殘粉堞人如玉。隔水郎窺夜不知。池面沉沉壁月 昏。清歌飛出曉城雲。雲深不省人何處。琪樹層陰掩禁門。 → 夜から朝明けまで人々の歌を聞きながら、蓮の香と暗い池、城壁に映す月などを 詠む。
3	『谿谷集』「谿谷先生集」 卷之三十一〔題耆老諸公南池賞蓮 會圖〕、張維(1643)	白鬢紅頰共聯翩 十一人成八百年 洛社幾拚河朔飲 官池自有曲江蓮 香風入座龍涎暖 漱 酒傾筒象鼻偏 鶴背飄輪大寥廓 不如長作地行仙 → 蓮華の香りを楽しみながら、河朔飲(宴飲)する姿。

12) 蕩春臺(蕩春臺 or 鍊戎臺)

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三 券「東國輿地備考」第二 〔漢城府〕名勝條、李荇 (1530)	“三角三と白雲三の間に位置し、水石の良い景色がある。”
2	『記言別集』卷之九〔3月 の山水に対する小記〕、許 穆(1595-1682)	“清い水と白い石が良い。小川の石の上を歩く蕩春臺に上がると、昼の日光に陽炎と暖かい春 草が広がっている。”
3	『藥泉集』卷之一〔蕩春 臺〕、南九萬(1663)	溪山留古躡。煙景屬吾人。嵐重時零露。峯晴不染塵。潭魚迎暖照。谷鳥啣新春。莫道城闌近。 猶稀俗客輪。 → 溪谷と山からの春の景色としての清い峯、沼の中の魚、鳥の鳴き声。
4	『東溟集』「東溟先生集」 卷之十〔與元子建 斗杓 李子淵 漸 諸人遊蕩春 臺〕、鄭斗卿(1674)	抱病臥窮巷。壯懷鬱不開。忽携數三子。高興凌鄰枚。出門騎馬一相笑。鳴鞭直向蕩春臺。恨無 呼鷹獵平野。且復典衣傾金杯。岩間草芽半青出。此行可得尋寒梅。雪罷天晴聳華岳。登樓 一作 高 縱酒春風來。萬古風景如昨日。一時英豪安在哉。請君有酒更秉燭。不見白髮長相催。 → 雪ばれに楼に上がって、春風の中、岩の間の草や梅を見ている姿を詠む。
5	『澤堂集』「澤堂先生集」 卷之一〔遊蕩春臺〕、李 植(1674)	偶爾携諸子。悠然會夙心。清流傳小杓。急雪惱新吟。不覺城塵近。潭疑洞府深。斜陽有餘戀。 立馬望千岑。 → 弟子と溪流でお酒を飲みながら作詩をし、夕方に帰る時多くの峯を望む姿を詠む。
6	『樂全堂集』卷四〔祇送東 宮陪祀泉到蕩春臺〕、申翊 聖(1682)	水石千秋色，悲懼此日情。沙頭數杯酒，斜照半峯青。 → 砂辺でお酒を飲みながら峯と夕焼けを見ている姿を詠む。
7	『霞谷集』「霞谷集」卷七 〔蕩春臺記〕、鄭齊斗 (1730)	“王城之西北白嶽之右麓。有門曰莊義門。門之右有巨山蔚然。長圍而南來。即自三角而來。白 岳之龍者也。門之左有山分而北下。其勢與右山相稱。而巖石尤奇怪焉。巖巖然轟轟然 。一馳而南。一奔而北。成流於其間。上者闊而成洞。下者漸狹而爲峽。如是者五里而後野焉。 其右山之南也。一麓分而左。突然成隴於兩山之間。而其上廣而平曰蕩春之臺也。右山之下。案 臺而有解日造紙之署也。署之上有瀑顛倒而下。即水之源也。水即循臺而左。間兩峽而流。蓋其 洞皆石而盤。其地皆沙而白。石故其流汨而鳴。沙故其流清而潔。雖撓之無所渾。沙與石又與水 相遇也。故皆滑而若磨。明而燦如。日光沙色。瑩然而相映。清瀾翠松。悅爾而成韻。蓋山間之 絕勝也。惟漢都自箕松以來。山水以秀麗爲最。而泉石之勝。又以是甲焉。是以遊人之蹤。蓋未 嘗絕也。而其所以有樂於斯者。人各異焉。歲在庚戌之仲春閏月。諸友五人携酒遊於此地。余亦 從焉。發絃幽情。洗滌煩襟。非惟偷閑而已也。遂因流而流觴。夾流而序飲。飲酣而相携。溯流 上下。樵童牧叟與之先後。長歌短詠。”(一部) → 広く平らな臺。臺の左に流れる水。淵に満ちた盤石と地面の白い砂。水の中で転がる石に 音を立てながら流れている溪流と砂と清い水。日光に光る砂。清い風と松の風情。山水の秀麗 さと泉石の絶景が一番の場所で遊ぶ人が絶えない姿。友達とお酒を飲んで、樵童牧叟を先頭に 立たせて、水に逆らって上り下りしながら詩を作って遊ぶ姿。
8	『寒圃齋集』卷一〔約與金 士肯 宋玉汝 遊蕩春臺聯 句〕、李健命(1687)	出郭塵踪少，臨溪客意清。茲遊誰繼躡？往事舊傳名。花落春無迹，林深鳥有聲。歸來餘興在， 後會說分明。→ 晩春に世離れ、清い溪流と鳥の鳴き声を詠む。
9	『星湖全集』「星湖先生全 集」卷之五十二〔姜光之 世兒 蕩春臺遊春詩軸 序〕、李瀾(1681-1763)	“蕩春者國北門外地勝也。峙者峨峨。流者洋洋。又有傑構新亭。丹碧輝照。殆可謂三絶。國之 大夫士約會於亭。光之以布衣與焉。乃口號容春長句。灑墨爲帶草眞行。四坐無不歎賞。既又描 寫作圖。其意想微密。出於狀物之外。彼名源絶景。光之能以一管敵之。。撫琴爲心方之操。 。。” → 都城外側の景勝地である蕩春臺での高くそばだつ山、溪流、派手な亭の三絶と作詩、絵を 描く、音楽演奏する姿を詠む。
10	『靑莊館全書』卷之七十一 附録下 〔先考積城縣監府君年譜 下〕、李光葵(1765-1817)	“遊蕩春臺。臺在彰義門外。亦有造紙署。將擣碄武藝通志摺本也。編纂諸人。休暇讌飲。置名 酒。具肴核。羣妓迭唱竹枝詞。又劍舞伶人。皆年僅舞勺。手茸可愛。吹竹彈絲以侑之。名曰童 子樂。皆自壯營設也。仍登洗初亭。時綠陰初肥。水石清潔。”(一部) → 緑陰が生い茂りはじまる時期に、蕩春臺で飲食しながら、歌ったり踊ったりすることを見 て、亭に上がって緑や清い水石を觀賞している姿を詠む。
11	『京都雜誌』遊賞、柳得恭 (1800年前後)	“弼雲臺杏花 北屯桃花 興仁門外楊柳 天然亭荷花 三清洞蕩春臺水石 觴詠者多 集于此 都城周 四十里 一日遍巡周覽城内外花柳者爲勝 凌晨始登昏鍾可畢 山路絶險有委頓而返者。” → 弼雲臺の杏花、北屯の桃の花、興仁門外の楊柳、天然亭の蓮華、三清洞の蕩春臺の水石が お酒と歌を楽しもうとする人々がたくさん集まる場所だ。都城の回りは40里だが、これを1日 に回りながら城内外の花と柳を觀賞することをよい見物となされていた。早朝に登り始めた ら、夕暮れにすべて終えるようになるが、山道が険しくて放棄して戻ってくる場合もある。

12	『東国歳時記』、洪錫謨(1840頃)	“天然亭荷花三清洞蕩春臺貞陵水石觸詠者多集于此以俶河朔之飲 都俗又於南北溪澗爲濯足之遊” → 天然亭の蓮華と三清洞の蕩春臺、貞陵の水石には、飲酒と文学を楽しむもうとする人々が多く集まり、昔中国の河朔地方でのお酒を飲みながら避暑する。また、都城の風俗には、溪流で濯足する遊びがある。
13	「漢陽歌」、漢山居士(1844)	樓臺江山がよい遊び場

13) 洗劍亭

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“亭が石の上にあるが、滝の水がその前を通る。毎年、梅雨時に都城人たちが出て溢れる水を見物する。”
2	『青莊館全書』卷二「嬰處詩稿」二〔洗劍亭〕、李德懋(1741-1793)	聽徐子汝五 吹簫。其二客亦合成腔。三人者、皆以國簫名。日已辰。詩者六人。咏於水聲瀟瀟中。雙簫韻始織。淡桃裊餘花。三簫穿水響。幽想不勝遐。萬事欲動搖。危亭倍嵯峨。 → 高い亭で、溪流の音を聞きながら作詩、音楽観賞。溪流の中の石や少し残っている桃の花の姿を詠む。
3	『青莊館全書』卷七十一〔先考積城縣監府君年譜(下)〕、李德懋(1741-1793)	仍登洗劍亭。時綠陰初肥。水石清潔。 → 綠陰が生い茂りはじまる時期に、亭に上がって、樹林と清い水石を觀賞する姿を詠む。
4	『弘齋全書』卷二「春邸録二」〔国都八詠〕(洗劍冰瀑)、正祖(1814)	洗劍亭前百道冰。懸崖倒壑雪霜凝。琉璃錯布三千界。鵬鶴飛冲九萬層。赤脚踏來消暑渴。玄陰鑿盡納周陵。聖人臨履存昭戒。到此吾心倍戰兢。 → ガラスのように広がっている氷盤と、深い淵に雪と霜を詠む。
5	『漢京識略』18c後半	“梅雨の時、滝を溪流の水の見物と子供たちが盤石で字を書く練習する。”
6	『無名子集』詩稿 冊一〔洗劍亭〕、尹愔(1741-1826)	巖石天然平且寬、層層相拄似龍盤。鍊戎臺老千年畫、洗劍亭高數曲欄。飛洞玉流鳴榻下、列屏蒼壁聳林端。佳名謾獨留華扁、萬事憑軒涕自決。 → 亭に上がって岩と下に流れている清い溪流の音、樹林とその上の屏風のような青い崖を詠む。
7	『無名子集』詩稿 冊一〔僧伽寺〕、尹愔(1741-1826)	披襟洗劍亭、慷慨悲歌起。泉潔復石白、處處多造紙。偷得半日閑、幽賞殊未已。谷巖互出沒、崎嶇六七里。(一部) → 停に上がって、歌ったり清い泉と白い石、紙を作る姿を詠む。
8	『無名子集』詩稿 冊四〔洗劍亭洗史草吟〕、尹愔(1741-1826)	社壇將事訖、仍出北城椒。川挂山如坼、石高亭欲搖。蒼崖飄暮暝、紅樹映駉駉。半日成談笑、相逢憶舊僚。朝日騎驢客、秋風洗劍臺。名山石室秘、故事勝筵開。滌草迎飛瀑、看楓把灑杯。 先王終事地、與宴愧菲才。 → 秋風が吹く日、亭で宴会が開け、談笑したり、紅葉を見ながらお酒を飲む姿、滝の下で紙に墨を抜く姿と周りの滝に分かれた山と青い崖、赤い樹木を詠む。
9	『定本 與猶堂全書』詩集 卷二〔游洗劍亭〕、丁若鏞(1762-1836)	不有雙厓合、那專衆壑流。祇緣愁雨久、故作出城游。飛沫盤陀冷、蒼崖伏檻幽。楣頭有御氣、宸翰鎮名樓。 層城複道入依微、盡日溪亭俗物稀。石翠淋漓千樹濕、水聲撩亂數峯飛。陰陰澗壑聞維馬、拍拍簾櫺好挂衣。但可嗒然成久坐、不教詩就便言歸。 → 梅雨後、亭に上がって冷たい盤石と暗く青い陰、遠くの城壁を見て、ぼつねんと長い間座って作詩する姿を詠む。
10	『定本 與猶堂全書』詩集 卷十四〔游洗劍亭記〕、丁若鏞(1762-1836)	洗劍亭之勝。唯急雨觀瀑布是已。然方雨也。人莫肯沾濕韃馬而出郊關之外。既霽也。山水亦已衰少。是故亭在莽蒼之間。而城中士大夫之能盡亭之勝者鮮矣。辛亥之夏。余與韓侯甫諸人。小集于明禮坊。酒既行。酷熱蒸鬱。墨雲突然四起。空雷隱隱作聲。余蹶然擊壺而起曰。此暴雨之象也。諸君豈欲往洗劍亭乎。有不肯者罰酒十壺。以供具一番也。僉曰可勝言哉。遂趣騎從以出。出彰義門。雨數三點已落。落如拳大。疾馳到亭下。水門左右山谷之間。已如鯨鯢噴矣。而衣袖亦斑斑然。登亭列席而坐。檻前樹木。已拂拂如顛狂。而洒浙徹骨。於是風雨大作。山水暴至。呼吸之頃。填谿咽谷。澎湃碎訇。淘沙轉石。渤澥奔放。水掠亭礎。勢雄聲猛。檣檻震動。凜乎其不能安也。余曰何如。僉曰可勝言哉。命酒進饌。諧謔迭作。少焉雨歇雲收。山水漸平。夕陽在樹。紫綠萬狀。相與枕藉吟弄而臥。有頃沈華五得聞此事。追至亭。水已平矣。始華五邀而不至。諸人共嘲罵之。與之飲一巡而還。時洪約汝、李輝祖、尹无咎亦偕焉。 → にわか雨が降り始める時、友達と亭に上がって、溪流と流れる砂と転がる石の音を聞きながら、雨風で揺れている樹木を見たり、飲酒、談笑する姿。雨が止んだご、木に掛かった夕焼けを見ながら横になって作詩する姿を詠む。
11	「漢陽歌」、漢山居士(1844)	樓臺江山がよい遊び場
12	『梅山集』卷二〔洗劍亭〕、洪直弼(1866)	洗劍何年事?憑軒此日情。蒼霞棲斷壑、白雨度高城。巾屨承雲氣、杯罍壓水聲。莫愁西景暮。清月滿前程。 → 夕方の谷にしみこむ青い夕焼けと城壁を超える白い雨の姿、水の音を聞きながらお酒を飲む姿を詠む。

14) 夾澗亭

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“駝駱山の下にある。小川と滝があるため、東村の人々が遊んで見物する場所になった。”
2	『楓臯集』卷之四〔夾澗亭分韻。得空字。〕、金祖淳(1854)	山房睡起眼朦朧。仰首持杯問化翁。自有三才及萬物。衆論每歸翁之功。翁何名姓年壽幾。耳目口鼻與人同。文章言語必可法。三教九流倘皆通。我疑翁功向翁質。其言若屈我信蒙。翁若芒芒疑所對。雖衆所歸寧不聰。春夏秋天消息。生少老死人始終。有暑無寒豈天損。既生又死非人恫。打花雨是潤蕊雨。開葉風還吹蕩風。前世誰修後生福。而今安在古來雄。松栢千年不改翠。桃李片時無留紅。疾之胡甚天殤子。愛亦太偏富石崇。大人執德德宜一。君子秉心心宜公。我今半百又四齒。鬢邊二毛殊蒙戎。少無他癖老經籍。鉛刀忘鈍猶磨礪。名業縱媿羅青素。仁智還能樂峙融。北渚溪上暮春者。惠好携飲看花叢。飲至方酣看未足。赤松俄過驅羣靈。張傘喫飯已堪笑。茅檐繫坐眞鳥籠。日暮聯鑣向何處。履老名園山之東。清酒將炙永今夕。筵几秩秩趨羣僮。忽驚吾宗大司馬。碧紗映燭跨青驄。司馬英姿慣舌戰。萬騎馳騁皆駉駉。我昔偏師苦與角。紛然漢楚成割鴻。氣藪理窟開壁壘。三交再敵塵濛濛。此地相逢樂可勝。比爾干戈張爾弓。我本師心復信聖。不道翼翼與馮馮。天人之際宵難見。靡我夫子誰折衷。前有吏部抽眞髓。後有盧陵疇神腫。具體顏猶苦孔卓。刪定書復殘秦烘。顏不及孟無是處。易完於書未敢性。滕告異喻儘雄辯。六合不言即怨忠。司馬掀髯動機變。師說百萬如詛証。四座欣欣不厭笑。憑賦注目闚虎熊。誰遣河魚入我腹。江翻海攪天地霧。歡娛未畢夜將半。四大倩扶歸息息。明朝霍然大恍惚。閒臥玉壺清陰中。北渚狼貝東園病。輾轉思想心忡忡。苟從世論尋端緒。緣狡狡獪欺人工。司馬每遊詩見護。身無灰恙晴暉曠。我試一遊雨兼病。何負不肯少併幪。不恒多私乃如此。翁乎翁乎何嘗嘗。我本辭拙性無詔。只要明白承皇穹。我訊止此翁對善。願奉此杯翁腸充。不然遁辭但饒舌。我有靈心知所窮。山林肅肅人悄悄。陳辭疎仄立鞠躬。良久無觀復無聞。翁乎翁乎眞眞靈。乃知陰陽判判後。卑者自卑隆者隆。人處其間自蠢蠢。則百爲壽可憐蟲。此物何干上帝故。多須明命制畜豐。有天則雨身則病。此理難誣三尺童。人事不過自然爾。恰似回颺轉枯蓬。我飲我酒樂我樂。不惜日費三百銅。山顛水涯托性命。三春百花九秋楓。優遊直到雙脚直。聊與諸公遞郵筒。歌罷陶然出門望。花落鳥啼但碧空。 → 家族連れて春の日に北の渚で花を見る。お酒を飲んで魚やご飯を食べる。足が棒になっても散歩。歩きながら風景をみることをやめない。宴が終わって帰り道で落ち花と鳴き鳥と青い空を見た。
3	『展園遺稿』卷之十四「泉社集」〔夾澗亭觀瀑。取王右丞清泉水上流句。五人圍酌共賦。得石字。〕、李晩秀(1752-1820)	一雨動盪千丈石。下臨釣潭可沈璧。銀浦倒掛雲錦纈。太華劈開仙掌頤。大音嘈呌小琮瑋。聲浮泗濱桐出嶧。嶽靈爲助林園勝。天根始露造化跡。走簡邀我商嶺嶺。雨霏泥屐來躑躅。亭頭拍手叫絕奇。四座忽成響噤客。靜聽老濤吼風雷。遙望懸流映檜柏。平生不飲如公樂。對此胡然一大白。 → 滝を觀賞しながらお酒を飲んだり詩を作る。
4	『展園遺稿』卷之十四「泉社集」〔寄松下約會夾澗亭〕、李晩秀(1752-1820)	自從社樵去。虛閣鎖烟塘。暫輟謝公屐。猶聞荀令香。樓吟留半軸。林醉待餘觴。洞裏梅堂瀑。亭前銀漢光。松濤奏奏曲。雲錦合成章。雨後飛流壯。何須企老莊。 →
5	『展園遺稿』卷之十四「泉社集」〔夾澗亭。拈李百藥山池宴集韻共賦。〕、李晩秀(1752-1820)	企臺與雙澗。相望一林塘。泉答連峯響。花通隔洞香。昨觀商嶺局。今把竹溪觴。地僻禽魚樂。人來草木光。朋遊欣永夕。短律愧成章。憑檻忽惆悵。歸驂渺社莊。峯陰轉幽壑。空翠滴虛塘。不管人間雨。但聞林下香。小亭客狎坐。衰鬢愧先觴。跋石塵機息。飯蔬野貌光。吾兄儼臨席。諸益競聯章。雅集儼香社。流傳紀墨莊。 → 山々にひびく泉の音。洞の向こうから伝わってきた花の香。竹がある小川で飲酒する姿。地で魚がとれる楽しみ。
6	『展園遺稿』卷之一「原集」〔夾澗亭〕、李晩秀(1752-1820)	始謂澗亭勝。天爲老夫地。今朝枉羣公。棟楹若新置。虬松萬餘株。細徑入蒼翠。亭對大斧劈。坐若雲上致。峭壺請樂賓。野酌亂不記。赫曦屏趙盾。高譚凌焦遂。吾輩歲暮期。願言以道義。休托元自取。靜躁何其二。十載漁樵跡。周行心內媿。復恐鳥島驚。簪纓損眞意。披襟步芳陰。手捫巖間識。林光暖將夕。餘興何所寄。 → 老松が万本。その下は細い歩道。亭の向こうは大きな山で切ったような山、石。野地で飲む。服を引っ掛けて草地で散歩して、見たのは林の中から暗い夕方の光。
7	『展園遺稿』卷之一「原集」〔與兒輩登夾澗亭口呼〕、李晩秀(1752-1820)	小亭晴眺晚。三日泛湖歸。春物如相待。桃花不肯飛。村烟澗潤衣。松影落蒼衣。坐久無人語。斜暉半壑輝。 → 晴れの日小さい亭で遅くまで風景を展望し、何日も船遊びする姿。春の日が待ってくれば、桃の花を落ちないように。松の影が地面の苔の上。夕方は谷を照らしている。
8	『漢京識略』18c後半	“駝駱山の下にある。小川と滝があるため、東村の人々が遊んで見物する場所になった。”

15) 泉雨閣

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“禁衛營の南別營の中にあるが、小川に掛かって立てられているので、夏の避暑に良い。周りの石に‘丫溪’の字を書いた。”
2	『青莊館全書』卷之九「雅亭遺稿」一〔立秋之午。同朴在先。訪泉雨閣。〕、李德懋(1741-1793)	貪噴斯外道。怡悅即吾天。閣爽何來瀑。林繁不已蟬。妙觀圓在處。遐想際無邊。設色畿東出。明嵐漾媚烟。短屨飛南里。輕巾午天。葉肥泉畔杏。音動早餘蟬。美蔭朱樓際。鮮暉色幟邊。聞管容我輩。跌宕限炊烟。 → 涼しい立秋に水の音と生い茂った林で聞こえるセミの鳴き声を聞く姿。山と夕焼け、泉と樹木の葉を詠む。

3	『梅山集』巻一〔泉雨閣在又溪上丁巳陪季父至庚午七月廿一日又携翊汝至回想舊遊不堪存沒之感詩以識懷〕、洪直弼(1866)	十四年前此地遊、中間人事摠悠悠。蒼山欲飲幽泉咽、碧樹寒蟬又一秋。 → 立秋に尋ねて、青い山と泉の音、セミの鳴き声を詠む。
4	『貞菴閣集』「貞菴閣初集」〔泉雨閣。全懋官得蟬字。〕、朴齊家(1750-1805)	晴亦洽洽雨。四時鳴石泉。山空何所有。雲出與之然。衰柳蒙塵易。高松送蔭先。朱樓消暑處。一土感孤蟬。 → 晴れる日も雨の雫を感じるの、石を叩いている泉があるから。山には何も無いから雲が出る。柳は_____で汚れやすい。高い松の下は涼しい影。赤い楼で暑気を払う姿。私一人でセミの鳴き声を聞こえる。
5	『錦石集』巻之一〔泉雨閣〕、朴準源(1816)	溪水發太古。至今流澄澈。吾能頻到此。啼鳥頗相悅。 看山忽高眠。不覺山近人。山風吹幾番。松子落滿巾。 → 大昔からの青い水。私を歓迎しているような鳴き鳥。山を見てつい寝てしまって、近づいているような山。山の風が何度も吹いて松の果実がいっぱい落ちる。
6	『漢京識略』18c後半	“禁衛營の南別營の中にあるが、小川に掛けて立てられているので、夏の避暑に良い。周りの石に‘丫溪’の字を書けた。”

16) 獨樂亭

	文献名	記述内容
1	『退憂堂集』巻之十〔雜著〕〔獨樂亭記〕、金壽興(1710)	“市街地とは離れて位置して幽邃な亭の周りの美しい自然を一人で楽しむ姿。”
2	『三洲集拾遺』拾遺卷之二〔獨樂亭夜別士敬〕、金昌翁(1732)	別意滿阡陌。君歸登綠嶺。信行應一日。聊厚及茲辰。星爛攜衾曙。山回細草春。豪談雖自強。終是向隅人。 → 星の光がいっぱい、山で若葉が出て春が来る姿。

17) 聽松堂

	文献名	記述内容
1	『藥泉集』第二〔白岳山下聽松堂舊址。士林追慕新構。〕、南九萬(1723)	新堂還揭舊時名。緬憶先生此葆貞。已向大冬看氣象。且從高枕挹風聲。層濤洗盡人間累。清瑟彈成太古情。更有洽洽泉過戶。恍如鸞鳳和相鳴。 → 高い枕での風の音。
2	『桐溪集』「桐溪先生文集」巻之一〔聽松堂寄題〕、鄭蘊(1852)	性愛寒姿老更深。爲關精舍貯清陰。一生貞直頗相似。半世婆娑自在吟。殘夜酒醒聲動月。虛窓睡罷爽盈襟。不緣癡鶴堂中坐。何處松林無此音。 → 清い影。夜遅く風が吹き、さわやかな空気の中に居眠りしながら座っている姿。静かな松の下陰と鶴。
3	『桐溪集』「桐溪先生文集」巻之一〔慎聽松堂寄題〕、鄭蘊(1852)	小堂開處白雲深。滿壑青松送晚陰。經始要爲泉石主。落成贏得短長吟。半生奔走詩難就。千里拘囚淚在襟。才盡不堪追健筆。只披情曲謝知音。 → 谷いっぱいの青い松の下陰。

18) 淸暉閣

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“玉流洞の仁王山の下にあるが、水石の良い景色がある。。水が石壁の間で出て、石壁の上には玉流洞という三文字を刻んだ。”
2	『壺谷集』巻之三〔追記淸暉閣陪遊之興 奉呈文谷相公案下〕、南龍翼(1695)	玉洞烟霞秘境開。淸暉高閣絕浮埃。秋生紫陌千家雨。瀑轉青山萬壑雷。荷葉動時魚隊散。樹陰深處鷺絲回。遊人自爾忘歸去。留待簷前霽月來。 → 霧と夕焼けが幽玄な神秘的所にある高い楼でいる姿。家ごとに畑の小道を濡らす秋雨。雷のような青い山の滝の音。揺れる柳の葉と散る魚の群れ。木陰深いところで聞こえる鷺の泣き声。月が出るときまで遊ぶ姿。
3	『文谷集』巻六〔玉洞弊居 新構淸暉閣 粗有水石之勝 而不敢爲求詩 侈大計 乃蒙壺谷詞伯 先以一律寄題 梅磔台兄 又屬而和之 便覺山門 自此生顏色矣 茲步其韻 以申謝意 兼奉梅翁求教〕、金壽恒(1699)	層厓中拆小亭開。廻出東華百丈埃。半世膏肓存水石。暮年頽養取山雷。簷間宿霧侵衣濕。枕底飛泉攪夢回。從此洞門增物色。故人珍重寄詩來。 (原韻)玉洞煙霞祕境開。淸暉高閣絕浮埃。秋生紫陌千家雨。瀑轉青山萬壑雷。荷葉動時魚隊散。樹陰深處鷺絲回。遊人自爾忘歸去。留待簷前霽月來。 → 崖の隙間にある小さな亭。霧で服が湿っぽくて滝の音に目が覚めている姿。高い楼。秋雨と雷のような滝の音。蓮の葉と魚の群れ。緑陰の深い所の白露。月が昇るのを待つ姿。
4	『農巖集』巻之二〔淸暉閣留仲裕。對酌同賦。〕、金昌協(1651-1708)	羅雀開門客少過。君來對酌遂微醺。松巖雨氣流樽壘。水檻泉聲入笑歌。白髮已將黃菊晚。緇塵曾染素衣多。秖今始覺休官好。世上浮榮在我何。 → 松と巖、泉水の音を觀賞しながら飲酒する姿。
5	『玉吾齋集』巻一〔淸暉閣小集 次定而韻〕、宋相琦(1760)	溪雨晚添響。林霏輕作陰。風塵今夕會。山水此亭深。倚檻桐花落。開樽竹葉斟。宦情從我懶。詩律讓君吟。 → 雨後、激しい溪流の音。霧で暗くなった林。夜の集まり。落ちる桐の花。飲酒する姿。
6	『漢京識略』18c後半	“仁王山の下にある。水石が美しいところで、水は石の壁の間で出る。石壁の上には玉流洞という三文字を刻んだ。”

19) 立石浦

	文献名	記述内容
1	『白湖全書』卷之二〔晩過立石浦〕、尹鐫(1617-1680)	無限滄浪弗繫舟、白雲秋色漢陽洲。豈須浮海求三島、更覺神遊出九州。 → 無限な青い波とその上の船。白い雲と秋色。
2	『四佳集』「四佳詩集補遺一 東文選」〔漢都十詠〕立石釣魚、徐居正(1705)	溪邊怪石如人立。秋水玲瓏照寒碧。把釣歸來籍綠蕪。百尺銀絲金鯉躍。細斫爲膾燻爲羹。 沙頭屢臥雙玉瓶。醉來鼓脚歌滄浪。不用萬古麒麟名。 → 水辺に立っている人みたいな怪石。青い秋水を見る姿。草に座って釣りをして飲食する姿。
3	『風月亭集』補遺〔漢都十詠。次徐相國韻。〕楊州踏雪、李埈(1727)	把釣閑來獨倚立。雨餘新水尚涵碧。浮萍動處水紋散。魚戲有時潛復躍。斯須釣出作膾羹。 沽酒已知來滿瓶。人生適意古所重。巖光豈羨公侯名。 → 雨後、水がきれいな緑

20) 楊花津

	文献名	記述内容
1	『東文選』「續東文選」〔題四佳漢都十詠屏風〕、姜希孟(1424-1483)	江頭風緊枯葉響。凍雲撲地平如掌。須臾釀雪駕海來。崖平谷滿深一丈。傍岸漁家八九屋。 誇雪青帘數竿竹。好將三百青銅錢。直就墟頭聊憩息。 → 江頭の強い風で枯れ葉が落ち、氷った雲が土地に平らに敷かれたような姿。雪が降って崖が平たく、谷が満ちて一つの線になるような姿。川岸にある魚家の八の中九は、お酒を売っている青い帳がなびいているのを見て、休みに行く姿。
2	『三灘集』卷七〔漢都十詠〕、李承召(1515)	積雪皚皚北風響。漢宮凍折仙人掌。騎驢江上醉吟詩。胸中氣吐虹千丈。笑殺袁安臥白屋。 笑殺姬滿歌《黃竹》。直將詩律鬪深嚴。雪堂高風仰歎息。 → 積もっている白い雪と吹きすさぶ北風。江辺で驢上の人となって酔って作詩する姿。ちひろの虹の姿。
3	『石洲集』卷之七〔春江詞。效竹枝歌。〕、權輶(1632)	二月江村花絮飛。水深沙暖荻芽肥。漁童入夜唱歌去。渡口月生人語稀。 喜雨亭邊朝雨過。楊花渡頭芳草多。江中擊鼓買客醉。堤上女郎爭唱歌。 → 二月に江村で飛び回る花と柳綿。水が深く、砂が暖かくてよく育った葦。夜に子供漁師が歌う姿。静かに月が出る渡し場。朝雨後に草が生い茂り、江の中で太鼓を叩く商人と客。堤防上で歌をうたう男女の姿。
4	『石洲集』卷之七〔舟行〕、權輶(1632)	寺下長江百丈清。江頭楊柳大堤平。他年誰作黃驪志。倘記洲翁此日行。先人曾此作遨頭。 欲向遺民訪舊遊。昔日小兒今白髮。繁華無跡水東流。楊花津口浩煙波。兩岸青青芳草多。 西北雲山千萬疊。行人回首一長歌。衆山環擁似荊門。兩岸疑聽楚峽猿。記取泊船沽酒處。 短篷臨水數家村。春陰漠漠日銜山。微雨扁舟載酒還。一夢舊遊那再得。謾留佳句落人間。 → お寺(神勒寺)の下の長く清い江。江頭に柳が生い茂る大きい堤防。東に流れている水。楊花津の入り口に霧がかかる広大な波。広大だが両岸に茂った草。北西に万重の山を見て歌を歌う者。水辺の村でお酒を売る所に船を停泊して春空が暗くなり、降り始めた小雨にぬれながら、小舟にお酒を積んで帰る姿。
5	『四佳集』四佳詩集補遺一「東文選」〔漢都十詠〕楊花踏雪、徐居正(1705)	北風捲地萬籟響。江頭雪片大於掌。茫茫銀界無人蹤。玉山倚空千萬丈。我時騎驢帽如屋。 銀花眩眼髮豎竹。歸來沽酒青樓飲。醉傍寒梅訪消息。 → 吹きすさぶ北風江頭に手より大きい雪片。人がいないはらかな銀色の世界。千万道空高くそびえる玉山。たまに大きい帽子をかぶってロバに乗ってまばゆい雪花と竹のようにこちこちした髪。戻ってきて酒に酔って梅の側で春気を探す姿。
6	『風月亭集』補遺〔漢都十詠。次徐相國韻。〕楊州踏雪、李埈(1727)	朔風號怒終夜響。朝來雪花大如掌。漫漫天地自無垠。陵谷已平深幾丈。江村漁家數茅屋。 籬下森森滿銀竹。歸來此地足乘興。吟詩舉酒無休息。 → 夜のうちに吹き荒れた北風。朝に降る大きい雪。平らに果てしない積もった雪。江村の魚家の一つや二軒。垣根の下に白くなった竹。作詩と飲酒する姿。
7	『韶濩堂集』「韶濩堂詩集」定本卷三〔朝發幸州至楊花渡〕、金澤榮(1896)	江村歷歷黃垂柳。江日曠曠紅散霞。漢口西來三十里。傷心景色最楊花。江天東去景紛紛。 烏石龍山各幾分。正在楊花津上望。樓臺如海舶如雲。 → 清い江村に垂れている黄色い柳。明るい江に赤い夕焼け。景色が紛紛した東の江天。楊花津で海のような樓臺と雲のような船を望む姿。

21) 狎鷗亭

	文献名	記述内容
1	『東文選』卷七〔應製賦狎鷗亭四時〕、姜希孟(1424-1483)	春日朝回玉輦傍。乘閑出郭卽滄浪。北望禁地鶯花老、西去澄江襟帶長。白愛園沙還倚杖、青怜遠岫屢移床。濯纓歌罷無人見、滿意汀洲杜若香。 阿香推轂輾陰機、江雨翻盆已沒磯。濁浪遙吞平野濶、盲風低逐暝煙飛。時聞鴉鷓尋村過、遠見漁燈傍岸歸。多小倚蓬千里客、醉眠風雨滿蓑衣。 兼霞白露夜飛霜、捲上簾鉤月轉廊。浪靜魚龍眠水府、天寒鷺鷥逗湖光。安危自信憑雙劍、冷暖還驚饋五漿。我已忘機人忘我、終隨野老也何傷。 曉色沈沈鎖凍雲、山河忽變玉龍紋。將身暫向江湖路、浪跡寧同鳥獸群。簞笠孤舟新活計、金章紫綬舊功勳。一尊且盡江亭晚、雪樹梅花摠不分。 → 春の朝の青い波。老花と長く清い江。丸く白い沙と遠く青い峰。歌う(濯纓歌)姿。水辺に香ばしい杜若。
2	『秋江集』「秋江先生文集」卷之一〔與友人乘舟渡毛浦。登狎鷗亭。〕、南孝溫(1454-1492)	此會無宿昔。相將渡著江。隔林聞畫角。風恬桂棹短。萬頃琉璃碧。繫舟此登亭。村酒聊細酌。云是相公亭。飛甍掛室壁。周章看壁詩。一一登鸞鶴。胡琴奏一聲。俯暢鷗可狎。須臾大江風。怒蛟百丈立。篙師告我行。不去風愈惡。蒼皇理舟楫。坐中皆無色。人生必有死。百年駒過隙。螟蛉雖大年。竟與化俱滅。亦何異朝菌。生不知晦朔。鯨吞不復知。惡浪何嗟及。況復開口笑。一月不再得。爲我更須坐。聽我歌一闕。 雖然哀生歡。亦勿太樂極。 → 船で江を渡ってきて亭に登って飲酒、壁に掛かった詩を見て胡琴の演奏を聞きながらカモメを見る姿。急に風が吹いて高くそびえる波。

3	『三灘集』卷六〔上黨 韓相公 狎鷗亭詩〕、李承召(1515)	<p>狎鷗亭在山之幽，下有澄江萬古流。相公暇日來夷猶，登山臨水心悠悠。功名蓋世足封留，富貴倘來如雲浮。身閑疑是泛虛舟，忘機可狎江邊鷗。白鷗飛來戲長洲，刷羽弄影鳴相酬。有時驚起過江頭，隔岸風送《滄浪謳》。相公憑欄興不收，乾坤萬里入雙眸。川泳雲飛各自由，江上百物無閑愁。風風雨雨順箕疇，南村北村桑麻稠。公能致此太平休，所以晚得逍遙遊。君不見蟠蛟一起澤九州？三農鼓無歲有秋。歸來却與魚蝦儔，抱珠熟睡幽幽湫。</p> <p>→ 山の奥深いところにある亭。下に流れている清い江。山を登ったり江を見下ろしたりする姿。空船。長い江辺で遊んでいる白いカモメ。向こうの坂から吹いてくる風と歌声(滄浪謳)。遠くはるけき空と地。自由な魚と鳥。のんびりと感じられる江辺。降る雨を見ながら、豊作を期待する姿。</p>
4	『三灘集』卷六〔奉和御製狎鷗亭詩〕、李承召(1515)	<p>黄河指誓帶如流，麟閣功高鬢未秋。將相三朝扶景業，浮休百歲寄芳洲。悠悠心似忘機鳥，泛泛身如不繫舟。陶鑄東方歸壽域，鷗亭閑臥百無愁。</p> <p>亭下長江不盡流，亭前草木自春秋。天低尺五城南地，風送鷗群漢北洲。公退開樽臨水檻，興闌移席上蘭舟。丈夫憂樂關天下，肯爲煙花惹起愁？</p> <p>江山喜氣欲成春，宸翰題詩手自親。光焰燭天長萬丈，化爲甘澤洽東人。晚將鷗鳥更尋盟，寵辱應驚世上榮。明月滿江人盡醉，躍金沈璧動詩聲。(一部)</p> <p>→ カモメ。漂う舟。亭にのんびり横になっている姿。亭の下に流れている江。春や秋が感じられる亭の前の草と木。城の南側の近くで風と飛んでいるカモメ、江。船に乗る姿。霧と花。早春。作詩。江に映った明るい月。</p>
5	『高峯集』「高峯先生續集」卷之一〔狎鷗亭〕、奇大升(1629)	<p>荒榛蔓草蔽高丘，緬想當時勝勝遊。人事百年能幾許，滿江煙景入搔頭。</p> <p>→ 荒井林と纏れた草に覆われた高い丘。霧に包まれた江。</p>
6	『簡易集』「簡易文集」卷之八(還朝録)〔次副使狎鷗亭韻〕、崔岊(1631)	<p>狎鷗亭子漢之濱，日日鷗來似得親。芳草白沙元境界，清風明月自比隣。未成解組江干老，得擬忘機海上人。發趣幸動仙客語，從教茲事免沈淪。</p> <p>→ 毎日来る水鳥。さわやかな草木や白い砂が広がっている姿。清い風と明るい月。</p>
7	『芝峯集』卷二〔狎鷗亭〕、李暉光(1633)	<p>第一名區漢水潯，群鷗飛處柳陰陰。江鷗不下斜陽盡，岸草汀沙自古今。</p> <p>→ 群鳥が飛ぶところに濃く生い茂った柳。夕日が暮れるまで飛んでいるカモメ。丘の草と水辺の砂。</p>
8	『鶴峯集』「鶴峯先生文集」卷之一〔狎鷗亭〕、金誠一(1649)	<p>輕陰淡蕩收殘照，十里平湖帆影微。閒坐玉臺機事少，一江鷗鷺近人飛。</p> <p>臺上平臨杜若洲，仙舟欲去更淹留。誰知相國平生計，都爲閒人辦此遊。</p> <p>→ 淡い雲に隠された夕焼け。広い湖に映った幽かな帆影。のんびり臺に座って江の上のカモメと船を眺める姿。</p>
9	『佔畢齋集』卷之五〔狎鷗亭代作〕、金宗直(1789)	<p>東湖水一曲。百頃青玻璃。漁舟訂其瀨。芳杜被其堤。高人愛冲曠。結構非棧題。暇日追勝賞。醇酒費提携。機心漸銷遣。竟與禽魚迷。公來瀕鳥集。公去瀕鳥啼。所以得公憐。狎玩忘簪圭。雖有爭席人。婦姑無勃碓。海客豈同調。忠獻聊思齊。何嘗慕騎鶴。亦不希乘鸞。九重頗虛佇。難辭公膳雞。落日入東郭。欄街唱銅鞮。</p> <p>→ 東湖のガラスのように青い波。漁舟。草に覆われた丘。暇に知人たちとお酒を飲む姿。カモメ。</p>
10	『佔畢齋集』卷之六〔狎鷗亭上黨府院君請賦〕、金宗直(1789)	<p>相公雲鶴姿。遼天穩遊戲。不侶遵鴻鴻。况偶炎洲翠。遐情念舒卷。江阜有時至。華構絕蕭灑。一片城南地。簷外山庚庚。檻前江滢滢。於焉披覽衣。八窓聊徙倚。灑露沁几席。清飈動荷芰。嗒然如喪耦。豈惟忘勢位。海瀕聖得知。日夕爭來萃。關關吐商音。皎皎翻雪翅。庭除聲效落。群舉自相媚。相公莞爾笑。何曾物我視。中孚久已熟。禽鳥亦不避。縱繞滄洲越。</p> <p>明主共圖治。神謚嘗適野。乃是謀國事。安石遊別墅。何妨任重寄。廊廟與江湖。所憂無二致。苟推狎鷗心。吾民其受賜。公乎慎終始。忠獻奚專美。不要養冲素。鶴筭猶可冀。</p> <p>→ 城の南の江辺の丘陵にある派手な亭。軒外に山々と欄干の前に乱高下する江。清い露と澄んだ風で揺れる蓮と菱。雪のように白いカモメ。</p>
11	『佔畢齋集』卷之六〔同前代作〕、金宗直(1789)	<p>城南十里江如練。探討何曾足重趼。一朝華宇臨芳洲。千古天慳忽呈見。變理之暇携賓朋。手中只有蒲葵扇。忘機不獨漁爭隈。滙鳥皆能識公面。霜毛雪羽絕纖埃。搖裔飛鳴助歡讌。不學巧語籠中鵬。肯作附炎堂上燕。幾微一動色斯舉。海客所以難得便。相公曾次無物我。來狎還如被深眷。陶鈞萬彙舉此耳。先憂後樂公曷倦。中朝學士今歐陽。摘辭揮灑鴻濛網。如心不恨無其人。事業當求忠獻傳。</p> <p>→ 花のような水辺にすくくと立っている派手な亭。千古の景色。漁師とカモメ。</p>
12	『佔畢齋集』卷之十八〔恭知御製狎鷗亭詩〕、金宗直(1789)	<p>東南水作漢江流。襟帶神州萬萬秋。一曲風烟金盞地。百年身世白鷗洲。藏名豈比揚雄宅。去國難同范蠡舟。唯念昔時隣閣友。班班鬼錄叵堪愁。歸去非緣退急流。山河終始鬢成秋。依依魚鳥親三老。漠漠雲烟近十洲。樹下每拋消日局。茅間閑閣濟川舟。長安咫尺何勞望。李白當年枉自愁。蒲柳蕭蕭已飽霜。三朝蹤跡殿西廊。殘年欲遂江湖志。皇雅如垂日月光。捧讀還思陪袞職。沉酣多幸酌天漿。謝墩風致真無忝。朝著何人故謗傷。鬱鬱槐堂黨閹傍。幽亭今復俯滄浪。鷗來鷗去江于闕。潮落潮生海口長。曲檻臨風鳴鐵笛。晚江乘月據胡床。星辰滿壁天颯動。仿髯猶聞禁禦香。無限人間倚伏機。一時收斂付苔磯。儵魚戢戢方游樂。鷗鳥關關不駭飛。有客徑斟醇酎送。入城還荷睿恩歸。赤松遠矣空翹首。風露寒侵鶴氅衣。隱几閑看渡水雲。滿軒珍寶浪生紋。宅邊不作馬三埒。池上唯喧鶴一羣。白髮丹心迫稷卨。遠猷辰告答華勳。盛朝元老今謙退。持祿人人愧十分。曾冠先朝帶礪盟。八篇奎藁士林榮。慙遺一老天應爾。可見吾王眷倚情。江水江花秋復春。忘機魚鳥便來親。亭中日柱看山笏。自是凌烟畫裏人。</p> <p>→ 一曲の風と煙。水辺のカモメ。優しい魚と鳥。はらかな雲煙。木の下においた碁盤と茅草の間に縛っておいた船。霜焼けした柳。馥郁とした亭の見下ろす青い波。去来するカモメと潮が差したり引いたりする長い海口。欄干で風に吹かれながら笛を吹いたり、月光の下に座っている姿。多くの星の光と高い風。泳いで遊ぶオイカワと平和に見えるカモメ。冷たい風と露。のんびりと雲や鷗群を見る姿。</p>

13	『青莊館全書』「青莊館全書」卷之二(嬰處詩稿二)〔登鴨鳴亭〕、李德懋(1741-1793)	海客生涯狎白鷗。秋風鼓棹漢江舟。乾坤寂寞黃華集。一朝朝宗何處流。 → カモメ。秋の風が吹く漢江の船。流れる水の流れ。
14	『弘齋全書』卷二「春邸録二」〔国都八詠〕(押鷗泛舟)、正祖(1814)	遲遲帆影上高樓。薄暮菱歌何處舟。極望春風迷遠浦。須知吾道在滄洲。邨漁捲釣渾疑鷺。峒隱尋盟可伴鷗。無數汀花看不盡。滿江斜日照簾鉤。 → 夕方に、江辺の高い楼に上がると遅い船どこかで聞こえる歌声。遠く望むと春の風にかすかに見える入り江。白露みたいな漁師たち。カモメ。多い水辺の花々を全部見る前江に夕焼けが移った姿。
15	『定本 興猶堂全書』詩集 卷一〔登狎鷗亭, 和睦公韻〕、丁若鏞(1762-1836)	丞相勳名國史青。風流尚說狎鷗亭。三韓玉帛全堆席。八部歌鍾盡在庭。浮世可憐同逝水。漁舟何意汎空汀?落花芳樹無尋處。唯有殘暉照古檣。 → 音楽観賞。流れている水と魚船。散っている化木と欄干に映ずる夕焼け。
16	『虛白堂集』「虛白堂詩集」卷六〔奉和狎鷗亭御製韻〕、成俔(1841)	太平人物儘風流。翰墨清談度幾秋?早歲聲華黃閣轄。暮年身世白鷗洲。閒來好蠟東山屐。醉後頻添北海舟。登覽逍遙拚勝賞。江頭百物亦無愁。 松柏貞操貫雪霜。經綸大手老巖廊。名高帶礪山河誓。身近蓬萊日月光。赤鳥乘閒還綠野。青樽邀客瀉金漿。好將詩句酬佳節。堪笑牛山謾獨傷。 表裏湖山岸兩傍。天光水色隱滄浪。層欄偃蹇千尋壯。宸翰昭回萬丈長。咳唾珠璣隨滿壁。縱橫貂珥坐連床。相逢魚鳥爭欣悅。慣識春風笑語香。 襟懷跌宕自無機。鷗鳥雙雙下釣磯。帶雨忽從煙外集。銜魚還向鏡中飛。滄溟影裏相忘久。款乃聲中半醉歸。暫謝紛華就閒曠。旁人錯認一蓑衣。 亭上山橫一抹雲。亭前風水皺晴紋。追隨白鳥閑相似。擺蕩紅塵迴不群。岸草汀花多異色。酒徒詞客策奇勳。日斜興盡相携手。歸路微茫暮景分。 浩蕩鷗邊一水春。翩翩雪羽暗相親。邦家日夜望霖雨。寧負飛潛不負人。 珍重丹青石室盟。金甌名重久叨榮。市朝到處堪乘興。莫起煙霞水石情。 → のんびりする白鷗と亭に登ると見える江辺の物。飲酒と詩を詠む姿。丘の両側に広がる湖と山。空の色と水色が漠然とした青い波。すくと立って壮大な欄干。壁にいっぱい書いている詩文。魚と鳥を見て春風に吹かれながら、談笑する姿。カモメを見たり、大きな波の影の中で悠々自適し、舟歌聞きながら酔って帰ってくる姿。亭の上の山にかかった雲。揺れる風と波。暇に白鳥を見て、俗世から抜け出す考えている姿。奇異な光を出る水辺の丘上の草花。飲酒と作詩し、夕焼けを見ながら楽しんで夕暮れに帰宅する姿。
17	『退溪集』「退溪先生文集」卷之一〔七月望日。狎鷗亭即事。〕、李滉(1843)	奔雲陣陣度簷楹。雨過長江一半晴。隱几笑看爭渡客。漢江樓下雪山傾。歸舟揖揖上前灘。忽掛風帆萬里間。總把向來牽挽力。一時酣寢浪花間。 江中風起雨冥冥。葉上青蛙止復鳴。兩兩漁舟依別岸。晚來收釣入柴荆。望中奇變忽無蹤。日照西雲淡夕容。未露四圍青黛色。唯看千頃白銀鑄。 → 風雨が吹き荒れる江。カエルの鳴き声。夕方、岸に魚船を繋いで帰る人の姿。
18	『眉山集』「眉山先生文集」卷之一〔狎鷗亭〕、韓章錫(1832-1894)	綠楊深處萬蟬秋。亭在南江上上頭。俗子尋眞來別界。主翁遊宦鎮名樓。雨痕初見灘中石。人語微聞月下舟。半夜水聲千古感。蒼茫直欲問沙鷗。 → 緑柳の深いところでセミが鳴きの秋。南側の江辺の一番上にある亭。灘の中の石。月の下にある船から聞こえてくるかすかな人の声。真夜中に水の音を聞きながらメモや対話する姿。

22) 挹清樓

	文献名	記述内容
	『新增東國輿地勝覽』第二卷「東國輿地備考」第一〔京都〕、李符(1530)	“江を臨んでおり、名勝地と称する。”
1	『江漢集』卷一〔秋夜月明 與伯玉 登挹清樓〕、黃景源(1790)	嘉游無定夜。適來遂共娛。秋風響古木。明月照澄湖。蒼茫天際厲。浩蕩波上舳。露晞沙光曙。雲歸橋影孤。吳子喜歌詩。滄浪枕酒壺。脫帽泛中流。飄飄安所徂?迷醉登高樓。長歌又一劑。 放曠遺形骸。心期與俗殊。煙沉四山檜。霜匝三洲蘆。孰云今世士。不如嵇、阮徒? → 夜に友達と遊ぶ姿。古木を渡る秋風。清い湖を照らす明るい月。はるけき空に飛ぶカモメ。 うねる波の上に浮いている鴨。露が乾いてもっと鮮明な砂の光。雲が消えた後、さびしく見える帆影。酔っぱらって高い楼に登って作詩し、飲酒する姿。山の四方の紫吊花森に立ち込めた霧。三洲の葦に降りた霜。
2	『定本 興猶堂全書』詩集 卷一〔夏日挹清樓, 陪睦正字 諸公飲〕、丁若鏞(1762-1836)	臨水紅樓縱目初。綠波如帶繞王居。湖漕舊貢長腰米。浦市新除縮項魚。帥府練兵須宰相。倉曹辟屬賴尙書。憑欄小醉何傷禮?知故城南盡喫蔬。 → 江辺にある赤い楼で見回す姿。都城周辺を帯のように回っている青い波。飲酒。
3	『定本 興猶堂全書』詩集 卷一〔夏日龍山雜詩〕、丁若鏞(1762-1836)	漁舟晚繫綠楊頭。洄口潮來度幸州。要見此翁施網處。黃昏須上挹清樓。(一部) → 漁師を見物するため、夕方に楼に上がる姿。
4	『漢京識略』18c後半	“前に長い江の水が流れて景色がとてもいい。”
5	『眉山集』「眉山先生文集」卷之一〔夏日挹清樓逢徐綱堂沈小陵 共賦〕、韓章錫(1832-1894)	一笑相看非舊顏。蒼然二十二年間。江湖短髮嗟離索。詩酒深燈憶往還。虛擬爲雲送東野。不料今日見方山。登樓更有新知樂。白鳥飛來似我閒。 → 作詩と飲酒しながら、思い出を話す姿。白い鳥。

23) 濟川亭

	文献名	記述内容
1	『四佳集』「四佳詩集」補遺一（東文選）〔漢都十詠 濟川翫月、李承召(1422-1484)〕	月入秋江江水靜，百尺寒臥浮圖影。對月須傾斗十千，何用月團三百餅？清輝冷氣上下徹，森然豎我兩鬢髮。但願長照樽中酒，何知鏡圓與鉤曲？ → 月が出て静かな秋の江。水に映った百尺。月を見ながら飲酒。明るい光と涼し空気。
2	『挹翠軒遺稿』卷三「昨日之事。十年來不可復再。欲爲一詩以就後觀。而昨夜醉甚。曉又餘醒。以動高興。」、朴閔(1514)	偶與漁翁借釣竿。恐教鷗鳥駭朝冠。神仙未覺瀛洲遠。伏熱能侵水府寒。更有何人嘲一餉。自驚勝會竝三難。唯堪付子百年事。不可無詩記此歡。是日。玉堂諸公登濟川亭。爲避暑之飲。 → 集まりで飲酒、作詩、釣りをする姿。
3	『容齋集』「容齋先生集」卷之一〔六月初八日。館中諸公。登濟川亭觀漲。以朝鮮第一江山六字分韻。各作一絶。翌日。追用諸公韻。奉呈求和。〕、李荇(1586)	白水天同遠。青山雨更鮮。若爲招羽客。共醉玉堂仙。 江邊喬木多。太半公侯第。生前不盡歡。留與他人計。 但見丘陵卑。未知洲渚沒。只應雲際山。偃蹇長如一。 滔滔興不盡。不必羨長江。醉後縱橫筆。風流儘少雙。 高談方促席。斜日已嘯山。天遣留餘興。重遊莫作慳。 → 遠く続く白い水と空。雨後、より鮮明な青い山。江辺の多くの高木。低い丘陵。雲に届いた高い山。波を見て楽しむ姿。お酒を飲んで作詩する姿。夕焼けが山に掛けられるまで、談笑する姿。
4	『石洲集』卷之二〔次韻上使漢江泛舟觀漲〕、權輶(1632)	江上和風引上客。清曉肩輿出南陌。笙歌擁路雜輪蹄。兩仙住節臨苔磯。濟川亭子名海國。乘興不辭勞遠跡。東山絲竹繼謝安。赤壁風月追蘇軾。亭前湛湛江水流。島嶼出沒連芳洲。中天睇眇殊未已。更復移尊登彩舟。高談朗詠相許與。座上風標皆舉舉。漁人振拖棹謳發。長網橫江密於組。衆鱗跳復立。沙岸漸近波瀾急。祇爲般遊助歡譁。豈是焚酣快胸臆。徐州秃尾漢陰鱗。取之不復論洪纖。馮夷股慄水仙怒。鱸膾遠道蛟螭酒。酒中樂作仍設鱸。此興已覺超塵界。但憐頃刻割素餐。龍門永失風雲會。歸舟日落浪打蓬。極目煙樹何重重。向來奇事易陳跡。獨留江月當青空。 → 音楽演奏(絲竹)と崖での船遊び(赤壁風月)。亭の前を流れる清い江。島々の水辺に続いている芳草。(日が暮れる前、再びお酒を持って船に乗っている姿。人々と談笑と作詩。漁船や網など漁師が魚を取る姿。魚たちが遊ぶのを見て砂浜で近づいたら急になる波。音楽を聴きながら飲食する姿。日は暮れて遠くに幾重にも見える木。江を照らす月の光。)
5	『谿谷集』「谿谷先生集」卷之八〔夜明亭記〕、張維(1643)	“漢水之陽。直濟川亭之西。有小屋數楹。臨江而峙。規制朴略。覆以白茅。垣以黃土。無棧題欄楯之飾。丹墀刻畫之麗。然而處地爽垲。面勢開豁。澄江碧岫。映帶近遠。雲煙開斂。晨夕異態。頗有觀眺之勝。”(一部) → 高く位置し、開けている展望。近くから遠くまで帯のような清い江と山。雲煙の有無によって朝晩に異なる風景。
6	『松巖集』卷一〔到漢江遇風。乘舟幾覆。入昏僅濟。登濟川亭〕、權好文(1680)	(遠くに見える江上の空に砂煙が立てられ、山のように高い波打つ姿。)早く着いて夜高い楼でのんびりしている姿。
7	『四佳集』「四佳詩集」卷之十四〔漢江樓忘年會席上〕、徐居正(1705)	濟川亭上綺筵開。十二同年走馬廻。冠岳高擢青似黛。漢江新漲綠於醅。長風細雨催興。落日遲遲春滿杯。飽得聖恩歌既醉。樽前莫惜玉山頽。 → 亭の上にながって宴会を開く姿。冠岳山の青く高い峰。新たに量が増した青い漢江。長い風と細い雨。日が暮れる前に歌ったり、酒を飲みながら春を満喫する姿。
8	『四佳集』「四佳詩集」補遺一（東文選）〔漢都十詠 濟川翫月、徐居正(1705)〕	秋光萬頃琉璃靜。畫棟珠簾寒影。長空無雲淨如掃。坐待月出黃金餅。乾坤清氣骨已徹。明光一一數毛髮。午夜深深更奇絕。倚遍欄干十二曲。 → 静かに映している秋の色。片雲一つない空。月が昇るのを待って明るい月を夜遅くまで観賞する姿。
9	『四佳集』「四佳詩集」卷之四〔秋日。登濟川亭。〕、徐居正(1705)	秋樹無聲紅葉稀。江城終日雁南飛。長風萬里孤舟興。輪與登樓送落暉。 → 静かな秋の森にまれに見える紅葉。一日中飛ぶ。長い風に寂しくなった船。楼に登って夕焼けを船に積んで送る姿。
10	『風月亭集』補遺〔漢都十詠。次徐相國韻。〕、李婷(1727)	銀河無風素波靜。老蟾吸此潭底影。江頭似轉白玉盤。雲際已吐黃金餅。高樓樽酒冷相徹。對此清光欺白髮。回頭橫笛一聲來。夜闌似聽霓裳曲。 → 風もなく波も静な銀色の江。雲の間に浮上した月。高い楼で金の餅みたいな月を観賞しながら飲酒する姿。どこかで聞こえてくる音楽。
11	『錦溪集』外集 卷五〔登濟川亭、次朴生韻〕、黃俊良(1755)	樓前清漢接河滸。此是青丘第一奇。弱水三千飛過處。瑤臺九萬縱吟時。牽犀駭客銀瓶倒。驚起眠龍鐵笛吹。乘興擬尋黃鶴去。傍人休笑葛巾欹。 → 楼の前の清い漢江。派手な楼で飲酒、音楽演奏する姿。
12	『私淑齋集』「私淑齋集」卷之四〔題四佳漢都十詠屏風〕、姜希孟(1805)	夜冷江空萬籟靜。簾鉤反掛遊素影。紫煙飛散瑤空闊。水輪半出金作餅。虛明方寸共清徹。夜闌鶴側敬華髮。江樓何處鐵笛聲。清興悠悠滿江曲。 → 涼しく静かな江。紫色の霧が散らばって練り広げられる美しい空。金の餅みたいな月。江辺の楼のどこかで聞こえてくる笛の音。

24) 月波亭

	文献名	記述内容
1	『定本 與猶堂全書』詩集 卷一〔同諸友乘舟至月波亭汎月〕、丁若鏞(1762-1836)	月波亭下扁舟泊。墟里煙生日初落。登樓飲酒下樓歌。時見潮頭大魚躍。白蘋風起波微揚。水面閃閃金鱗光。俄看天際玉輪涌。玻璃碾碧澄泓長。白毫遠射曼溪樹。素練斜抵楊花渡。中流伊軋遊復浴。客衣滿濕江天露。子益・聖淵俱已沒。千載無人管明月。【金三淵昌翁。字子益。申承旨 光洙。字聖淵】 風流今夕屬吾輩。君知此世原飄忽。 → 停の下に船を繋ぐ姿。村に煙が立って日が暮れる姿。楼に上がってお酒を飲んで降りて歌いながら、潮頭で魚を見物する姿。風による爽やかな波に揺れる浮草。黄金の鱗で覆われたような水面。月が出て江に綺麗で深く照らされた姿。遠くの溪樹と江まで照らす月。江の中流で行ったり来たりしていると露に服が濡れた姿。

25) 望遠亭

	文献名	記述内容
1	『列聖御製』卷之五〔題望遠亭〕、成宗大王(1613)	亭興雙眸豈盡看。雲容水態畫應難。晚涼江雨初晴後。更好山脚月上欄。 浩浩乾坤思不窮。一亭高趣水雲中。登臨幾憶桃源客。欲問仙家興異同。 → 亭で見る雲と水。涼しい夜に雨後の月の光。風情のある雲と江水。
2	『芝峯集』卷四〔八月既望赴同年會於望遠亭仍夜泛〕、李暉光(1633)	望遠亭臨江水隈。亭中秋色錦筵開。簷前活畫青山出。檻外長天白鳥來。萬古乾坤今夜月。百年湖海故人杯。清歌玉笛宵將半。不似山陰興盡迴。 → 秋に、江辺にある亭で絵のようにそびえている山とカモメ、月を見て飲酒、音楽観賞する姿。
3	『四佳詩集』卷之五十一〔次望遠亭韻〕、徐居正(1705)	海門斜日更登樓。豪氣元龍未罷休。遠近峯巒來拱揖。一雙鸞鴨對沉浮。喜看膝閣留神筆。宜復蘭亭記勝遊。他日錦袍鑿殿上。可能記我海天頭。 → 夕焼け沈む時、遠近峯と鴨の一組を見る姿。
4	『佔畢齋集』卷之十九〔御製望遠亭〕、金宗直(1789)	華亭翠靄開。雲物畫圖看。翡翠流春渚。芙蓉削雪巒。一毫明物象。萬景極遊觀。天借無憂域。終殊一釣竿。 湖上新亭好。風流作勝遊。几筵延紫翠。樽酒散繆悠。醉喚三湘夢。醒迴六月秋。雲山望不極。高興動滄洲。 勝景古難得。昔人賢不多。華亭非媚目。樂事但因和。風月增詩界。烟雲壯醉窩。笙歌歡不盡。天地似爲麼。 望遠高亭豈厭遊。綠陰松外盡滄洲。滕王傑閣同兒戲。秦穆危樓媿婦謀。風月卷來雲夢夕。水雲看過洞庭秋。人間信有瀛洲興。尊畔應消萬古愁。 混蒼巧妙本無形。匠出烟湖入畫屏。江色灑涵僧眼碧。山光濃逼佛頭青。簾幃翠濕西山雨。雲樹晴搖白鷺汀。吳楚天邊何處是。浩然清興一華亭。 西湖亭子趣無窮。況不羊裘遁世翁。萬斛清輝行地過。一團和氣與天通。江山滿月開圖畫。風月依人活化工。半醉凭欄心更逸。落霞孤碧波中。 亭興雙眸豈盡看。雲容水態畫應難。晚涼江雨初晴後。更好山脚月上欄。 浩浩乾坤思不窮。一亭高趣水雲中。登臨幾憶桃源客。欲問仙家興異同。 → 青い森の間にある華麗な亭。春の水辺に流れている緑色。雪山を削っておいたような蓮華。釣り。湖にあるすっきりする亭。飲酒や談笑しながら、雲山を望む姿。緑の陰松の外がすべて海のような高い亭で、風月と水雲を楽しみながら飲酒する姿。青い空と屏風のような煙湖。乱高下する青い江色と濃く青い山光。雨に濡れた青色の徽章。日が晴れた後、澄んだ森と水辺の白露。穀物が広がっている姿。江山と風月。酔って夕焼けと驚、青い波を觀賞する姿。雨上がり涼しい夕方、山に映った月光。広大な空と地。
5	『風月亭集』卷之二〔暮春日。與伯胤同遊望遠亭。有題。〕、李婷(1727)	望遠亭前三月暮。與君携酒典春衣。天邊山盡雨無盡。江上燕歸人未歸。可誦四顧雲煙堪遣興。相從鷗鷺共忘機。風流似慰平生願。莫向人間學是非。 → 3月の夕暮れに飲酒する姿。遠い山と降り続く雨。江の上を飛んでいた燕が帰る姿。四方に眺める風景。カモメとゴイサギ。
6	『佔畢齋集』卷之十九〔恭和御製望遠亭詩〕、金宗直(1789)	退食五雲間。江山倚柱看。冲融迷浦激。迤邐列岡巒。地勢西南折。天容上下觀。野翁爭席罷。落日在梳竿。 王子愛清曠。乘閑或譙遊。河間聲藉藉。鄴水思悠悠。排比詩中景。探支鴈外秋。華牋有寶唾。飛灑白蘋洲。 食客屏珠履。西湖乘興多。秋涼生薤葉。江調寫雲和。胷效梁王苑。終非邵子窩。古來宗室傳。公視盡么麼。 應共應劉辦勝遊。綸巾羽扇俯芳洲。玻璃影動魚龍戲。羅襪畦空馬蹏謀。兩岸行人官渡晚。幾網商舶海門秋。月明如聽湘靈瑟。胷羨盧家有莫愁。 結構驚頭控遠形。八窓邈迤展新屏。檻前朝海楊花白。郭外攬天母嶽青。小市人歸撐畫舫。遙空鶴下颺回汀。翠華昔日曾觀稼。此是西郊喜雨亭。 乾坤納納莽難窮。一片樓臺壽醉翁。地接鳳城烟樹合。江輪鯉壑海查通。漁歌嫋嫋悲珠客。宸翰煌煌伏弩工。應有野人來撥棹。鄂君香被月明中。 川原百里捲簾看。勝地還應具四難。贏得東平爲善樂。不妨携酒日憑欄。 → 江山。すかに見える干潟。峰。夕焼けが帆柱にかかっているような姿。景色を詠む姿。秋を迎える雁。水辺に散らばれている白い浮草。竹席に座って秋の涼しさを感じながら、音楽演奏(琴)。花のような水辺に映った影と雁とトキが全部食べたような稲穂を見下ろす姿。夕暮れに渡し場を渡る人々。秋の海に浮かんでいる数隻の商売船。明るい月が浮上して作詩する姿。 籠のような岩の上に家を建てて遠景を引き寄せ、屏風のような窓の外の風景を觀賞する姿。前の白波と城郭外の高く青い山。人が市場に戻って空いた船と水辺でばたばたする鶴。農事の見物。広大な空と地。樓臺で老人が飲酒する姿。都城の煙樹。海の船で連結される江。漁師の歌う音。遠くの川と原を見ながら、飲酒、作詩、絵を描く姿。
7	『虛白堂補集』卷三〔屢駕西郊觀稼〕、成俔(1841)	鑾輿曉出向郊垌。龍袞登臨望遠亭。萬隊貔貅連浦激。千橋舸艦塞滄溟。夏王省斂爲侯度。魯隱觀魚戒聖經。聖主與民同樂意。西成大有得安寧。 → 明け方に郊外に向かって亭に登って見下ろす姿。水辺に並んでいる武士達。青い江の上の多くの帆掛け船。

26) 淡淡亭

	文献名	記述内容
1	『慵齋叢話』卷之二、成俔(1525)	“又臨南湖。作淡淡亭。藏書萬卷。招聚文士。作十二景詩。又作四十八詠。或張燈夜話。或乘月泛舟。或占聯或博奕。絲竹不絕。崇飲醉譁。一時名儒無不締交。無賴雜業之人。亦多歸之。棋局與子皆用玉。亦用金泥塗字。又令人織絢綉。即縱筆揮灑。眞草亂行。人有求者。即舉與之。” → 万巻の本を積み上げ、作詩。夜に談笑、月の下で船遊び、作詩(聯句)、囲碁や将棋、音楽、飲酒などをする姿。
2	『月沙集』「月沙先生集」卷之十六(倦應録上)〔淡淡亭舊基傍。有村人小亭。與李子敏輩醉遊。主人求題。口占贈之。〕、李廷龜(1636)	公子名亭倚翠巒。笙歌遺跡曉雲寒。風光留作村翁占。輪與遊人盡意看。 → 側の青い峰。笙を演奏しながら遊んでいたところで、夜明けの冷たい雲。
3	『三灘集』卷一〔淡淡亭十二詠〕、李承召(1515)	西山日暮片雲飛。夜來江上雨霏霏。煙沈月黑迷歸棹。浦口新波沒釣磯。【麻浦夜雨】 江沙如雪水如苔。島外凝嵐撥不開。別有一般堪畫處。輕風斜曳過山來。【栗島晴嵐】 當面春山小雨餘。嬌雲弄日捲還舒。初看觸石生膚寸。便覺溶溶滿太虛。【冠岳春雲】 露洗長空月正明。渡頭人靜晚潮平。刻溪高興依然在。天水相涵一樣清。【楊花秋月】 西南山豁海潮通。萬里舟航會此中。日暮波恬風又熟。片帆歸帶落霞紅。【西湖帆影】 芳草和煙覆暖沙。朝飛暮宿此爲家。無端驚起動相喚。何處歸舟響櫓牙？【南郊雁聲】 十里平蕪似翫齊。風吹雨過綠萋萋。一年春色休題品。弱柳妖花價盡低。【仍火芳草】 江上紅亭帶夕陽。斷霞粧點衆山光。輞川更有詩中畫。盡收佳景入奚囊。【喜雨斜陽】 處處柴荆面水開。漁舟江上小如杯。蓬窓雨暗煙波闊。一點寒光寂寞回。【龍山漁火】 腰鎌出郭向山阿。時復長歌更短歌。日暮倉皇歸路暗。過江風雨一番多。【蠶嶺樵歌】 一片苔磯浸水碧。滿江風雪不禁寒。披裘日閑閑垂釣。準擬嚴光七里灘。【盤磯釣雪】 家家塼埴作生涯。林表白煙無斷時。最好斜陽微雨後。山南山北任風吹。【瓮村薪煙】 → 西側の山に沈む日と漂う片雲。夜になって江辺に降る雨。霧の立ち込めて月が暗くて船が見えない姿。浦口で岩の上に波が生ず姿。【麻浦夜雨】 白い雪のような江の砂と青い苔。向こうの島と山、風。【栗島晴嵐】 近くの山に層雨が降った後、空にいっぱいある雲と日。【冠岳春雲】 霧が降りた後、明るい月。人がいない渡し場の頭と穏やかな夕暮れの潮。清い空と水【楊花秋月】 西南開けた山とその間の海潮。集まっている船。夕暮れ後、穏やかな波と風。小船の帆に掛かっている赤い夕焼け。【西湖帆影】 花のような草と薄い霧に覆われた暖かい砂。櫓をこぐ音。【南郊雁聲】 風と雨に濡れて生い茂った青い草が広く広がっている姿。柳と花？ 【仍火芳草】 江上にある夕焼けを帯びた赤い亭。夕焼けによって光る山。【喜雨斜陽】 水辺あちこちの編戸。江辺にある杯のように小さな漁船。雨が降り、暗くて霧に包まれた姿。【龍山漁火】 苔むした青い釣り場石。吹雪の中釣りする姿。【盤磯釣雪】 夕方に層雨が降った後、風が吹くとき、林の外の家ごとに立ち上る白い煙の良さを詠む。
4	『私淑齋集』卷之一〔淡淡亭十二詠〕麻浦夜雨、姜希孟(1805)	寒雲漠漠水悠悠。兩岸青楓無盡愁。坐對孤燈過夜半。一江風雨暗滄洲。 → 冷たく漠々とする雲と悠々と流れる水。両側の丘にある緑の紅葉。寂しい灯台を一つ置いて向かい合って夜を過ごしたら、江に満ちた雨風で暗くなる青い水辺。
5	『東文選』卷之二十二〔淡淡亭〕、李克堪(1478)	夕陽西下水東流。渺渺江山無限愁。天地有窮吾亦老。此身從付白鷗洲。 → 夕焼けと江の流れ。はらかな江山。

27) 小岳樓

	文献名	記述内容
1	『樊巖集』「樊巖先生集」卷之三〔朝登小岳樓。主人命婢作琴歌。少頃。發向幸州。斫鱸設飯。〕、蔡濟恭(1824)	水國鷄鳴星斗搖。幸州城下生早潮。盃酒天晴小岳樓。琴歌喚罷董嬌嬌。(長年發船如馬疾。孔巖楊花倏欲失。飛度叢巖海門豁。赤旭照耀檣頭出。海客鱸魚噉曉釣。側掛船傍頗潑潑。促令買來不論價。咫尺貪食蛟龍奪。衝舷騰躍有餘怒。鬢鬢開張如欲逸。饗人妙法得支離。篷底磨刀糞葉割。列礎層層散綺縠。排盤歷歷鋪霜雪。葦魚瑣小不足飽。調以膏醬爐火撥。騰筋一嚼軟欲解。四座叫美喉香發。茲遊跌宕天所酬。清觴異味日又吉。沙邊繫纜莫遽解。江海清歡此第一。君不見公卿五鼎多雋味。鷺刀縷切日復日。借問得有眼前江山與雲月。 → 晴れの日、江辺の村で鳥が鳴く、星が光る姿。幸州城の下の朝波。楼で音楽演奏(琴)した後、船に乗って日の出を見ながら海に向かって行き、魚を食べたりする姿。
2	『圃巖集』卷之一〔小岳樓共賦〕、尹鳳朝(1767)	一逕君家問柳尋。梅花寂歷擁爐深。身驚桑海千年夢。樓有江湖萬里心。松朮醞開秋後醞。薜蘿清入夜闌琴。紛紛世事無妨醉。誰學狂歌過華陰。 隨身江月夜相尋。一部離騷酒盞深。老去向人多白眼。醉來儲淚向丹心。劍斫斫地頗停。山響浮簾乍振琴。慷慨過悲君勿恠。孤懷蕭瑟際窮陰。 → 江に映った月を見に来て飲酒する姿。歌う。琴。一人で懷抱を解く姿。
3	『樊巖集』「樊巖先生集」卷之四〔同内舅暨諸朋友 船訪小岳樓〕、蔡濟恭(1824)	一嘯披簑背郭門。百年河朔赴深樽。下驢天借江湖色。(帶雨棋從楊柳村。帆頂虹留金浦赤。霧中山出桂陽痕。世間誰識希夷樂。除是浮鷗與共論。元氣迢迢接海門。葡萄新漲不須樽。)定知宿帆巴陵岸。笑問買魚何處村。橫簾平江煙送暮。亂雲遙嶼雨留痕。皇華一去仙峯冷。韶濩蒼茫更可論。 → 河朔飲を楽しみに行く時に雨が降りそうなので、居酒屋で碁を打ちながら、日が昇るのを待っている姿。霧の中の山とカモメ。青い波を見ながら船に乗っている姿(移動)。笛の音が広がる江の上の煙氣。雲で覆われた遠い島。
4	〔木寛朝歌〕、李秉淵(1741)	曙色浮江漢。舳舻隱約參。朝朝轉危坐。初日上終南 → 夜明けに漢江に行き、楼の角で釣りをする姿。毎朝、楼で座って山の上に昇る日出を見る姿。

28) 七松亭

	文献名	記述内容
1	『新增東國輿地勝覽』第三卷「東國輿地備考」第二〔漢城府〕名勝條、李荇(1530)	“南山の麓にあり、亭はないが、七本の松があるので、そのように名付けられたものである。登って遠くを眺めるのに適う。”(一部)
2	『林下筆記』卷之三十二(句一編)〔七松亭〕、李裕元(1814-1888)	亭在雙檜亭東。只存右松幾株。堪輿家____ 九鳳藏鼻穴。望長安。樓臺滿地蒸花柳。紅綠模糊一氣中者。古人詩____ 紅葉樓 ____。 → 遠く都城中まで見える。樓臺の前にいっぱいの花々と柳。
3	『芝山集』「芝山先生文集」卷之一〔題七松亭〕、曹好益(1883)	七株元與古人期。偃蓋曾經鶴踏枝。定作青牛扶道骨。何須紺髮鍊霜脂。巉巖化石明朝事。冉冉逢仙此日奇。白甲冰容誰更老。姑山正合對峨眉。 → 七本の松と鶴。
4	『雲養集』卷之二「北山集」〔閏月上旬、陪前遊諸公、復飲于七松亭〕、金允植(1835-1922)	琮琤潤珮翳然林，時見名亭載酒尋。松老剝看千歲色，春濃博得萬家心。如今倦宦休多暇，從古高人隱不深。穩藉賞花兼賞雨，癡雲解事弄晴陰。 → 宝玉のように流れる小川と生い茂った林。お酒を持って有名な亭を探し回る人々。千年はなつたような老松と村の人々の心を揺さぶる濃い春の気配。染に花を觀賞し、雨見物していると雲が晴れた曇ったする姿。
5	『雲養集』卷之二「北山集」、〔重陽日、漢山、瑞巖、石樵、怡觀、巴江、素山、松亭主人趙菊史年七十、俱會于楓林 甘泉〕、金允植(1835-1922)	滿壑秋聲一小亭，星疎河薄遠林冥。石泉寒月澄心白，楓葉新霜半面青。筆下香糕題爛漫，風前醉帽任飄零。主人詩骨清如許。七十年來落木聽。 → 小さな亭に満ちた秋の谷の音。遠く少ない星と暗い林。冷たい月光で晴れて岩の泉。霜が降りて葉の半分が青い紅葉。餅や帽子を前において作詩する姿。清い詩情と落落長松の音。
6	『雲養集』卷之二「北山集」、〔三月二十二日、鶴農 金丈邀飲于七松亭、素山、巴江、倉山、涇陵、東渚會焉〕、金允植(1835-1922)	林鳥相呼白日間，雨餘花木照堂顏。數人芳草行緣澗，一枕高樓臥看山。不妨枯筇侵夜去，更憐早盞伴春還。知君久惜輞川別，家在松聲岳色間。 → のどかな昼の林の中の鳥の鳴き声。雨後の化木。春に芳草の道を経て溪流に沿って高い楼で横にして山を見る姿。

29) 彰義門

	文献名	記述内容
1	『弘齋全書』卷二「春邸録二」〔国都八詠〕(紫閣觀燈)、正祖(1814)	四月繁華最漢京。金吾放夜好占晴。紅竿歷日燈爲市。紫陌通宵火作城。撲地烟花相照耀。滿天星月不分明。終南高眺人如霧。幾處笙歌答泰平。 → 四月に一番賑やかな街。夜空の星と月が雲ってくらい都城中いっぱい光っている烟花。南山に登って見下ろし、笙を演奏する多くの人々の姿。

付録3. 各名所に関する絵画の目録

番号	名所	関連絵図
1	洗心臺	〈弼雲臺賞春〉鄭敵, 1740~50 《西園雅會帖》中〈玉洞陟崗〉1739年、Leeum 美術館の所蔵 《西園雅會帖》中〈西園小亭(三勝亭)〉謙齋 鄭敵(1740) 《西園雅會帖》中〈漢陽全景(三勝眺望)〉謙齋 鄭敵(1740)
2	蠶頭峰(南山)	無し
3	弼雲臺	〈登高賞花〉林得明(1786) 〈弼雲臺〉金允謙(1770) 〈弼雲臺〉張始興(18世紀後半) 〈弼雲臺〉謙齋 鄭敵(1751)
4	箭串橋	〈箭串橋〉 国立中央博物館
5	北屯	無し
6	清風溪	〈清風溪〉 謙齋 鄭敵(1730) 高麗大の所蔵 〈清風溪〉 謙齋 鄭敵(1739) 国立中央博物館 〈清風溪〉 謙齋 鄭敵(1751) 潤松美術館 〈清風溪〉 謙齋 鄭敵(1755) 国立中央博物館 《北岳十景》中〈青楓溪〉權信應(1753)
7	後彫堂	無し
8	雙檜亭	無し
9	興仁門(東池)	〈東門祖道〉(1746) 〈興仁門蓮華〉
10	天然亭(西池)	無し
11	南池	無し
12	蕩春臺	〈蕩春臺〉 謙齋 鄭敵 1748年 19C, 1884, 1925年
13	洗劍亭	〈洗劍亭〉 謙齋 鄭敵(1748) 国立中央博物館 〈洗劍亭〉 劉淑(19C) 国立中央博物館 〈洗劍亭〉 李道榮(1925) 個人の所蔵
14	夾澗亭	無し
15	泉雨閣	《金吾契帖》中〈泉雨閣〉金允謙(1768)
16	獨樂亭	《壯洞八景帖》中〈獨樂亭〉謙齋 鄭敵(1751) 潤松美術館の所蔵 《壯洞八景帖》中〈獨樂亭〉謙齋 鄭敵(1755) 国立中央博物館の所蔵 《壯洞八景帖》中〈獨樂亭〉張始興(18世紀後半) 潤松美術館の所蔵
17	聽松堂	《壯洞八景帖》中〈聽松堂〉 謙齋 鄭敵(1751) 潤松美術館の所蔵 《壯洞八景帖》中〈聽松堂〉 謙齋 鄭敵(1755) 国立中央博物館の所蔵
18	晴暉閣	〈晴暉閣〉 謙齋 鄭敵(1755) 国立中央博物館の所蔵 〈玉流洞〉 權信應(1728-1786)
19	立石浦	
20	楊花津	
21	狎鷗亭	〈狎鷗亭圖〉 謙齋 鄭敵 〈狎鷗亭〉 謙齋 鄭敵 〈狎鷗清賞〉 金碩臣
22	挹清樓	
23	濟川亭	
24	月波亭	無し
25	望遠亭	
26	淡淡亭	〈淡淡亭〉 金碩臣(1758~?)
27	小岳樓	〈木覓朝暉〉 〈小岳樓〉 〈錦城平沙〉
28	七松亭	無し
29	彰義門	《壯洞八景帖》中〈彰義門〉 謙齋 鄭敵(1755) 国立中央博物館の所蔵 《壯洞八景帖》中〈白雲洞〉 謙齋 鄭敵(1755) 国立中央博物館の所蔵

付録4. 四季の景物と名所数

季節	景物	江戸名 所花暦	東都 歳時記	名所数			
				その他	寺社	園地等	
春	鶯	4	4	5	3	2	0
	梅	10	12	19	6	7	6
	椿	5	3	6	2	4	0
	桃	5	5	8	4	2	2
	桜	35	48	61	11	49	1
	梨花	3	2	3	2	1	0
	山吹	3	5	7	1	4	2
	すみれ	2	0	2	2	0	0
	桜草	2	4	5	3	0	2
	藤	9	6	10	3	7	0
夏	つつじ	4	8	8	2	5	1
	不如帰	4	10	10	8	2	0
	牡丹	5	6	7	0	3	4
	おうち	1	0	1	0	1	0
	社若	3	5	7	1	4	2
	卯花	2	3	4	2	2	0
	芍薬	0	2	2	0	0	2
	橘	1	0	1	0	1	0
	水鶴	2	5	5	5	0	0
	合歓木	1	1	1	1	0	0
秋	蛍	5	7	9	8	1	0
	蓮	3	8	8	6	2	0
	納涼	2	12	12	11	1	0
	みそぎ	1	0	1	0	1	0
	朝顔	1	2	3	0	0	3
	七草	1	1	1	0	0	1
	萩	2	10	10	0	9	1
	花野	0	5	5	5	0	0
	月	5	14	16	15	1	0
	虫	3	11	12	11	1	0
冬	菊	2	6	7	0	0	4
	白膠木	0	2	2	2	0	0
	紅葉	8	14	18	2	15	1
	寒菊	1	0	1	0	1	0
	水仙	1	0	1	0	0	1
	山茶花等	1	0	1	1	0	0
	蓮理の楠	1	0	1	1	0	0
	松	3	0	3	0	3	0
	枯野	1	0	1	1	0	0
	千鳥	3	4	5	5	0	0
雪	9	20	23	14	9	0	
計				312	138	138	36

資料：樋口忠彦・杉山晃一・横山隆二郎 (1981): 江戸の四季の名所について. 第16回日本都市計画学会学術研究発表会.